

フランス語の従属節中の倒置と情報構造

ーコーパスを用いた機能言語学的研究ー

谷口 永里子

謝辞

本論文の執筆にあたり、お世話になりました多くの方々に感謝申し上げます。

東郷雄二先生には、修士課程に進学した日から 12 年という長い期間お世話になりました。先生の授業や勉強会、個人面談を通して、言葉の面白さ、奥深さを学びました。先生が退官されてからも継続的に指導していただき、沢山のご助言を賜り、研究の方向性を示していただきました。深く感謝の意を表します。

守田貴弘先生には、論文完成の最後の最後まで、丁寧なご指導をいただきました。執筆が遅く多々お手数をおかけしましたが、先生のご指導がなければ博士論文として完成させることはできませんでした。心より感謝申し上げます。

副査の西山教行先生には、審査会にて貴重なご指摘をいただきました。堀口大樹先生には、ロシア語の観点からのご指摘や貴重なご意見を頂戴しました。青山学院大学の金子真先生にも、副査を引き受けていただきました。金子先生には、学会発表や研究会の際にも倒置の現象について多くのご意見をいただき、勉強させていただきました。改めて御礼申し上げます。

そして、東郷研の先輩、後輩の皆様には、勉強会で議論の機会をいただき、多くのことを教えていただきました。また、論文執筆中には、励ましの言葉で支えていただきました。また、非常勤先の先生方にはいろいろとご配慮いただき、激励の言葉を賜りました。そしてインフォーマント調査にご協力くださった先生方や友人は、いつも快く助けの手を差し伸べてくださいました。本当に有り難うございました。ただし本論文の不備につきましては、全て筆者に帰するものです。

最後に、長い間そばで応援してくれた家族、フランス語や言葉の研究のきっかけをくれた天国の母に、心から感謝いたします。

2023 年 2 月
谷口永里子

目次

第1章 序論	1
1.1. 本論の分析対象	1
1.2. 本論文の目的	4
1.3. 本論の構成	8
第2章 概念の定義と先行研究の概観	10
2.1. 本章の目的	10
2.2. 先行研究における倒置と情報構造	10
2.2.1. 従属節中の情報構造について	10
2.2.1.1. 従属節中の情報構造を認めない立場: Komagata (2003)	10
2.2.1.2. 全ての従属節に情報構造を認める立場: Partee (1996), Fuchs (1997)	12
2.2.1.3. 断定を表す従属節にのみ情報構造を認める立場: 平塚 (2002), Lahousse (2011)	14
2.2.2. Lahousse (2011) と Marandin (2011) の倒置の分類と焦点の範囲	17
2.3. 本論文で使用する概念の定義	22
2.3.1. 「情報の重要度」の定義	22
2.3.2. 「焦点」の定義	25
2.4. 情報の重要度に関連する各要素の特徴	27
2.4.1. 主語の特徴	27
2.4.1.1. 主語名詞句の長さ	27
2.4.1.2. 主語の定性	29
2.4.1.3. 主語の指示対象の有生性	30
2.4.1.4. 対比が含意された主語	30
2.4.2. 動詞句の特徴	32
2.4.2.1. 意味内容が希薄な動詞	32
2.4.2.2. 先行詞との意味的なつながりが強い動詞	35
2.4.2.3. 助動詞の有無	36
2.4.2.4. 否定	37
2.4.2.5. 直説法と接続法	37
2.4.2.6. 受動態	38
2.4.2.7. 時制	39
2.4.3. その他の補語の特徴	40
2.4.3.1. 直接目的語・間接目的語の有無	40
2.4.3.2. 状況補語	42
2.5. まとめ	43

第3章 従属節中の主語名詞句の倒置と情報構造	45
3.1. 本章の目的	45
3.2. データの概要	45
3.2.1. データ収集の方法	45
3.2.2. データ収集の結果	48
3.3. 従属節ごとの倒置の特徴	52
3.3.1. 関係節中の倒置	53
3.3.1.1. 制限的關係節	54
3.3.1.2. 非制限的關係節	60
3.3.2. 補文と間接疑問の中の倒置	62
3.3.2.1 動詞に直説法を用いる補文	62
3.3.2.2. 動詞に接続法を用いる補文	64
3.3.2.3. 間接疑問	67
3.3.3. 副詞節	69
3.3.3.1. 時間を表す副詞節	69
3.3.3.2. 比較を表す従属節	74
3.3.3.3. 目的を表す副詞節	77
3.3.3.4. sans que	79
3.3.3.5. 理由を表す副詞節	80
3.4. 倒置の要因	82
3.5. まとめ	85
第4章 従属節中の場所句倒置	88
4.1. 本章の目的	88
4.2. 収集したデータおよび各従属節の内訳	90
4.3. 関係節中の場所句倒置	92
4.4. 補文中の場所句倒置	96
4.5. 副詞節中の場所句倒置	100
4.5.1. 時間を表す副詞節	100
4.5.2. 比較を表す副詞節	102
4.5.3. 目的を表す副詞節	103
4.5.4. 理由を表す副詞節	104
4.5.5. 譲歩を表す副詞節	106
4.6. まとめ	107
第5章 従属節中の倒置主語と焦点	109
5.1. 本章の目的	109
5.2. 調査の概要	111

5.2.1. 従属節中の主語の焦点化テストの概要	111
5.2.2. 分析対象	113
5.3. 従属節内の倒置された主語と焦点	115
5.3.1. 制限的關係節内の倒置主語	115
5.3.2. 接続法を用いる補文と間接疑問の主語と焦点	119
5.3.3. 副詞節中の倒置主語と焦点	120
5.3.3.1. 主節に前置された副詞節と焦点	121
5.3.3.2. 主節に後置された副詞節の主語と焦点	124
5.4. 焦点と倒置の頻度	126
5.5. 従属節中の倒置された主語と対比	128
5.6. まとめ	130
第6章 結語	132
6.1. 本論文のまとめ	132
6.1.1. 各章の概括	132
6.1.2. 情報の重要度と焦点	133
6.1.3. 倒置の要因	137
6.1.4. 場所句倒置	139
6.1.5. 従属節のカテゴリーと倒置	140
6.2. 残された課題	141
参考文献	143

第1章 序論

1.1. 本論の分析対象

本論において分析の対象とするのは、下記のようなフランス語の関係節や補文、副詞節の内部の主語名詞句が倒置される現象である。(1) が制限的關係節、(2) が補文、(3) が時間を表す副詞節で、それぞれ主語名詞句が動詞句の後に置かれている例である¹。

- (1) [...] l'émotion que ressent un lecteur de roman, un auditeur de concert, n'est pas une corde vibrante qui donne la même note [...]
(Gracq J., *En lisant, en écrivant* 1980: 167)
Lit. [...] the emotion which feels a reader of novel, a listener of concert, is not a vibrating string that gives the same note [...]
- (2) Et je vis qu'errait sur le quai une sorte de petite fille en blue-jeans
(Bonneyoy.Y., *Rue traversière et autres récits en rêve*, 1987: 12-13)
Lit. And I saw that was wandering on the platform a kind of little girl in blue jeans
- (3) J'étais là à décrocher quand s'est produit chez lui un mystérieux dé clic.
(Degaudenzi.J-L., *Zone*, 1987: 105)
Lit. I was there picking up when happened in him a mysterious click.

このような倒置は、文体的倒置と言われる現象であり、単文や主節においても生起する。主節の倒置の場合、場所句倒置 *inversion locative* (例(4b))、絶対倒置 *inversion absolue* (例(4c)) と呼ばれる現象もある。

- (4) a. Alors, entra un soldat.
Lit. Then entered a soldier.
- b. Dans la chambre se trouvait une grande horloge.
Lit. In the bedroom was a large clock.

¹ フランス語の例文では、分析対象とする従属節部分に下線を引き、主語をイタリックで表す。また、英語訳を Lit. の後に示す。ただしフランス語の倒置の例の場合、英語としては不自然であっても、フランス語の動詞－主語の語順を反映させ、英語訳も動詞－主語の語順で表す。

また、コーパスから収集した例文および先行研究から引用する例文には出典を付す。出典のない例文は作例であり、インフォーマントによるチェックを受けている。

c. Surviennent deux étrangers.

(Le Bidois 1952: 348)

Lit. Arrive two strangers.

ただし文体的倒置や絶対倒置は、下の例のような疑問文や感嘆文、挿入句における倒置とは異なるものである。疑問文や感嘆文では、主語代名詞が倒置されるが、文体的倒置は主語が名詞句である場合に限定される。

(5) a. Maurice est-il là ?

Lit. Maurice, is he there?

b. Avez-vous des frères ?

Lit. Do you have brothers?

(6) a. Est-il sympathique !

Lit. How is-he friendly!

b. Combien de fois m'a encouragé ma mère !

Lit. How many times did my mother encourage me!

(7) « c'est bon, dit-elle, tout est prêt. »

Lit. "It's good, she said, everything is ready."

本論では、(5)~(7) のような疑問文や感嘆文、挿入節における主語の倒置は分析対象から除外し、主に従属節中の主語名詞句の倒置を分析対象とする。また、分析対象とする従属節は、関係節、補文、副詞節とする。副詞節としては、時間を表す副詞節、比較を表す副詞節 (例(8) (9))、目的を表す副詞節 (例(10))、*sans que* 'without that' 節 (例(11))、理由を表す副詞節 (例(12))、譲歩を表す副詞節 (例(13)) を扱う。

(8) [...] cette initiation graduelle était érotiquement plus captivante que ne l'aurait été une licence d'un seul coup totale. (Matzneff G., *Ivre du vin perdu*, 1981: 54)

Lit. [...] this gradual initiation was erotically more captivating than would have been a one-shot license.

(9) Comme le dirait mon professeur de math, s'il passait par là, « Il n'y a pas lieu d'être fière, n'est-ce pas, mademoiselle Lecler ? »

(Aventin C., *Le Cœur en poche*, 1988: 49)

Lit. As would say my math teacher, if he experienced that, "There is no reason to be proud, is it, Miss Lecler?"

(10) Et il lui fallait un après-midi de funérailles, un Manivelle retrouvé sur la tombe de Vincent pour que s'opère la fusion, le transfert.

(Thérôme V., *Bastienne*, 1985: 128)

Lit. And he needed an afternoon of funeral, a crank found on the grave of Vincent in order that takes place the merger, the transfer.

- (11) il importe que ces postes soient réservés à d'authentiques représentants de la race polonaise, sans que s'interpose un élément non national connaissant mal les traditions du véritable peuple polonais...
 (Poirot-Delpech.B., *L'été 36*, 1984: 216-217)
 Lit. it is important that these positions be reserved for authentic representatives of the Polish race, without that intervenes a non-national element unfamiliar with the traditions of the true Polish people...
- (12) C'est le métaphysicien bégayeur au visage concassé qui, [...], passera quelques mois à Rome où tu l'as déjà rencontré parce que ne comptent pour toi ni le temps ni l'histoire : c'est Ballanche. (D'Ormesson, J., *La Douane de mer*, 1993: 170)
 Lit. It is the stuttered metaphysician with a crushed face who, [...], will spend a few months in Rome where you have already met him because do not count for you nor time nor history: it's Ballanche.
- (13) Freud, je crois, n'a jamais renoncé à qualifier la psychanalyse de « psychologie des profondeurs » même quand profondeur est devenue surface [...], même si sous une surface ne se rencontre jamais qu'une autre surface, comme ne l'ignore pas celui qui pèle un oignon (Pontalis J.-B., *Traversée des ombres*, 2003: 58)
 Lit. Freud, I believe, never renounced qualifying psychoanalysis as "depth psychology" even when depth has become surface [...], even if under one surface is ever encountered only another surface, as does not ignore it the one who peels an onion....

以上のような関係節、補文、副詞節中の倒置を分析対象とするが、接続詞の後が動詞句である場合と、接続詞と動詞句の間に状況補語がある場合を区別して考察を行う。なぜならこれらの二つの場合では、語順だけではなく、情報構造の面からも差異があるためである。例えば、英語の単文において、状況補語が文頭に置かれる倒置は、「場所句倒置」と呼ばれている。

- (14) a. A lamp was in the corner.
 b. In the corner was a lamp. (Bresnan 1994: 75)
- (15) a. My friend Rose was sitting among the guests.
 b. Among the guests was sitting my friend Rose. (*ibid.*)
- (16) a. The tax collector came back to the village.
 b. Back to the village came the tax collector. (*ibid.*)

場所句倒置では、その場所における、主語の指示対象の存在や出現を表す傾向があるとされている。文体的な倒置が稀である英語においても、倒置を引き起こしやすい特徴として、状況補語が文頭にある場合があると考えられる。

フランス語の従属節中の場所句と倒置の関係に関しては、Lahousse (2011) が時空間を表す要素が従属節中の倒置された動詞よりも前にあるという特徴が、倒置の要因となりうるということを指摘している。しかし、その中で扱われている時空間を表す要素は従属節の前の主節に含まれていたり、中性代名詞 « y » ‘there’の例が多く、従属接続詞と動詞の間に場所句が置かれた例については、これまで十分に分析されていないことから、節頭を動詞が占める場合と、節頭が状況補語である場合を分けて分析する必要があると考えられる。したがって本論文においては、第3章で節頭を動詞が占める倒置について扱い、第4章では節頭が状況補語でありその後動詞が来る倒置の例について分析を行うこととする。

1.2. 本論文の目的

本論文の目的は、1.1 節で示したようなフランス語の従属節中の倒置を、情報構造の観点から分析することによって、従属節の中にも情報構造が存在することを示すことである。本節では、まず伝統的な倒置の分析の概要について述べ、主節と従属節中の倒置に関する情報構造の観点からの分析について簡単にまとめる。そのうえで、従属節中の倒置を分析するには、情報構造上の機能である主語の焦点化や脱トピック化だけでは十分に説明できないことを指摘する。

伝統的にフランス語の主語名詞句の倒置について、様々な記述的・理論的研究がなされてきた。記述的な研究は Blinkenberg (1928) に始まり、Le Bidois (1952) や Wall (1980) が、フランス語の倒置を含む語順に関する記述を行ってきた。その中には、倒置の例の記述と、主語や動詞句の統語・意味的特徴と倒置の傾向について記述されている。Le Bidois (1952) は無標の語順では文法的主語と心理的主語は一致しやすいが、倒置の場合は、文法的主語が心理的述語を担い、文法的述語が心理的主語を担うと指摘している²。Wall (1980) では、従属節中の倒置に関して、主語名詞句や動詞句の特徴と倒置の例の記述が行われている。生成文法の観点からは、主語の移動についての統語的操作や、文体的倒置に関わる統語的特徴についての考察が行われている (Bonami et al. 1998; 1999)。先行研究において明らかにされてきた倒置の特徴と、情報の重要度との関係については、第2章で概観する。

また、機能言語学的な立場から Bailard (1981) は語順の問題を扱い、Wh 疑問文や文体的倒置などの倒置には、その節の構成要素を際立たせ、焦点を当てる機能があると説明している³。さらに Bailard (1981) は、関係節や補文における倒置された主語

² « Le sujet psychologique, dit Herman Paul (1), est le groupe d'idées qui est d'abord présent à l'esprit du locuteur ; le prédicat psychologique est ce qu'on ajoute à ce sujet. » (Le Bidois 1952: 346)

³ “Subject inversion is acceptable in French if the clause where it occurs (i) contains some information unexpected in the discourse context given ; or (ii) has the property [+focusing]” (Bailard 1952: 21)

は「重い主語 heavy subject」であるとも言及している。ただし、「焦点 focus」の定義や、際立ちが与えられる要素がどこにあるのかなどは明確に述べられていないという点と、主語が重いとは言えない倒置の例もあるという問題点があった。

その後、倒置の研究では情報構造の観点からの分析が主流となっていた。東郷・大木 (1986) では、単文や主節の文体的倒置や絶対倒置の機能は、主語の脱テーマ化と主語の焦点化であると主張している。(17) がテーマとレームの定義、(18) が焦点の定義であり、(19) の仮説が提示されている。

- (17) テーマとは発話の出発点であり、いわゆる文の主題を表す。基本語順を持つ文では文頭の主語が無標のテーマである。レームはテーマについて述べられることをあらわす。 (東郷・大木 1986: 2)
- (18) メッセージのなかで、話し手（書き手）が最も聞き手（読み手）に伝えたい重要な情報のこと (東郷・大木 1986: 1)
- (19) 倒置は主語を無標のテーマの位置からはずし（脱テーマ化）、さらに無標の焦点の位置に移動させる（焦点化）という談話機能上の操作である。同時に前置要素がある場合には、主語倒置は主語の後置によって空いた無標のテーマの位置に、文中の他の要素を移動する（テーマ化）ための談話機能上の操作でもある (東郷・大木 1986: 3)

東郷・大木 (1986) において焦点は、レームの一部と考えられている。下の例では、主語の *la guerre* 「戦争」と *les soldats* 「兵士」が発話において重要な情報として提示されていると考えられている。

- (20) *Eclata la guerre.* (東郷・大木 1986: 1)
Lit. Broke out *the war.*
- (21) *Derrière les cavaliers marchaient les soldats.* (*ibid.*)
Lit. Behind the cavalry were working *the soldiers.*

また主節の文頭に場所句が置かれ、その後が倒置である例（場所句倒置 *inversion locative*）に関して、文頭の場所句と動詞がテーマを表し、主語がレームとなる場合と、場所句のみがテーマを表し、動詞と主語がレームとなる場合があるとされている (Fuchs & Fournier 2003, Fuchs 2009)。(22) は、文頭の状況補語 *au fond du jardin* と動詞 *est* が、テーマとなり主語を導入する。(23) では、状況補語 *Dans l'armoire* がテーマ、倒置された動詞と主語の部分 *étaient rangées les chaussures* がレームであり、レーム内の主語 *les chaussures* が焦点である。

- (22) *Au fond du jardin est le couvent aux fenêtres ouvertes.*
Lit. At the end of the garden is *the convent with the open windows.*

(Proust; in Fuchs & Fournier 2003: 91)

- (23) Dans l'armoire étaient rangées *les chaussures*. (= « ce sont les chaussures qui se trouvaient dans l'armoire ») (Fuchs 2009: 36)
Lit. In the closet were stored *the shoes*. (= "These are the shoes that were in the closet")

このように主節の倒置については、主語の焦点化やレーマ化、脱トピック化、動詞のテーマ化などの機能が挙げられてきた。そして従属節中の倒置に関しても、先行研究では主に焦点やトピック、テーマ・レーマの概念を用いて分析されてきた。例えば Fuchs (1997) は、関係節中の倒置された主語はレーマ化され、動詞はテーマ化されると言及している。例えば、(24) では動詞 *traquaient* がテーマ的に働き、動作主を表す主語 *les policiers* をレーマとして導入する役割を果たすと述べている。ただし、*les policiers* が焦点であるかについては触れられていない。

- (24) Il comprit qu'il tenait le gibier que traquaient *les policiers* : la jeune fille était en sueur (Decoin; in Fuchs 1997: 164)
Lit. He understood that he was holding the game that were tracking *the police*: the young girl was sweating

このように従属節中の倒置についても情報構造上の概念を用いて分析する研究が多いが、テーマ・レーマやトピック・焦点が従属節中に存在するか、つまり従属節中の情報構造が存在するかどうかは、研究者によって見解が異なり、次の3つに分けられる。まず、全ての従属節に情報構造があるとする説 (Partee 1997, Fuchs 1997)、次に、従属節中には情報構造がないとする説 (Mathesius 1975, Komagata 2003)、そして情報構造がある従属節は一部に限られるとする説がある (平塚 2002, Lahousse 2011)。従属節の一部に情報構造を認める説では、断定を表す従属節の内部には情報構造を認め、前提を表す従属節の内部には情報構造を認めていない。Lambrecht (1994) は「前提 pragmatic presupposition」と「断定 pragmatic assertion」下記のように定義している。

- (25) pragmatic presupposition: The set of propositions lexicographically evoked in a sentence which the speaker assumes the hearer already knows or is ready to take for granted at the time the sentence is uttered. (Lambrecht 1994: 52)
- (26) pragmatic assertion: The proposition expressed by a sentence which the hearer is expected to know or take for granted as a result of hearing the sentence uttered. (ibid.)

「前提」は発話時に聞き手が既に知っている命題であり、「断定」はその発話によ

って聞き手が知る命題のことを指す。前提を表す従属節の場合、発話において伝えられる内容の中で最も際立ちのある情報である焦点は、その内部に入らない。

この前提と断定の分類を踏まえた従属節中の倒置の分析として、平塚 (2002) や Lahousse (2011) がある。制限的關係節中の倒置を扱った平塚 (2002) では、前提を表す従属節である制限的關係節中の倒置では主語が焦点を担わないと考え、先行詞の指示対象の同定するために参照点として働きやすいかという点で分析を行っている。また、Lahousse (2011) は、断定を表す従属節中の倒置には、主語の脱トピック化や焦点化の機能があるが、前提を表す従属節については、情報構造が存在しないため自由に倒置が起こると主張し、全ての従属節中の倒置に関してトピックや焦点に関する機能があるかは明らかにされていない。

さらに、従属節中の倒置に関わる焦点の種類についても、先行研究によって考え方が異なり、制限的焦点や、information focus、identificational focus を用いて分析が行われてきた (Erteschik-Shir 1997、Kiss 1998、Lahousse 2011、Marandin 2011)。そして焦点が担う範囲も、倒置の例によって異なることが指摘されている (Marandin 2011)。このように、Lahousse (2011) や Marandin (2011) を始め、従属節中の倒置について情報構造の観点から詳細に分析されているものの、従属節中の倒置が主語の焦点化を担いうるのか、なぜ倒置されているのかという問題については未だ明確になっていない点も残されている。

そして、焦点という概念だけでは説明できない従属節中の倒置の例もある。(27)では、焦点は補文全体にある。

(27) a. Une assistante sociale discute avec une patiente qui se plaint de ses problèmes avec ses enfants. Quel changement dans votre environnement personnel vous ferait le plus plaisir ?

Lit. A social worker talks to a patient who complains about her problems with her children. What change in your life would please you most ?

b. Je voudrais que s'arrête la brouille entre mes deux fils.

Lit. I would like that my two sons stop the quarrel between.

(Marandin 2011; 331-332)

このような従属節中の倒置の例を分析するには、焦点とは異なる概念が必要と考えられる。(27)では、主語名詞句が動詞句よりも長いということが要因の一つとして考えられるが、焦点で説明することはできず、主語名詞句と動詞句のそれぞれが担う情報の特徴を比較しなければならない。詳細は第2章で述べるが、本研究においては焦点やトピックというバイナリーに判断される概念だけではなく、主語名詞句や動詞句などの各要素が担う「情報の重要度」というスカラー量的な概念によって、倒置を分析する必要があることを示す (高見 1995)。

以上を踏まえ、本論の目的は大きく次の二つとする。コーパス調査を基に、各従

属節における倒置の生起頻度を明らかにし、各従属節中の主語名詞句が倒置される要因について、「情報の重要度」という概念によって説明を与えること。そして、従属節中の倒置された主語のみが焦点化されうる場合があるのかどうかを明らかにし、従属節中の倒置の主な機能が主語の焦点化にあるのかどうかを分析することである。

1.3. 本論の構成

フランス語の従属節中の主語名詞句の倒置について、「情報の重要度」と「焦点」に着目して分析していく。各従属節における倒置の例について分析するため、コーパス調査を実施し、焦点化の問題についてはインフォーマント調査の結果に基づき考察する。主節の倒置では、「絶対倒置」と「場所句倒置」では異なる性質があると考えられているため、本論における従属節中の倒置に関しても、節頭が動詞句である場合と、前置詞句である場合に分けて考察を行う。本論文は以下のような構成とする。

第2章では、先行研究を概観し、本論において用いる概念の定義を提示する。前節で言及したように、先行研究において、倒置に関して情報構造の観点からどのように分析されてきたのかを示す。そして「焦点」「トピック」「テーマ・レーマ」という概念を用いた分析においては明らかではなかった倒置の特徴が、主語名詞句と動詞句の担う「情報の重要度」の差異によって説明できることを示す。

第3章では、コーパス Frantext⁴から収集した従属節中の倒置について、様々な従属節における倒置の頻度が異なることを明らかにする。先行研究においては、制限的關係節では倒置が多く、非制限的關係節や、理由や譲歩を表す副詞節では倒置の頻度が低いと指摘されてきたが (Le Bidois 1952, Lahousse 2011)、どの程度の頻度の差があるのかを示す。そして、各従属節で倒置が行われる要因を、主語名詞句の担う情報の重要度と動詞句の担う情報の重要度の差異の観点から分析する。主語名詞句の担う情報のほうが、動詞句の担う情報よりも重要度が高い場合に倒置が用いられており、従属節においても情報の重要度の差異によって語順が決定されていることを明らかにする。

第4章では、従属節の中で場所句の前置が起こっている例を分析対象とする。コーパスで従属節中に場所句の前置が起きている例を収集し、その中で主語が倒置される頻度を明らかにする。また、場所句が前置されていないときの主語の倒置との頻度の差 (第3章の収集結果との差) についても検討し、前置詞句が節頭に置かれる方が、主語倒置の頻度が高くなることを示す。さらに、従属節中の場所句倒置に関しても、主語名詞句の担う情報の重要度のほうが動詞句の担う情報の重要度よりも高いという性質が当てはまることを示す。

第5章では、従属節中の主語のみが焦点を担うことができ、倒置の機能が焦点化と

⁴ <https://www.frantext.fr/>

言えるのかという問題を検討する。先行研究において、主節の倒置では、主語の焦点化の機能があると考えられてきたが、従属節中の倒置については不明確なままである。本論文では、Lambrecht (1994) の「焦点 focus」の考え方を援用し、従属節中に焦点が存在しうるのかを分析する。分析の際には、Kiss (1998) の嘘テスト⁵を応用し、主語のみが発話における唯一の新情報として焦点を担うことが可能であるのかテストする。また、「対比 contrastiveness」という要因に関しても、従属節のタイプに関わらず、主語に対比が含意される場合には、従属節中の倒置が好まれるという点についても指摘する。

⁵ 嘘テストは Lahousse (2011) も使用しているため第 2 章でも触れるが、本論文における手法の詳細は、第 5 章で述べる。

第2章 概念の定義と先行研究の概観

2.1. 本章の目的

本章では、従属節中の倒置の機能について情報構造の観点から論じるうえで用いる概念である「情報の重要度」と「焦点」の定義を示し、先行研究との関連について述べる。前章では、フランス語の倒置に関する従来の研究を概観し、従属節中の倒置については、情報構造上の機能が未だ明らかになっていないことを指摘した。これまで、倒置の研究においては倒置の現象を「焦点」との関係から分析するものが多く、主節の倒置には主語の焦点化の機能があると考えられている。しかし、倒置と焦点は密接な関係にあるものの、焦点という概念のみでは従属節中の倒置を説明することができない。本論文では、従属節中の倒置の機能については、「焦点」だけでなく、従属節中の各要素が担う「情報の重要度」の差によって、倒置が説明できることを示す。2.2 節では、倒置の分析における焦点や情報構造についての先行研究を概観する。2.3 節では、本論文において用いる概念である「情報の重要度」と「焦点」の定義を示す。2.4 節では、従属節中の主語や動詞句、その他の補語の特徴と「情報の重要度」の関連について述べ、2.5 節で本章のまとめを行う。

2.2. 先行研究における倒置と情報構造

2.2.1. 従属節中の情報構造について

主節にせよ従属節にせよ倒置は有標な語順であり、主節における倒置は情報構造の観点から分析されてきたのに対し、従属節中の情報構造の有無については、研究者によって見解が異なり、従属節中の倒置に焦点化の機能があるのかは未だ明確になっていない。英語を分析対象とした研究の中には従属節中にも焦点を認める説があるものの、その例として挙げられている従属節は、断定を表す従属節の例に限られている。本節では、先行研究において従属節中の情報構造がどのように捉えられてきたかについて述べる。

2.2.1.1. 従属節中の情報構造を認めない立場：Komagata (2003)

まず、従属節中の情報構造の存在を否定する説では、情報構造は一文につき一つ

であり、従属節には情報構造が存在しないと考えられている (Komagata 2003)。次の例のように従属節 *because* が含まれている発話であっても、*because* 節内には情報構造はなく、一つの発話における情報構造は一つとされている。

(1) Q: Why did you hit him?

A: [I did it]_{Theme} [because he insulted me]_{Rheme}. (Komagata 2003: 301)¹

主節 *I did it* がテーマであり、従属節である *because* 節全体がレーマとなる。先行する疑問文で既に設定されたテーマ (A の発話者が何かをした) を表す部分が主節である。そしてこの発話において伝えたい焦点となるのが「それをした理由」であり、*because* 節全体が焦点となる。

また、従属節全体が背景あるいはトピックとなる場合もある。

(2) Q: I know Clyde married one of those rich women. But what happened to him after the woman died?

A: [Although Clyde married BERTHA]_{T1}, [he]_{T2} [did not inherit a PENNY]_R. (Komagata 2003: 304)

A の発話における *although* 節はテーマであり、主節の述部 *did not inherit a PENNY* がレーマである。このように従属節全体がテーマ (トピック) あるいはレーマ (焦点) となると考えられている。

また、Komagata (2003) は (3) の *because* 節のように独立した従属節や、(4) の主節の後ろに置かれた *although* 節には、情報構造を認めているが、これらの従属節は形としては従属節であるけれども、従属節のような節 *subordinate-like clause* であり、本当の従属節ではないと主張している。

(3) A: Why did you hit him?

B: Because he insulted me.

(4) The shape seemed to be looking through a book, although [what the book was] [Henry could not tell]. (Komagata 2003: 302)

以上のように、従属節中に情報構造を認めず、一文中の情報構造は一つであり、

¹ (1) は Lambrecht (1994) の例文に Komagata (2003) が手を加えたものである。Lambrecht (1994) におけるトピック *topic*、焦点 *focus* を、Komagata (2003) ではそれぞれテーマ *theme*、レーマ *rheme* と呼んでいる。Lambrecht (1994) の焦点の定義は、次のように述べられている。“FOCUS: The semantic component of a pragmatically structured proposition whereby the assertion differs from the presupposition.” (Lambrecht 1994: 213)

情報構造がある従属節は真の従属節ではないと考える立場がある。ただし、although 節や because 節以外の従属節については詳細に分析されておらず、フランス語の従属節ではどのように捉えられるかは明らかではない。

2.2.1.2. 全ての従属節に情報構造を認める立場：Partee (1996), Fuchs (1997)

前節では、従属節中には情報構造が存在しないという考え方を示したが、従属節の内部に情報構造が存在するという考え方がある。Partee (1996) や Fuchs (1997) では、従属節内にもトピックや焦点の存在を認めている。(5) は発話全体のレベルにおけるトピック TOP1 と FOC1 の内部にそれぞれトピックと焦点があることを示している。

- (5) [TOP1 What convinced Susan that [S2 [TOP2 our arrest] [FOC2 was caused by HARRY]]] was [FOC1 a rumor that [S3 someone had [FOC3 witnessed Harry's confession.]]] ²

(5) について、Partee (1996) は、発話における主張、つまり焦点となるのは was の後の a rumor 以下の部分であり、関係節内の情報も焦点に含まれると考えている³。また、発話におけるトピックは主語の What 節全体である。Partee はさらに、発話の焦点に含まれている関係節内の witnessed Harry's confession も下位レベルの焦点であり、発話のトピックに含まれる that 節内の主語 our arrest が下位レベルのトピック、was caused by HARRY が下位レベルの焦点であると考えている。Komagata (2003) では発話全体のトピックや焦点に含まれる従属節の内部には情報構造を認めていなかったが、このように Partee (1996) は発話に従属節が含まれている場合、その内部にも下部構造としてのトピックや焦点を認めている。

従属節中の倒置に関する先行研究の中にも、従属節中に情報構造を認めているものがある。Fuchs (1997) は関係節の内部におけるテーマ・レーマ構造を認め、主語名詞句や動詞句の情報構造の観点から倒置の説明を試みている。Fuchs はテーマを「心理的主語に相当し、文脈や状況から想起される要素」、レーマを「心理的な述部であり、テーマに関して新しく導入される要素」と定義している。テーマとレーマの対比は、旧情報と新情報、既知情報と未知情報、付属的な情報と重要な情報、前提となっ

² Partee (1996)の例文“What convinced Susan that our arrest was caused by HARRY was [FOC1 a rumor that [S3 someone had [FOC3 witnessed Harry's confession.]]]” (Partee 1996: 82)に、Partee (1996) の主張に基づき筆者が TOP1、TOP2、FOC2 を加えた例文である。

³ Partee (1996) ではプラグ学派における theme-rheme、topic-focus の考え方に沿って分析している。テーマとトピックがその節が何についてであるかを表し、レーマと焦点がそれについて述べられていることや、新しい情報を表す。

ている情報とその発話で提供された情報という対立として説明している。テーマとレーマの対立と語順は完全に一致するわけではないが、少なくともフランス語では後置された句はレーマ、前置された句はテーマとして機能する傾向がある。Fuchsはこの傾向が関係節内にも働いていると考え、関係節内の倒置は主語名詞句をレーマとして導入し、動詞を媒介として先行詞と主語名詞句をつなげることが可能になるとしている。そして、レーマとして働く傾向がある要素の特徴として、語数が多く、情報量が多いという点を挙げ、主語が不定名詞句や人を表す場合はレーマ化されやすく、倒置が好まれるのに対し、定の主語名詞句はテーマ的であり、正置が好まれるという指摘している。

また、第1章で述べたように Fuchs (1997) は、動詞の特徴に関して、動詞の意味内容が希薄で、先行文脈などから予測可能な情報であるとき、その動詞はテーマ的な性質を持つと説明している。つまり、動詞はこのような特徴を持つときには前置され、レーマ的な主語が後に置かれることになる。(6) では、動詞 *traquaient* がテーマ的に働き、動作主を表す主語 *les policiers* をレーマとして導入する役割を果たしているため、「追っていたのが、他の誰でもなく警察であった」という対立的な文脈があると理解される。それに対して正置の例である (7) の動詞 *traquent* は、後続文脈の *chasser* との対比があるため、動詞がレーマを担うと指摘されている。

(6) Il comprit qu'il tenait le gibier que traquaient les policiers : la jeune fille était en sueur (Decoin; in Fuchs 1997: 164)

Lit. He understood that he was holding the game that were tracking the police: the young girl was sweating

(7) C'est là que débarquent tous les naufragés du Vieux Monde (...). Les premiers socialistes allemands, les premiers mystiques russes. Les idéologues que les polices d'Europe traquent ; ceux que la réaction chasse

(Cendrars; in Fuchs 1997: 164)

Lit. It is there that land all the castaways of the Old World (...). The first German socialists, the first Russian mystics. The ideologues that the police of Europe hunt down; those whom the reaction chases away

Fuchs は、(6) の倒置には、*contraintes prédicatives* と *contraintes énonciatives* が関連していると指摘している。*contraintes prédicative* は動詞と目的語の距離を短く保つ制約であり、*contraintes énonciatives* は、テーマを表す要素をテーマ位置に置こうとする発話に関する制約である。この二つの制約によって、動詞を先行詞の近くである左側に寄せようとする力と、テーマを表す動詞をテーマ位置に置こうとする力が一致し、先行詞と動詞が一つの塊となり、「先行詞と動詞」対「主語」が「テーマ」対「レーマ」という強い対立となるとしている。

このように、Fuchs は関係節中にもテーマ・レーマという情報構造を認めている。

関係節では、まず先行詞がテーマを表し、動詞句は、意味的に希薄であったり先行詞から予測可能であったりするときには関係節内のテーマ化された要素として、二次的なテーマを表すと考えている。

ただし、関係節以外の従属節において、従属節内のテーマやレーマ、トピックや焦点がどのように考えられるのか明らかになっていない。また、Partee (1996) はトピックや焦点を含みうる従属節の種類について特に言及していないものの、挙げられていた例の従属節は、because 節や不定名詞句を先行詞とした制限的關係節であった。詳細は次節で述べるが、これらの従属節は、断定を表す従属節と考えられている (Lambrecht 1994, 河野 2012)。断定を表す従属節が主節に対して補足的な新情報を表すように、従属節の中にも情報構造が存在するという考えだと思われるが、本当にこのような情報構造があるかどうかははっきりしない。

2.2.1.3. 断定を表す従属節にのみ情報構造を認める立場：平塚 (2002), Lahousse (2011)

ここまで、全ての従属節に情報構造を認めない立場と、全ての従属節に情報構造を認める立場を挙げた。最後に、一部の従属節に情報構造を認める立場について述べる。この立場は、従属節における前提 *presupposition* と断定 *assertion* の区別に基づいている。Lambrecht (1994) の前提と断定の定義を再掲する。本論文でもこの定義を援用する。

- (8) pragmatic presupposition: The set of propositions lexicogrammatically evoked in a sentence which the speaker assumes the hearer already knows or is ready to take for granted at the time the sentence is uttered. (Lambrecht 1994: 52)
- (9) pragmatic assertion: The proposition expressed by a sentence which the hearer is expected to know or take for granted as a result of hearing the sentence uttered. (*ibid.*)

Lambrecht (1994) は前提と断定の区別の例として、because と since を挙げている。because 節は理由を断定的に表すのに対して、since は理由を前提的な情報として表すため、(10) では、A の疑問の答として because は容認されるが、since 節は容認不可である。

- (10) A: Why did you hit him?
B: Because he insulted me. / #Since he insulted me. (Lambrecht 1994: 69)

断定を表す従属節は、Komagata (2003) の subordinate-like clause として分析され

ていた従属節でもある。従属節の一部に情報構造を認める立場では、断定を表す従属節は主節のように内容を断定的に表すため、その内部に情報構造があるが、前提を表す従属節の内部には情報構造を認めていない。例えば制限的關係節は、既に聞き手が知っていると話し手が考える情報によって、先行詞の指示対象の同定を可能にするため、前提を表す従属節に分類される。Fuchs (1997) が關係節の内部におけるテーマ・レマ構造を認め、主語名詞句や動詞句の情報量の観点から倒置の説明したのに対し、平塚 (2002) は制限的關係節で生じる倒置を主語名詞句の *individuation* によって説明を試みている。

平塚 (2002) は、制限的關係節内には情報構造がなく、焦点を含みえないと考え、制限的關係節中の倒置を情報構造とは異なる観点から分析をしている。平塚 (2002) は、關係節内の主語が先行詞の指示対象の同定に寄与する程度が高い場合、あるいは動詞句が先行詞と主語の關係を表すに過ぎない場合に、倒置が容認されると指摘している⁴。關係節中の主語名詞句の個性性 *individuation*⁵が高いとき、その指示対象は認知的に際立ちが高く、先行詞の指示対象を同定するための参照点として機能しやすい。名詞句内では、名詞句全体の指示対象の確定に対する寄与が小さい要素から大きい要素へと配列しようとする傾向が存在し、關係節で倒置が起きるのもこの傾向の結果であるということが平塚 (2002) の主張である。

この指示対象の同定に寄与する度合いは、情報構造と通じるところがあり、制限的關係節のような前提を表す従属節の中にも、情報として重要度が低い要素から高い要素へと並べるといふ傾向が存在するということにも通じると考えられる。ただし、倒置が容認されやすい動詞の特徴については、「主語と先行詞の關係を表すに過ぎない」という記述だけでは不十分である。倒置には様々な意味、アスペクト、時制の特徴を持つ動詞句が用いられているが、どのような特徴が倒置を引き起こしやすいのか、検討しなおす必要がある。

Lahousse (2011) は断定を表す従属節にのみ情報構造を認める立場から、關係節や理由節だけではなく、補文節やその他の副詞節も対象として情報構造の有無を分析している。Lahousse (2011) は様々な従属節中の倒置について、断定的な従属節、非断定的な従属節を区別し、それぞれ倒置が容認される条件を次のようにまとめている⁶。

⁴ (a) 主語名詞句が先行詞の指示対象の確定に寄与している程度が動詞よりも高い。

(b) 動詞は主語の先行詞に対する關係を表しているにすぎない。(平塚 2002: 137)

⁵ Hopper & Thompson (1980)

⁶ « VS dans les subordinées

a. Dans les subordinées circonstancielles périphériques ou assertives (les concessives et les causales), les complétives à l'indicatif et les interrogatives indirectes totales, VS peut seulement apparaître si la phrase comporte un topique scénique et/ou une ou plusieurs indications lexicogrammaticales explicites du statut non topical du sujet postverbal (l'indéfinitude du sujet ; la présence d'une modification restrictive au sein du sujet.)

b. Dans les subordinées circonstancielles centrales ou non assertives (les temporelles, les comparatives, les subordinées de manière, les finales et les subordinées en *sans*

- (11) a. 周辺の状況補語節や断定的な状況補語節（譲歩や理由を表す節）、直説法が使われた補文節や疑問副詞を伴わない間接疑問においては、文が場面トピックを含んでいる、および／または、倒置された主語が文のトピックではないことを明示する語彙的・文法的な標識（主語が不定であること、主語の内部に制限的な修飾があること）が 1 つ以上あるときに限り、倒置は現れることができる。
- b. 中心的な状況補語節や非断定的従属節⁷（時間節、比較節、様態を表す従属節、目的節、*sans que* 節）や接続法が使われた補文では、上記のような要因がなくとも倒置が現れることができる。

Lahousse (2011) は、様々な倒置の共通点として、「倒置された主語がトピックとして解釈されない」という仮説を検証している⁸。断定的な従属節には情報構造が存在するため、倒置された主語がトピックとして解釈されなくなるような特徴が必要であるのに対して、非断定的な従属節には情報構造が存在せず、トピックとして解釈されることもないため、そのような特徴が不要であると述べている。倒置された主語がトピックとして解釈されない特徴としては、場面トピックとなりうる状況補語が主語よりも前にある、主語名詞句に制限的關係節が後続する制限的焦点となっている、焦点となる不定名詞句であるといった点が挙げられている⁹。Lahousse は非断定的な従属節内には情報構造が存在しないため倒置が自由に起こると考えているが、非断定的な従属節中の倒置がなぜ起きるのかという問いには明確に答えていない。

先行研究では、従属節内に情報構造を認めないもの、全ての従属節において情報構造を認めるもの、断定を表す従属節にのみ情報構造を認めるもの、という 3 つの立場に分かれており、従属節内の情報構造の存在については議論の余地がある。また、全ての従属節中に情報構造を認める立場と、断定を表す従属節にのみ情報構造を認める立場から、従属節中の倒置が分析されてきた。しかし、いずれも従属節で倒置が用

que) et les complétives au subjonctif, VS peut apparaître en l'absence de ces facteurs. » (Lahousse 2011: 228)

⁷ 「断定 assertive」に対して「前提 *présupposée*」という用語が使用されることもある。Lahousse (2011)では前提ではなく「非断定 *non assertive*」が用いられている。

⁸ « Hypothèse (version 2)

La distribution de VS (dans les phrases simples, les principales et les subordonnées) s'explique par l'interaction entre les propriétés informationnelles de VS (le sujet n'est pas le topique principal de la phrase, c'est-à-dire le topique qui intervient dans l'assertion et pour lequel les valeurs de vérité sont évaluées) et les propriétés sémantiques du contexte d'apparition de VS. » (Lahousse 2011: 221)

⁹ « tous les exemples attestés de VS dans une subordonnée assertive contiennent un topique scénique, un sujet postverbal indéfini ou d'une modification restrictive (relative restrictive, adjectif ou groupe prépositionnel à interprétation restrictive) au sein du sujet, et les exemples que nous avons fabriqués et qui ne contiennent pas de tel facteurs. » (Lahousse 2011: 252)

いられる理由は明確ではない。本論文では、前提を表す非断定的な従属節においても、主節よりも弱いものの情報構造が存在するという作業仮説のもと、情報の重要度という概念を提案することで倒置が生じる要因を明らかにしていく。

2.2.2. Lahousse (2011) と Marandin (2011) の倒置の分類と焦点の範囲

本節では主節と従属節における倒置と焦点の問題に関する先行研究を概観し、焦点とは異なる概念が必要となることを提案する。先行研究においては、主節の倒置された主語は焦点化されていると考えられ、倒置によって、主語を焦点または心理的述語、レーマとして表すと分析されてきた (Bailard 1981, 東郷・大木 1986, Fuchs & Fournier 2003)。焦点の範囲は文脈によって異なることを既に紹介したが、各倒置の場合も焦点の範囲は異なることが指摘されている。例えば (12) では、B の発話における倒置された主語の部分が新情報となるような、A の部分疑問を設定することができる (Marandin 2003, Lahousse 2011)。

(12) A : Qui est reçu ?

Lit. Who is received?

B : Sont reçus Pierre, Paul et Bernadette.

Lit. Were received Pierre, Paul and Bernadette. (Marandin 2003: 354)

B の倒置された主語は、発話における唯一の新情報であり、焦点となっている。主語が文末の焦点位置に置かれており、倒置によって主語が焦点化されていると考えられる。しかし (13) では、焦点は倒置された動詞と主語が担い、倒置によって主語が焦点化されているとは言えない。B1 が倒置、B2 が正置の例であり、焦点の範囲は同じである。

(13) A : Que se passe-t-il en septembre ?

Lit. What happens in September?

B1 : [En septembre]_{STOPT} [apparaissent **les grosses araignées.**]_{FOC}

B2 : [En septembre]_{STOPT} [**les grosses araignées** apparaissent.]_{FOC}

Lit. In September appear the big spiders. (Lahousse 2011)

B1 の倒置の場合も B2 の正置の場合も、文頭の状況補語の後の主語と動詞が、A の「9 月に何が起きるか」という質問に対する答となる。この場合の倒置では、主語は確かに焦点であるが、動詞も焦点に含まれる。倒置を用いることによって、無標の構文ではトピックとして解釈される可能性がある主語をトピックではなく、焦点領域に入れるために倒置を用いると考えることもできる。これは、主語がトピックとして解

積されないために倒置を用いるという、倒置の「主語の脱トピック化」の機能と認められる (Lahousse 2011)。ただし正置の場合も、主語と動詞の両方が焦点範囲に入っていると判断される。このため、倒置によって主語が焦点として表されていると説明するには限界があると考えられる。本研究においては、従属節中の倒置における焦点の範囲が、主語のみである場合と、動詞句や節全体である場合とは区別して考察する必要があると考える。

倒置文の焦点の範囲や性質が一樣ではないことは、Lahousse (2011) や Marandin (2011) でも指摘されている。焦点の範囲や性質に応じて、Lahousse (2011) は、倒置を *Inversion Ordinaire* と *Inversion Focus* の 2 つに、Marandin (2011) は、*inversion via permutation* (PERM-INV)、*presentative inversion* (PRES-INV)、*inversion in extraction-context* (EXTR-INV) の 3 つに分類している¹⁰。まず Lahousse は *Inversion Ordinaire* と *Inversion Focus* はそれぞれ次のように定義している¹¹。

- (14) *Inversion Focus* : 倒置主語が制限的な焦点を担い、排他的に解釈される。
 (15) *Inversion Ordinaire* : 倒置主語は排他的に解釈されず、制限的焦点を担わない。場面トピックまたは制限的焦点が文頭にある倒置、および従属節中の倒置が該当する。

先に挙げた (12B) が *Inversion Focus*、(13B1) が *Inversion Ordinaire* に該当する。

¹⁰ Marandin (2011) の分類のうち、*inversion via permutation* は Marandin (1997, 2010) における *elaborative inversion* に当たり、*Presentative inversion* は Marandin (2001) の *unaccusative inversion* に当たる。

¹¹ « l'inversion focus, qui correspond aux cas de VS où le sujet postverbal est un focus restrictif exhaustif, et l'inversion ordinaire, qui englobe tous les autres cas. »

(Lahousse 2011: 151)

« L'inversion ordinaire correspond à tous les cas de VS où le sujet n'est pas un focus restrictif exhaustif, c'est-à-dire les cas de VS dans une phrase simple ou une principale introduite par un topique scénique (40a) ou un focus restrictif (40b) (cf. chapitre 2), et les cas de VS dans une subordonnée, qu'elle doive (40c) ou non (40d-e) s'accompagner d'un facteur supplémentaire favorisant l'inversion (cf. chapitre 3).

(40) *Inversion ordinaire*

- a. Et c'est Et c'est Paul qui apparaît. Timide, ingénu, désarmant Avec lui, dans la sage demeure, entrent alors la folie douce, l'humour fantasque. (Troyat)
- b. Il écrivait avec une sorte de distraction concentrée, comme on crayonne sur le bloc du téléphone : on écoute de moins en moins et c'est le dessin qui s'impose. Ainsi écrivait Alexandre, se réfugiant dans les pleins et les déliés de cette écriture sage, de ce crayonnement appliqué. (Pennac)
- c. C'est l'époque où, dit Teresa, on ne quitte pas l'homme ou la femme parce que l'amour a disparu, mais parce qu'est apparue, de façon discrète ou criante, une différence. (Delay)
- d. Olivier savait qu'il baiserait la main de la tante Victoria et que les ouvriers s'en amuseraient. Quand arriva la tante, cela se fit tout naturellement. (Sabatier)
- e. Ils se glissèrent dans la chambre où gisaient les bouts de ferraille. (Brincourt) »

(Lahousse 2011: 168-169)

(12B) の倒置された主語は排他的に解釈され、「合格したのは Pierre、Paul、Bernadette であり、それ以外の人合格していない」ことが含意される。それに対して、(13B1) はそのような排他的な解釈にはならず、「クモ以外のものが現れる」可能性がある表現となる。Inversion Focus の倒置された主語は排他的に解釈され、制限的な焦点 restrictive focus となるということである。一方、Inversion Ordinaire の主語が焦点を担うのか、どのような焦点を担いいうのかという点については言及がない。

Marandin (2011) の 3 つの分類とその例は以下の通りである。

- (16) a. Sont reçus *Marie et Pierre*. =inversion via permutation [PERM-INV]
Lit. Were received Marie and Pierre.
- b. Alors, entra *un soldat*. =presentative inversion [PRES-INV]
Lit. Then, entered a soldier.
- c. le livre qu'a acheté *Paul*. =inversion in extraction-context [EXTR-INV]
Lit. the book which bought Paul. (Marandin 2011: 328-329)

Marandin が PERM-INV の例として挙げているのは主節の倒置のみである。PRES-INV の例としては上記の主節の倒置の例以外に、補文節における倒置の例も提示されている。EXTR-INV は関係節中の倒置が当てはまるとされている。

各分類の Inversion Focus と PERM-INV の特徴について述べる。PERM-INV の Inversion Focus に相当するとされている。Lahousse は Inversion Focus の倒置された主語が排他的解釈を伴うという性質を利用し、下の例の b のように、その命題にあてはまる主語の指示対象の情報を追加することはできないという語用論的なテストを行っている。

- (17) a. Rendront un devoir les élèves qui ont raté l'examen de chimie.
Lit. Will do a homework the students who failed the exam of chemistry.
- b. #.. Et les élèves qui ont raté l'examen de littérature rendront aussi un devoir.
Lit. ... And the students who failed the exam of literature will also do a homework. (Lahousse 2011: 90)

また、Inversion Focus で主語が列挙されている場合、主語の指示対象の一部を抽出した発話と元の発話は包含関係にならず、(18a) の発話と同じ文脈である場合、(18b) は真ではないと説明している。

- (18) a. Rendront un travail supplémentaire les élèves suivants : Michel, Marie et Jean.
Lit. Will do an extra work the next students: Michel, Marie et Jean.

b. =/>Rendra un travail supplémentaire l'élève suivant : Michel.¹²

Lit. Will do an extra work the next student: Michel. (Lahousse 2011: 173)

さらに Kiss (1998) の嘘テストを適用し、主語の情報に付け足しをする場合、Inversion Focus の発話に対して「Ce n'est pas vrai ! » ‘It's not true!’ と言うことができる」と述べている。

(19) A : -Rendront un travail supplémentaire les élèves suivants : Michel, Marie et Jean.

Lit. Will do an extra work the next students: Michel, Marie et Jean.'

B : -Ce n'est pas vrai ! Pierre Prévost **aussi** rendra un travail supplémentaire.

Lit. It's not true! Pierre Prévost also do an extra work.'

(Lahousse 2011: 174)

Marandin はこのタイプの倒置の例を PERM-INV としているが、その特徴として、スクランプリングが容認されず、倒置された主語の後に間接目的語を置くことができないことを挙げている。他の先行研究においても、倒置された主語の後に他の補語が来ることは容認されないとされている (Rochement 1978, Korzen 1983, 東郷・大木 1986)。

(20) a. Fait [un cours de logique aux linguists]_{NP-OBJECT} [tout nouveau prof de philosophie]_{NP-SUBJECT}

Lit. gives a class of logic to linguists each newly appointed philosophy teacher

b. *Fait un cours de logique [tout nouveau prof de philosophie]_{NP-SUBJECT} aux linguistes.

Lit. gives a class of logic each newly appointed philosophy teacher to linguists

(Marandin 2011: 330)¹³

このような Inversion Focus や PERM-INV では、主語のみが焦点となるような部分疑問文を自然に設定することができる。

(21) Q: Quels papiers sont valides?

Lit. Which papers are valid ?

A: Sont valides [le passeport et la carte d'identité]_{Subject}

¹² 原文ママ。=>は a の文が b の文を含意していないことを表す。

¹³ 例文および英訳は原文ママ。

本論文においては、主節の倒置では主語のみが狭い焦点を担う場合があることを踏まえ、従属節においても倒置された主語のみが焦点となりうるのか、検討する。ただし、Lahousse (2011) の排他的解釈の根拠である (17) のような語用論的テストで、主語に対する修正を付加できないという結果には疑義が残る。Lahousse が提示した発話の組み合わせについて、インフォーマント調査を行い、(17a) の直後に (17b) と発話することが自然と感じられるか調べたところ、(17b) はこの文脈において容認可能であるという意見が得られた。つまり、a の倒置主語に該当するほかの指示対象を追加することが可能であると言える。また、(18) の含意テストに関しても同様に調査したところ、倒置された主語の一部を抜粋した命題についても含意されるという答を得た。いずれも倒置された主語が強く排他的に解釈されるかは疑問が残る。このように、倒置主語が排他的解釈しか許さないかどうかという点で疑問は残るものの、主語が新情報としての焦点を担うことは明らかであると言えるため、本論文では、排他的焦点ではなく、Lambrecht (1994) における焦点 (2.3.2 節参照) の定義を採用する。

また、Marandin (2011) の PRES-INV の例は、受動態あるいは *apparaître*, *arriver*, *commencer*, *cesser*, *éclater* など提示的な意味を持つ動詞に限られている。

(22) Il faudrait que cessent de disparaître du bureau [_{NP} les dossiers financiers].

Lit. It might be that cease to disappear from the office [_{NP} the financial files]

(Marandin 2001: 4)¹⁵

Marandin はこの特徴から、PRES-INV は主語の指示対象を提示する役割を果たし、PRES-INV の倒置された主語は、プロミネンスが高い *prominent* 要素であるとしている。これに対して PERM-INV の主語は、質問に対する答の部分となり、新情報を表す狭い焦点である。この二つの倒置の主語は異なる性質を持つと言える。このことから、本論文で従属節中の倒置を分析においても、焦点という一つ概念だけでは不十分と考えられる。

次に、Lahousse (2011) と Marandin (2011) の従属節中の倒置と焦点の範囲について概観する。Lahousse (2011) は非断定的な従属節には情報構造を認めておらず、焦点はないと考えており、断定的な従属節の内部には焦点の存在を認めているが、その範囲は明らかにしていない。Marandin (2011) も、従属節の内部の焦点については言及しておらず、従属節全体が焦点となるか前景となるかという問題のみ扱っている。

¹⁴ 例文および英訳は原文ママ。

¹⁵ Marandin はこの例に関して、主語名詞句を *du bureau* の前に置くことができないことを指摘している。そのほかの先行研究では、*disparaître de* ~ 「~から消え去る」、*s'intéresser à* ~ 「~に興味がある」という動詞は前置詞句との結びつきが強く、一つの「意味的な塊」となっている。その「塊」から一要素を抜き出して外置すると容認不可能になることが示されている (Bonami & Godard 1998, 1999, 2001)。

その中で PRES-INV と EXTR-INV では、節全体が焦点あるいは前景となると指摘している¹⁶。

(23) Q : Quel changement dans votre environnement personnel vous ferait le plus plaisir?

Lit. What change in your life would please you most?

A : Je voudrais que s'arrête [la brouille entre mes deux fils]_{Subject}.

Lit. I would like that stops the quarrel between my two sons.

(Marandin 2011: 332)¹⁷

(24) Q : Qui sera reçu par le directeur?

Lit. Who will be received by the boss?'

A : C'est Bernard que recevra le directeur.

Lit. It is Bernard whom will receive the boss. (Marandin 2011: 333)

(23) の疑問文に対する答は補文全体であり、補文全体が焦点である。(24) は強調構文であり、Bernard が焦点であり、que 節全体が前提の情報となっている。

いずれも倒置された主語のみが焦点となりうるのか、という点については明らかにしていないことから、従属節中の倒置は必ずしも主語の焦点化の機能を担うわけではないことが窺える。このことから焦点という概念のみで、倒置を説明することには限界があると言える。

2.3. 本論文で使用する概念の定義

2.3.1. 「情報の重要度」の定義

前節では、先行研究における従属節中の情報構造の有無の見解が分かれていること、そして従属節中の倒置の要因について焦点という概念のみでは捉えきれず、別の概念を用いる必要があることを指摘した。そこで本研究では、従来の倒置の分析において着目されていた「焦点」とは別の概念として、「情報の重要度」の観点から従属節中の倒置について考察する。Marandin (2011) では EXTR-INV と PRES-INV の動詞の特徴として、動詞が出来事など動的な事態ではなく、静的な状態を表すということ

¹⁶ 'The informational solidarity holding in the context between the verb and its first argument affords EXTR-INV and PRES-INV, i.e. makes it possible without imposing it. This condition limits the information structure of EXTR-INV and PRES-INV clauses to be all in one piece: all focus or all ground.' (Marandin 2011: 345)

¹⁷ 英訳も原文から引用しているが、英訳中の主語の位置のみ筆者による。

や¹⁸。副詞が動詞を修飾し、動的 *dynamic* に捉えられる場合、倒置が容認されないということも指摘しており、倒置には動詞の意味内容や、副詞の有無や位置、主語の特徴が関連していると言える。そして、動詞と主語の情報の重要度の違いは、語彙や、統語的特徴によって、相対的に判断することができると言える。本論文では、従属節中の主語と動詞がそれぞれ担う情報価値の差に着目し、「情報の重要度」を次のように定義する¹⁹。

- (25) 情報の重要度：その文脈において、発話の各要素が持つ情報の価値。重要な情報は、その文脈の中に導入される新しい情報や、意外性や対比が含まれる要素が担う。文脈から既に推測や連想が可能となっている情報や、意味内容が希薄である情報は情報の重要度が低い。

先行研究によっては、「焦点」を「情報の重要度が高い要素」と考える先行研究場合もあれば(高見 1995)、語用論的な新情報として考える研究もある。この「焦点」と「情報の重要度が高い要素」は重複する場合もあるが、完全に一致するわけではない。高見が焦点と考えている「重要な情報」の重要度には段階があるものであり、焦点は段階があるものではない。主節の倒置では、倒置された主語が焦点を担うと東郷・大木(1986)やLahousse(2011)、Marandin(2011)が指摘しているが、従属節中の倒置の主語は必ずしも焦点に含まれるわけではない。例えば(26)では、文全体の焦点は主節にあり、文頭の *pendant que* 節は焦点ではないことは明らかである。しかし、*pendant que* 節の内部構造については問うことができる。*pendant que* 節中の倒置された主語は語数が多く情報量が多いことから、この従属節内で情報の重要度が高い要素と考えられる。

- (26) *Pendant que défilait par les rues les chars de verdure d'une fête folklorique, je regardais d'une terrasse d'estaminet la haute et sombre masse de schiste de son abbaye surplomber la kermesse de toutes ses fenêtres sourcilleuses, menaçante et de dur orgueil comme une manse du Grand Forestier.*

(Gracq. J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 78)

Lit. *While paraded through the streets the green floats of a folk festival, I watched from a tavern terrace the high and dark mass of schist of its abbey overhanging the fair from all its stern windows, threatening and with hard pride like a manse of the Grand Forestier.*

¹⁸ Fuchs (1997) にも同様の指摘がある。

¹⁹ 「情報の重要度」は、高見(1995)が用いている用語であり、次のように定義されている。「話し手が聞き手に特に伝達したい部分、つまり断定 (*assert*) している部分を焦点、または重要度が高い情報と呼ぶ」(高見 1995: 136)

このように従属節が文全体の焦点ではなくても、従属節中の倒置された主語が重要な情報である場合があるため、本論文では「焦点」と「情報の重要度」を区別して分析を行う。

情報の重要度は、発話を構成する各要素が、その節において提供する情報の価値であり、その語句の意味内容や、文脈によって差異があると考えられる。例として、関係節中の主語と動詞の情報の重要度について観察する。

(27) a. *C'est la maison où habite quelqu'un.

Lit. This is the house where lives someone.

b. C'est la maison où un politicien habite.

Lit. This is the house where a politician lives.

c. C'est la maison où un politicien a été tué.

Lit. This is the house where a politician was killed.

まず関係節中の主語の *quelqu'un* 「誰か」と *un politicien* 「ある政治家」を比較する。*quelqu'un* 「誰か」が担う情報には、非特定の「人である」という情報しかなく、情報の重要度は低い。それに対して、「ある政治家」は「人である」という情報に加え、「政治家」という職業の情報が付加されている。さらに不定名詞句であり、その文脈において新しく導入される指示対象を表す。*quelqu'un* に比べて *un politicien* の情報の重要度が高いと考えられる。(27a)のように、主語の情報の重要度が低い時、倒置の容認度が低くなる²⁰。また、動詞句については *habite* 「住んでいる」と *a été tué* 「殺された」を比べると、*habite* は先行詞の *la maison* 「家」と共起しやすい動詞であり、読み手が想起しやすいため、情報の重要度は低い。*a été tué* は先行詞から推測が困難な情報であり、動詞が担う情報の重要度は高いと考えられる。

このように各要素の情報の重要度は語彙や文脈によって異なる。本研究では、主語や動詞句が担う情報の重要度の差異が従属節中の語順に影響すると考え、従属節中の倒置には、従属節中の主語名詞句の担う情報の重要度が動詞句の担う情報の重要度よりも高いという条件が該当することを示す。

(28) 主語名詞句の担う情報の重要度 > 動詞句の担う情報の重要度

例えば、下の倒置の例は、主語が不定名詞句であり新しく談話に導入される情報であり、かつ語数が多く情報量が多い。それに対して動詞は1語であり、意味も存在

²⁰ Korzen (1983:66) は、*quelqu'un* のような不定代名詞の場合、倒置が妨げられると言及している。また平塚 (2002) は、関係節内の主語の *individuation* (個性) が低く、先行詞の指示対象の同定に寄与しないため、倒置の容認が困難となっていると指摘している。

を表す動詞であり情報の重要度が低い。主語名詞句の情報の重要度が、動詞句の担う情報の重要度よりも明らかに高いため、倒置が用いられていると考えられる。

- (29) *tous les endroits où vivent des minorités politiquement, socialement ou économiquement opprimées*. (Wall 1980: 25)
Lit. all the places where live minorities politically, socially, or economically oppressed.

また、例えば主語の焦点化では説明できない主節の倒置の例についても、情報の重要度で説明できる。

- (30) *En septembre apparaissent les grosses araignées*. (Lahousse 2011)

この倒置の例は、主語は定名詞句であり、動詞が出現を表す動詞となっている。主語名詞句は単語数が多いわけでも、新しい情報を表す不定名詞句でもない。しかし、動詞が「現れる」という出現を表す動詞であることで、相対的に主語のほうが情報の重要度が高くなる。「出現した」という動詞の担う情報よりも、「何が登場したか」という主語の情報のほうが、重要な情報と認められる²¹。文脈から、情報の重要度は動詞よりも主語が高いと言える。情報の重要度の高い主語を、重要度の低い動詞よりも後に置くために、倒置が用いられていると考えられる。

従属節中の語順には、主語名詞句や動詞句の語彙意味的な特徴や、文脈の特徴、その他の補語の有無や位置が影響すると考えられる。主語名詞句の担う情報の重要度のほうが相対的に高くなるには、主語の情報の重要度が高いか、動詞句の担う情報の重要度が低いか、の少なくともいずれかに該当する必要がある。この条件を満たす際の、主語と動詞句、その他の補語の要因については 2.4 節で述べ、先行研究における言及についても概観する。

第 3 章、第 4 章では、この情報の重要度という概念を用いて倒置を分析し、従属節中の倒置の容認される条件としては、主語や動詞句が焦点であるか、トピックであるか、というバイナリーな判断では説明するには限界があり、実際の倒置の現象には、主語や動詞句がそれぞれにどれだけの情報の価値があるか、という程度を問題にし、相対的に比較する必要があるという仮説を検証していく。

2.3.2. 「焦点」の定義

²¹ ただし、「現れたのか」「消えたのか」という対比が含意される文脈など、動詞のほうが情報の重要度が高くなる場合も考えられる。

「焦点」とは機能文法の枠組みにおいて用いられてきた語用論的概念である。焦点の定義は、分析対象や研究者の立場によって異なるうえ、複数のタイプの焦点が存在することが指摘されている (Dik 1989, Erteschik-Shir 1997, Kiss 1998)。Dik (1989) では、Parallel Focus や Counter-Presuppositional focus など、様々な焦点があることを指摘しているが、本論文における「情報の重要度」と重複する部分が多い。また、Erteschik-Shir (1997) の restrictive focus (exhaustive focus) を用いた Lahousse (2011) の分析には問題があり、倒置の分析に使用するには不適切と言える。したがって本論文では、Lambrecht (1994) における焦点の定義を援用する。

- (31) 焦点：発話時において、聞き手が既に知っていたり、当然と考えているであろう話し手が考えることに関して、発話によって伝えられる新しい情報を表す発話の部分を指す。

質問に対する応答の答となる部分や、先行文脈に対して追加される新しい情報が焦点となると考える。焦点の範囲に関しては、先行文脈によって異なり、一つの要素のみである場合も、主語と動詞や文全体など広範囲となる場合もある。

- (32) a. Who saw Bill? - JOHN saw Bill/him. (narrow focus, argument focus)
b. Who did Bill see? - Bill/he saw JOHN. (narrow focus, argument focus)
c. What did Bill do? - Bill/he went straight HOME. (broad focus, predicate focus)
d. What happened? - BILL went straight HOME. (broad focus, sentence focus)
(Lambrecht 1994: 297)

a と b では、それぞれ JOHN が狭い焦点であり、c では動詞句 went straight home、d では文全体が焦点となっている。このように、文脈によって焦点の範囲は異なる。

先行研究において、倒置の機能には主語の焦点化があると言われている (Bailard 1981, 東郷・大木 1986, Fuchs & Fournier 2003)。ただし倒置の例によっては、焦点の範囲が主語のみである場合と、動詞句と主語が含まれる場合がある。本研究では、主語の焦点化の機能について考察するうえで、主語を焦点として提示する機能があると言えるか判断する際に、主語の焦点化を次のように考える。

- (33) 主語の焦点化：倒置によって、主語のみを焦点として表すこと。

焦点に従属節全体や、従属節内の動詞句などが含まれている場合は、主語の焦点化とは区別して考えることとする。本論文で主語の焦点化とは、主語が狭い焦点を担っている場合とする。

2.4. 情報の重要度に関連する各要素の特徴

本節では、従属節中の倒置について分析するにあたり、情報の重要度と関連する各要素の特徴について本論文における考え方を述べる。倒置という語順の問題を扱ううえで、着目する主語の特徴、動詞句の特徴、そしてその他の補語の特徴を挙げる。なお、ここで示す特徴には焦点と関係するものもあるが、ここでは触れない。

2.4.1. 主語の特徴

2.4.1.1. 主語名詞句の長さ

まず各要素の語句の「長さ」について述べる。主語名詞句と動詞句の「長さ」と倒置は密接な関係にあることが、Le Bidois (1952) や Wall (1980) を始めとして様々な先行研究で言及されている²²。主語名詞句が動詞句よりも語数が多く長ければ、倒置が容認されやすく、主語が短ければ正置になりやすいと言われている。下の例はそれぞれ (34) が関係節中の倒置の例、(35) は理由節中の倒置の例である。理由節は倒置が稀だと言われているが、主語の語数が長いと倒置が容認されるとされている²³。

(34) tous les endroits où vivent des minorités politiquement, socialement ou économiquement opprimées. (Wall 1980: 25)

Lit. all the places where live minorities politically, socially, or economically oppressed.

(35) C'était peut-être parce qu'étaient si divers les êtres que je contemplais en elle à cette époque [...]. (Proust; in Le Bidois 1952: 312)

Lit. It was maybe because was so diverse the beings that I contemplated in her at that time [...].

²² « L'inversion est d'autant plus facile et naturelle que le sujet est plus développé par rapport au verbe. » (Le Bidois 1952: 376)

Wall (1980) は主語や動詞句の単語数、音節数などに分けて分析し、絶対的な「長さ」だけではなく、相対的な「長さ」も考慮する必要があることを指摘している。

« [...] il faut tenir compte non seulement de la longueur absolue du verbe et du sujet mais aussi de leur longueur relative. » (Wall 1980: 37)。

²³ « 1. CAUSALES. Les exemples d'inversion pure sont très rares dans ce type de subordonnées. [...] Cependant l'inversion peut être facilitée, soit par la longueur du sujet et de ses dépendances, soit par l'interposition d'un objet indirect ou d'un adverbe entre la conjonction introductrice et le verbe. » (Le Bidois 1952: 312)

« 5. CONCESSIVES. Le sujet s'invertit très rarement dans ce type de subordonnée. » (Le Bidois 1952 : 320)

(34) では、主語名詞句が 7 語に対して動詞句が 1 語であり、主語の語数が多い。(35) では主語が制限的關係節を伴う例である。両例とも主語が長いのに対して、動詞の語数は少ない。語数が多い要素はその分、情報量が多くなる。情報量を多く含む要素は、その発話において情報の重要度が高くなると考えられる。そして倒置には、情報の重要度が高い主語を節末や文末に置こうとする働きがあると考えられる。

また、主語が列挙となっている場合も、主語の語数が多くなり、情報の重要度が高くなる。Lahousse (2011) は従属節中の主語の列挙の例は扱っていないが、主節の倒置が起こりやすい条件として、主語が列挙である例を挙げている。(36) は主語 *la folie douce, l'humour fantasque* が列挙となっている例である。

(36) Avec lui, dans la sage demeure, entrent alors la folie douce, l'humour fantasque.
(Troyat; in Lahousse 2011: 168)
Lit. With him, in the wise house, enter then the sweet madness, the whimsical humor.

(36) のように、主語の名詞句が並列され、列挙となっている場合、主語の情報量が増えることで、その従属節内の情報の重要度は高くなると考えられる。

このように主語の語数が多いと倒置が好まれるものの、主語名詞句が短く、動詞句の語数のほうが多い場合でも倒置は可能である。関係節中の倒置では、動詞が直説法現在形や半過去形である例のうち、主語が 2 語か 3 語である例が約 4 割を占めるという結果が示されている (Wall 1980: 28)。(37) では主語が短く、語数的には正置が自然であるような主語と動詞の組み合わせとなっているにもかかわらず、倒置が用いられている。

(37) Ces acteurs dont l'art, bien qu'il me fût encore inconnu, était la première forme, entre toutes celles qu'il revêt, sous laquelle se laissait pressentir par moi, l'Art.
(Proust; in Le Bidois, 1952: 379)²⁴
Lit. These actors whose art, although it was still unknown to me, was the first form, among all those which he wore, under which was sensed by me, the Art.

Le Bidois (1952) は、*l'art individuel des acteurs* と *l'Art* の対比を表すために、倒置を用いていると述べており、語数が少ない主語であっても、対比が含意されているなど、その他の要因によって主語名詞句の担う情報の重要度が高くなることがある。

²⁴ Le Bidois (1952) は (33) の例に関して、主語の語数が少なくとも、倒置を用いて文末に主語を置くことで、主語名詞を重要な単語として見せる効果があると指摘している。

2.4.1.2. 主語の定性

次に主語の定性という要因については、主語が不定名詞句であり非特定のである時、後置が好まれると言われている²⁵。定名詞句が既に談話に導入されている指示対象を表すのに対して、不定名詞句は談話に新たに導入される指示対象を表す。新しい指示対象を表す要素が担う情報の重要度は高いと考えられる。(38)(39) では、それぞれ *des criminels* と *un nouvel écrivain* という不定名詞句が主語となり、倒置されている例である。

(38) Je crains que ne soient relaxés des criminels. (Lahousse 2011: 139)

Lit. I'm afraid that will be relaxed criminals.

(39) La frayeur qui s'empare des critiques chaque fois qu'apparait un nouvel écrivain les pousse à vouloir à tout prix lui trouver des antécédents. (Gildin 1980: 59)

Lit. The dread that takes hold of critics whenever appears a new writer spurs them to find ancestors for him at any price

一般的に指摘されているように、主語が新しい指示対象を導入する働きを担うため、主語が動詞よりも重要な情報を担い、倒置が用いられていると考えられる。

一方で、主語が *rien* や *tout le monde* といった不定代名詞の場合は、倒置が容認されにくいという傾向がある。不定代名詞の場合、伝達される情報が抽象的であり、情報としての重要度が低いため、倒置が妨げられると考えられる。

(40) a. Le fournisseur des ateliers royaux de tapisserie, décorateur proluxe, exécute des allégories des saisons que rien ne sauve de la banalité

Lit. The supplier of the royal workshops of tapestry, prolific decorator, executes allegories of the seasons *that nothing saves from the banality*.

b. * (...) que ne sauve de la banalité rien

Lit. (...) that saves from the banality nothing (Fuchs 1997: 154)

この例は、主語が不定代名詞で情報の重要度が低いということだけではなく、動詞句に補語や属詞が含まれていて、動詞の情報の重要度が高いことも倒置を妨げる要因となっていると考えられる。

²⁵ Wall (1980) や平塚 (2002) では、2~3 語の不定名詞句を主語とする関係節において、特に倒置の例が多くなるわけではないと指摘している。ただし、正置と倒置における不定名詞句の頻度を比較すると、倒置のほうが不定名詞句が占める割合が高くなる (第3章参照)。

2.4.1.3. 主語の指示対象の有生性

主語の意味的な特徴に関して、Fuchs (1997) や平塚 (2002) は、関係節中の主語の指示対象が有生で人という属性を持つ場合、倒置が容認されやすいと指摘している。その理由として、平塚 (2002) は、関係節の先行詞の指示対象の同定に寄与する度合いが主語のほうが高い時に倒置しやすいと主張している。(41) の倒置された主語 *son amant* は、主語の指示対象が有生であり人を表し、先行詞 *la nostalgie* の指示対象を同定しやすくなるため、倒置が容認されていると言われている。

- (41) (...) elle a, presque aussitôt, la nostalgie de la douleur où l'a plongée son amant.
(Fuchs 1997 :162)
Lit. (...) she has, almost immediately, the nostalgia of the pain where has plunged her her lover.

また、(42)のように事物を表す主語名詞句が倒置されることで、*la maladie* 「病」が擬人的に解釈されるという見解もある (Fuchs 1997: 155) ²⁶。

- (42) C'était là une des façons qu'avait la maladie de détourner l'attention et de brouiller les cartes (Camus; in Fuchs 1997: 155).
Lit. This was one of the ways that had the disease to divert attention and shuffle the cards.

主語名詞句は、静的な事物ではなく、有生で人という特徴を持つときに情報として認知的な際立ちが高くなり、さらに動詞よりも重要な情報だと判断されると、倒置が容認されやすいと考えられる。

2.4.1.4. 対比が含意された主語

文脈において対比が含意されている要素も重要な情報となり、倒置されやすくな

²⁶ « Enfin, on constate qu'un sujet « animé humain » est plus facilement postposable qu'un sujet « inanimé » (...) L'interaction doit ici se comprendre comme bi-directionnelle : choisir un N sujet « humain » conduit à postposer le sujet, mais choisir de postposer le sujet peut aussi être une manière de recatégoriser le N sujet avec la propriété « humain » ; c'est ainsi que, dans l'exemple suivant, « l'inversion insiste sur la personnification de l'épidémie en train de s'étendre » – selon les termes de Clifford (1973, p. 383) » (Fuchs 1997 : 155)

る。(43) の制限的關係節内の倒置された主語が他の指示対象と対比が含意されている場合、倒置が容認される。

- (43) a. Celle qu'aime François, c'est Marie.
Lit. The one that loves François, it's Marie.
b. Celle que François aime, c'est Marie.
Lit. The one that François loves, it's Marie. (平塚 2002: 138)

平塚 (2002) では、關係節内の主語 François の *individuation* が高く、先行詞を同定するために主語の寄与が大きいため倒置が容認されると分析している。それだけではなく、倒置と正置では、異なる文脈が想定される。倒置は、主語に対比が含意され、例えば「Paul ではなく François が好きな人」というように、主語の指示対象が問題となっている文脈で用いられていると言える。一方「François が嫌いな人ではなく、好きな人」という、動詞の情報に対比が含意される文脈であれば、倒置は容認されず正置として *Celle que François aime* となると考えられる。丹羽 (1982) は、次のように主語が対比されている場合、正置は容認されず、倒置となることを示している。

- (44) *Elle a reçu le cadeau que Jean avait envoyé, non pas Paul (丹羽 1982: 32)
Lit. She received the gift that Jean had sent, not Paul
(45) Elle a reçu le cadeau qu'avait envoyé Jean, non pas Paul (*ibid.*)
Lit. She received the gift that sent had Jean, not Paul

先に挙げた Fuchs (1997) の例では、動詞が対比となっている場合、正置が好まれると指摘されている。

- (46) C'est là que débarquent tous les naufragés du Vieux Monde (...). Les premiers socialistes allemands, les premiers mystiques russes. Les idéologues que les polices d'Europe traquent ; ceux que la réaction chasse
(Cendrars; in Fuchs 1997: 164)
Lit. It is where all the castaways of the Old World land (...). The first German socialists, the first Russian mystics. The ideologues that the police of Europe track down; those whom reaction chases away

この例の動詞 *traquent* は後続の *chasse* という動詞と対比になっているため、正置となっている。

このように単に主語と動詞のそれぞれの意味的な特徴だけではなく、対比という文脈によって各要素が担う情報の重要度が変わる。対比が含意されてより重要度が高い情報である主語を節末に置くために倒置が用いられると考えられる。

2.4.2. 動詞句の特徴

本節では、倒置と情報の重要度に関連する動詞句の特徴について、本論文の分析の方針を示す。意味的には、意味内容の希薄さ、存在や出現を表す動詞のような提示的機能、先行詞との強い意味的なつながりが情報の重要度を低くする要因となることを確認する。文法的には、助動詞の有無や否定の有無、直説法と接続法の別、受動態、時制が情報の重要度を左右することを示す。

2.4.2.1. 意味内容が希薄な動詞

動詞が *être* や *avoir*、*faire* といった、軽動詞 *light verb* や連結動詞 *verbe de liaison* と呼ばれる動詞は、意味内容が希薄であり、目的語や状況補語がないとき、倒置されやすいと言われている²⁷。特に (47a) のように関係節中の動詞が *être* の単純時制（直説法現在形や半過去形）であり、関係代名詞が関係節中の主語の属詞であるとき、倒置は義務的となり^{28,29}、(47b) のように正置の語順で文末に置かれると容認不可とな

²⁷ 主節における倒置においても、文頭に状況補語がある場所句倒置で動詞が *être* であるとき、倒置が義務的である (Fuchs & Fournier 2003)。

« Quand le terme initial X est régi par le verbe (X locatif ou complément indirect), la postposition du sujet est obligatoire ou fortement contrainte :

[2] Là est tout le problème. » (Fuchs & Fournier 2003: 81)

‘There is all the problem.’

²⁸ « [...] l’affinité forte entre la postposition du sujet et «que l’attribut du sujet + être + SN sujet ». Plusieurs auteurs ont noté que l’affinité est maximale (configuration prototypique) lorsque l’on a affaire au verbe *être* employé seul et conjugué au présent ou à l’imparfait. » (Fuchs 1997 :167)

²⁹ さらに Le Bidois (1952) では、*être* 以外の「コピュラ的な動詞 (*sembler*, *devenir*, *rester*, etc.)」でも同様に倒置が起きやすいと述べている。

« L’inversion peut se faire également quand le conjonctif attribut se rapporte au sujet par un verbe copule tel que *sembler*, *devenir*, *rester* » (Le Bidois 1952 :243)

- Dans le chemin de croix que devient la vie des impotents menacés (Le Bidois 1952: 243)

‘In the way of the cross that becomes the life of the helpless threatened’

- Ce seul fantôme digne de hanter notre vie que reste une passante dont nous ne savons rien (ibid.)

‘This only ghost worthy of haunting our lives that remains a passerby of whom we know nothing.’

しかし Wall (1980) は、これらの動詞の倒置の例数は多くはないため、*être* と同様に倒置しやすいと認めるのは些か危険であると指摘している。

« En tout, nous n’avons trouvé qu’une vingtaine de cas, ce qui rend un peu risquée la conclusion que ces verbes ont un comportement identique à celui de *être*. » (Wall 1980: 47)

る。(47c) のように動詞が être の単純形であっても、属詞などが続く場合は正置の語順であっても、自然な表現となる。

- (47) a. ... cette chose atroce qu'est la jalousie.
Lit. ... this thing atrocious which is the jealousy.
b.* ... cette chose atroce que la jalousie est.
Lit. ... this thing atrocious which the jealousy is.
c. ... cette chose atroce que la jalousie est trop souvent.
Lit. ... this thing atrocious which the jealousy is too often.

(朝倉 2002: 516)

間接疑問でも、quel、ce que が主語の属詞に相当し、倒置された動詞が être である場合、正置にすると容認度が下がる (Le Querler 1997)。

- (48) a. Je demandai à mon gendre, en souriant, quels avaient pu être mes mobiles
Lit. I asked my son-in-law, smiling, what could have been my motives
b. *Je demandai à mon gendre, en souriant, quels mes mobiles avaient pu être.
I asked my son-in-law, smiling, what my motives could have been.

(Le Querler 1997: 197)

コンピュータの être 以外の存在や出現を表す動詞も、意味的に弱い動詞として考えられており、倒置されやすいと言われている (Fuchs 1997, Fuchs & Fournier 2003)³⁰。出現や存在を表すとき、「存在するか否か」という動詞の表す情報と、「何が存在するのか」という主語の情報を比較した時に、後者の主語の情報のほうが重要とみなされやすいと考えられる。動詞よりも重要度が高い主語を節末位置に置くために倒置が用いられると推測できる。(49) は関係節中の動詞が exister で、倒置が用いられている例である。

- (49) L'inconnu, dans des pays entre lesquels existe une circulation permanente et qui subissent les mêmes influences, est une exception
(Le Monde; in Fuchs 1997: 144)
Lit. The unknown, in countries between which exists a permanent circulation and which follow the same influences, is an exception

先行研究では、倒置された動詞はテーマ的であるといった記述がされてきた

³⁰ « D'une façon générale, ce sont des verbes au sémantisme faible, tournant autour des valeurs de la copule (identité, existence, localisation, appartenance, possession, etc.) qui se rencontrent avec des sujets postposés. » (Fuchs & Fournier 2003: 86)

(Fuchs 1997)。しかし本研究では、意味内容が希薄な動詞がテーマ的であるか否かという問題よりも、主語との情報の重要度の差を考慮し、動詞句の意味内容が希薄であり情報の重要度が低い場合、倒置が容認されると考える。

他にも、以下のような特定の動詞は意味的な重み *poids sémantiques* が軽く、倒置を導きやすいことが指摘されている (Wall 1980)。倒置を導きやすい動詞のリストと、その動詞を含む例を挙げる。

(50) 倒置を導きやすい動詞のリスト³¹

1. 同定を表す動詞 : être, constituer, devenir, sembler, rester
2. 所在を表す動詞 : être, exister, figurer, se trouver, se situer, demeurer, dormir, habiter, reposer, résider, vivre, commencer, manquer, apparaître, disparaître, arriver, sortir, naître, etc.
3. 方向を表す動詞 : aller, venir, aboutir, conduire, dépasser, émerger, entrer, fréquenter, provenir
4. 所有を表す動詞 : appartenir, accumuler, appliquer, avoir, compter, disposer, encourir, éprouver, impliquer, posséder, tenir
5. 願望を表す動詞 : vouloir, désirer, chercher, espérer, exiger, rechercher, souhaiter
6. 生産を表す動詞 : faire, apporter, causer, coudre, créer, fabriquer, laisser, opérer, pousser, produire, préparer, provoquer, publier
7. 知覚や発話を表す動詞 : voir, regarder, dire, parler, enregistrer, fixer, annoncer, indiquer

(51) Il regarda l'autre bout de la table où étaient les filles.

(Rey H.: 266; in Wall 1980: 50)

Lit. He looked the other side of the table where were the girls.

(52) (...) ils avaient une maison pas loin d'où va Jean,

(Philippe: 131; in Wall 1980: 57)

Lit. (...) they had a house not far from where goes Jean,

(53) (...) c'est ce côté à la fois déplaisant et malsain qu'ont les formes.

(Paris-Match 20 oct. 1973; in Wall 1980: 58)

Lit. (...) it is this side at the same time unpleasant and unhealthy that have the forms.

(51)~(53) では、主語は定名詞句や固有名詞であり、主語の情報の重要度は高くないように見えるが、動詞の意味的な重みが軽いため、倒置が可能となっている。ただ

³¹ Wall (1980) で挙げられている例のリストを基にしている。

し、このリストの動詞が常に意味的に軽いわけではなく、意味的に軽くなる条件については検討すべき問題が残るが、本論文では扱わない。

2.4.2.2. 先行詞との意味的なつながりが強い動詞

動詞自体の意味内容が希薄である場合以外でも、先行詞との意味的なつながりが強い動詞は倒置されやすいことが指摘されている (Fuchs 1997)³²。先行詞と動詞が共起しやすい組み合わせである場合、先行詞から動詞が連想可能であり、動詞が持つ情報の重要度は低くなる。(54) は同じ *rechercher* という動詞が用いられた倒置と正置の例である。

(54) a. L'objectif que recherche le gouvernement est pourtant fort clair.

(Paris-Match, 20.07.72: 25; in Fuchs 1997: 159)

Lit. The objective that seeks the government is however very clear.

b. À l'allure de doux voyou (...) avaient succédé une vraie beauté et un talent chaque jour plus sûr, que les grands metteurs en scène recherchaient

(L'Express, 18-24.09.72: 42; in Fuchs 1997: 159)

Lit. At the allure of gentle punk (...) have succeeded a real beauty and a talent each day clearer, that the great directors were looking for

(54a) の場合、先行詞 *l'objectif* と動詞 *rechercher* の意味的なつながりが強い。先行詞と動詞は縁語関係にあり、一方の単語から連想によって他方の単語を導き出しうる、対となるような組み合わせである。このように、先行詞から連想が可能である動詞の情報の重要度は低いと言える。先行研究においても、動詞を省略し、名詞句 *L'objectif du gouvernement* と言い換えが可能であると言われており (Fuchs 1997: 159)³³、情報の重要度が低い動詞を節末からはずすために倒置が用いられていると考えられる。一方、(54b) の動詞 *rechercher* は先行詞 *une vraie beauté et un talent* と連想関係にはなく、叙事的な役割を果たすため、省略は不可能であるとされている³⁴。

³² « Ceci explique qu'un même verbe puisse prendre différentes valeurs, et en particulier qu'il puisse marquer tantôt une relation serrée, tantôt une relation lâche entre l'antécédent et le sujet, d'où une affinité tantôt avec la postposition du sujet tantôt avec son antéposition. » (Fuchs 1997: 159)

³³ « dans le premier exemple, le verbe pose une relation serrée entre l'antécédent et le sujet (cf. le caractère « restrictif » de la relative) paraphrasable par un complément de nom (l'objectif du gouvernement) » (Fuchs 1997: 159)

³⁴ 名詞句 *une vraie beauté et un talent des grands metteurs en scène* とすることは文法的には可能ではあるが、「偉大な演出家が追及する真の美しさや才能」であるのか、「偉大な演出家が持っている真の美しさや才能」であるのか、違いが明らかでなくなる。

この場合、動詞の情報の重要度が高いため正置となっていると考えられる。

動詞の意味がその文脈において凡庸であり、予期されるようなものであるとき、主語の前に置かれやすいと考えられる。つまり動詞が先行文脈と縁語関係にあれば、情報の重要度が低いため前置されるという説明に当てはめられる。動詞の情報の重要度が低いと、相対的に主語名詞句の担う情報の重要度が高くなる。情報の重要度が低い動詞を前に、情報の重要度が比較的高い主語を節末に置くために倒置が用いられる場合があると言える。

2.4.2.3. 助動詞の有無

助動詞の有無と倒置の関係に関して、主節の倒置に関しては、動詞が助動詞を含むと動詞句が長くなるため主語の後置が珍しくなると言われている。(55)の主節の例のように、近接未来形の助動詞 *vont* があると正置が好まれる。

(55) À cette température, deux sortes de composés vont apparaître.

Lit. At this temperature, two kinds of compounds will appear.

(Allègre; in Fuchs & Fournier 2003: 85)

一方、従属節中の倒置に関しては、助動詞が含まれていても倒置が可能である。助動詞の有無ではなく、むしろ助動詞の後の不定法の動詞の意味が倒置の要因となる (Wall 1980, Le Querler 1997)。下の例では助動詞 *devoir* が用いられており、単純な動詞の語数としては長いですが、続く不定法の動詞が存在や出現を表している。

(56) la colline opposée où devait se trouver le troupeau. (Wall 1980: 125)

Lit. the opposite hill where was to be the herd.

(57) Et dans les bacs de bois, où venaient boire les chevaux, une eau noire (...) frissonnait. (Wall 1980: 125)

Lit. And in the wooden tubs, where came to drink the horses, black water (...) shivered.

この例は 2.4.2.1 節の (49) や (51)(52) と同様であり、動詞句が存在と出現を表しており、動詞句の情報の重要度が低い。助動詞を含む動詞句であっても、主語名詞句の情報の重要度と比較して、主語のほうが重要な情報として認められる例である。モーダル助動詞があり動詞句の語数が多い場合でも、続く不定形の動詞が存在や出現を表すなど、情報の重要度が低い場合は倒置が用いられると言える。

2.4.2.4. 否定

動詞が否定辞を伴う場合、倒置になりにくい。否定辞がある場合、動詞句の語数が長くなるだけでなく、動詞句が担う情報が際立つため、焦点として節末に置く方が自然であると言われている (Fuchs 1997, Le Querler 1997)。(58a) は *des armes* にかかる制限的關係節中の動詞句に否定が含まれる正置の例であり、(58b) のように倒置にすると容認不可となると言われている (Fuchs 1997)。

- (58) a. Il est difficile en effet d'exiger de ces derniers qu'ils exercent un contrôle direct des armes que les Serbes ne retireraient pas du périmètre défini, dès lors qu'on leur refuse les effectifs nécessaires à un tel contrôle
Lit. It is indeed difficult to demand the latter that they exercise a direct control of the weapons which the Serbs would not withdraw from the defined perimeter, since they are denied the personnel necessary for such control.
- b. ??? (...) que ne retireraient pas du périmètre défini les Serbes
Lit. (...) which would not withdraw from the defined perimeter the Serbs
(Fuchs 1997: 163)

しかし (59) のように倒置が導かれやすい動詞である場合や、(60) のように限定表現 *ne... que* が主語にかかっている場合、倒置が自然である。

- (59) A plusieurs reprises, dans les zones d'ombre intense, là où ne parvenait pas la sourde lueur du ciel, elle dut se repérer (P. Rey; in Wall 1980: 136)
Lit. On several occasions, in areas of intense shadow, where did not reach the dull light of the sky, she had to find her way
- (60) (...) où rampent, à ras du sol, les corps couleur de cendre froide et faits d'une matière commune où ne vivent que les yeux (Fuchs 1997: 163)
Lit. (...) where crawl, low to the ground, the bodies of color of ash-cold and made of a common material where live only the eyes

動詞が表す事態が否定される場合は動詞句の情報の重要度が高くなるため、倒置が容認されにくくなる。ただし、動詞自体の意味内容が希薄である場合や、否定の対象が主語である場合は、動詞よりも主語の情報の重要度が高くなり、倒置が容認されると考えられる。

2.4.2.5. 直説法と接続法

法に関しては、動詞が直説法であるよりも接続法である方が倒置が自然であるとされている (Le Bidois 1952 : 292) ³⁵。

- (61) Elle attendit que se calmât un peu son allégresse. (Le Bidois 1952: 292)
Lit. She waited that calmed a little her joy.

接続法は、命題が真実であるか否かという断定を表さず、疑念や感情として表す (朝倉 2002)。その出来事や状態を強く事実として表すわけではないため、接続法の動詞の担う情報の重要度が低くなる場合があると考えられる。Lahousse (2011) は補文が接続法である場合でも、主語が不定名詞句であるなど、他に倒置が好まれるような要因がある必要があると指摘している。Wall (1980) でも接続法のほうが倒置されやすいと指摘しているものの、時間節や譲歩節の収集例が少なく、その傾向を明示できていない。本研究では、第 3 章において様々な従属節の倒置の例を収集し、その傾向が現れるか検討する。

2.4.2.6. 受動態

受動態に関しては、過去分詞がほぼ形容詞として働くような例もあるが、受動態の動詞も倒置されうる (Wall 1980, 東郷・大木 1986, Fuchs & Fournier 2003)。受動態が結果状態を表す倒置の例が多いが、出来事を表す場合には倒置よりも正置が好まれる (Wall 1980)。受動態の倒置の例としては、(62) のように位置を表す場合や、(63) のように *faire* の例が多い。この場合の *faire* は「作る」という動作を表すのではなく、「～からできる」という材料を表す。それに対して正置の場合の受動態は、(64) のように他動性の高い出来事の発生を表す傾向がある (Wall 1980)。

- (62) Cette chaise où était posée la valise. (Bastide: 13; in Wall 1980: 78)
Lit. This chair where was put the suitcase.
- (63) cet osier (...) dont sont faites les panières de fleurs.
(Sabatier: 140; in Wall 1980: 78)
Lit. this wicker (...) from which are made the baskets of flowers.
- (64) Le pétrole (...) n'a cessé de provoquer des remous partout où son nom était évoqué. (Le Monde 10-16 mai 1973: 4-3; in Wall 1980: 79)
Lit. The oil (...) has not ceased to cause stirs wherever its name was mentioned.

³⁵ « A) Le verbe de la subordonnée complétive est à l'indicatif [...] B) Le verbe est au subjonctif [...]. Il nous paraît incontestable que l'inversion est beaucoup plus naturelle dans les exemples du groupe B que dans ceux du groupe A » (Le Bidois 1952 : 291-292)

出来事を表す場合、「何が起こったか」を伝える要素として動詞の重要度が高くなり、主語よりも重要な情報となりうる。そのため、重要な情報を担う動詞を節末から外す倒置は容認されにくくなる。それに対して、結果状態を表す受動態である場合は、結果として「何が」その状態にいるのかという主語の担う情報が動詞よりも意味的に際立ちうると考えられる³⁶。動詞の表す状態の情報と比較して、主語のほうがより重要な情報と判断されると倒置が容認されると言える。

2.4.2.7. 時制

動詞の時制については、直説法現在形や直説法半過去形といった単純形のほうが、複合過去形や大過去形といった複合形よりも倒置されやすいと言われている (Wall 1980)。下の例は関係節中の動詞が現在形の例である。

(65) un petit noyau d'individus (...) auquel appartient l'auteur.

(Dutoud: 33; in Wall 1980)

Lit. a small nucleus of individuals (...) to which belongs the author.

現在形や半過去形である場合、状態や習慣、継続など、未完了の事態として表されるのに対して、複合過去形や大過去形の場合は、完了した出来事として表される。この完了と未完了のアスペクトの違いは、先の受動態の場合の動的・非動的の対立と同様であり、倒置は、未完了相で動詞が表す情報の重要度が低い場合に倒置が起きやすいと推測できる³⁷。

ただし、単純形であっても単純過去形では正置となりやすいと指摘されている (Wall 1980, Fuchs & Fournier 2003)³⁸。単純過去形は、過去の完了した出来事を表すため、完了アスペクトである。未完了アスペクトが倒置されやすいのに対して、完了アスペクトは倒置されにくいと考えられる。(66) では非制限的關係節内の動詞

³⁶ Hopper & Thompson (1980) では、事態が動的であるか状態的であるかによって他動性が異なることを指摘している。動的な動作の方が他動性は高く、状態を表す場合は他動性が低い。正置の時の受動態は他動性が高い出来事を表すのに対して、倒置の場合は、焦点位置から外すことによって、状態的な解釈が導かれ、他動性が低い状態を表す傾向があると考えられる。

³⁷ 未完了のアスペクトは他動性が低く、完了アスペクトは他動性が高いこととつながると考えられる (Hopper & Thompson 1980)。

³⁸ « Il nous semble pourtant peu risqué de présupposer, par exemple, une concordance entre d'une part l'usage du passé simple et la présence d'autres facteurs qui renforcent le poids sémantique du verbe et, d'autre part, entre l'usage de l'imparfait et une structure généralement invertissante de la subordonnée et du contexte. » (Wall 1980 : 75)

が単純過去形で正置となっている。(67) では *faire* という倒置が用いられやすい動詞であるため、単純過去形ではあるが、倒置が容認されている (Wall 1980)。

- (66) *Une vapeur s'échappait des naseaux, que Simon caressa.*
(Decoin: 215; in Wall 1980: 70)
Lit. A steam escaped from the nostrils, which Simon caressed.
- (67) *car telle fut l'expérience que fit Serge.* (Charles-Roux: 173; in Wall 1980: 70)
Lit. for such was the experience which did Serge.

(67) のように、単純過去形や複合過去形、大過去形であっても動詞の意味が意味内容が希薄であるような例がある。動詞の語彙意味や時制によって出来事として解釈され、動詞の情報の重要度が相対的に主語よりも高くなるため、倒置が容認されると考えられる。

2.4.3. その他の補語の特徴

2.4.3.1. 直接目的語・間接目的語の有無

従属節では、一般的には事態に関する参加者が少ないほど倒置されやすくなる。主語と動詞以外の補語、例えば直接目的語や間接目的語などがあると、倒置が起こりにくい傾向にあると言われている (東郷・大木 1986, Fuchs 1997, Fuchs & Fournier 2003, Fuchs 2006)。属詞や直接目的語、間接目的語が含まれると、それらの補語の情報量が大きくなり、相対的に主語の情報の重要度が低くなるため、倒置が容認されにくいと考えられる。(68) の関係節には属詞が含まれており、倒置が困難であることを示している。

- (68) a. (...) à côté de laquelle les mystères d'Eleusis ou la franc-maçonnerie sont des amusettes
Lit. (...) next to which the mysteries of Eleusis or freemasonry are amusements
- b. *(...) à côté de laquelle sont des amusettes les mystères d'Eleusis ou la franc-maçonnerie
Lit. (...) next to which are amusements the mysteries of Eleusis or freemasonry (LM: 1; in Fuchs 1997: 170)

ただし、直接目的語の名詞が無冠詞であり、動詞との組み合わせで熟語として働く場合や、直接目的語に所有形容詞や指示形容詞が付加されている場合に倒置がみら

れると指摘されている (Le Bidois 1952, Fuchs 2006) ³⁹。

- (69) a. La rue où avait lieu l'arrivée délibérée d'Albertine (Le Bidois 1952: 266)
Lit. The street where took place the deliberate arrival of Albertine
b. Celle dont faisait preuve M^{me} de Guermantes (ibid.)
Lit. The one of which showed Mme de Guermantes
- (70) Les plaisirs..., auxquels dans sa mémoire avaient donné leur forme ces canapés
sur lesquels, etc. (ibid.)
Lit. The pleasures ..., to which in his memory had given their form these sofas
on which, etc.

(69) は avoir lieu 「起こる」という発生を表す動詞句であり、主語のほうが意味の重要度が高くなるため、倒置が容認されていると考えられる。(70) は、動詞句が donner leur forme が「形作る」という準熟語であり、直接目的語の重要度は高くない。このように、目的語や状況補語が含まれる場合に必ずしも正置となるわけではない⁴⁰。

また、倒置された動詞の前に間接目的語が置かれる例は稀である。下の補文内の倒置の例では、間接目的語 au gouvernement Reynaud が動詞の前に置かれているが稀な例であると指摘されている。

- (71) On apprit qu'au gouvernement Reynaud succédait un gouvernement Pétain.
(Wall 1980: 167)
Lit. We learned that to the Reynaud government succeeded a Pétain government.

この例の場合は、「Reynaud 政府」の後に「Pétain 政府」が続くということを示しており、新しい情報として主語を提示するために倒置が用いられていると考えられる。つまり、古い情報から新しい情報という順序に並べられている。間接目的語が動詞の前に置かれることによって、主語を節末の焦点位置に置くことが可能になると考えられる。

³⁹ « Le cas le plus fréquent est celui où l'objet direct, construit sans article, forme avec le verbe une locution faisant bloc, qui ne peut être disjointe. » (Le Bidois 1952: 265-266)

« Même quand l'objet direct est un substantif précédé d'un article ou d'un adjectif possessif, démonstratif, etc., le nom sujet peut encore s'invertir surtout s'il n'est pas du même nombre que l'objet intercalé. » (Le Bidois 1952: 266)

⁴⁰ Fuchs (1997)によると、状況補語がある場合、倒置にすると主語名詞句の統語的な役割が不明確になり、正置のほうが好まれる。「L'affinité tendancielle avec l'antéposition peut s'expliquer par le fait que la présence d'un circonstant augmente la longueur et la complexité du prédicat par rapport au sujet : au plan syntaxique, la fonction sujet est alors plus difficile à décoder en cas de postposition. Mais une étude plus précise serait nécessaire, selon la nature du circonstant. » (Fuchs 1997: 148)

2.4.3.2. 状況補語

従属節中に状況補語がある場合、倒置が避けられ、正置が好まれる傾向にあると指摘されている (Fuchs 1997)。ただし、その状況補語の位置によって倒置のしやすさが異なり、(72a) のように状況補語が動詞よりも後に置かれると倒置されにくく、(72b) のように状況補語が接続詞の直後にあり、動詞よりも前に置かれていると倒置されやすい (Fuchs 1997, Wall 1980)⁴¹。

- (72) a. le journal que mon mari achète parfois (Wall 1980: 102)
b. le journal que parfois achète mon mari
Lit. the newspaper that sometimes buys my husband

Lahousse (2011) も、動詞句よりも前に状況補語があると倒置が可能となるとしている。状況補語が節頭に置かれることによって、その状況補語がその節における場面トピックとして働き、状況補語に続く動詞句と主語がその場面において成立する事象を表す。このとき、動詞よりも主語がより重要な情報と認められる場合に倒置が起きる。一方、動詞句の後に置かれた状況補語は場面トピックとはならず、状況補語が主語よりも重要な情報となる可能性がある。状況補語の位置によって、その状況補語がその節において担う役割が変化すると考えられる。

主節の倒置の場合、状況補語が文頭にある倒置は場所句倒置 *inversion locative* と呼ばれている。英語ではフランス語よりも倒置が起こりにくいものの、場所句倒置は一般的な現象である。

- (73) a. Down the stairs fell the baby.
b. On the table was put a valuable book.
c. Into the room walked John. (Coopmans 1989: 729)

英語の場所句倒置には主語を提示する機能があり、情報的に軽い *informationally light* 動詞のみが許容されると指摘されている (Bolinger 1977, Levin & Rappaport Hovav 1995, 中島 2001, Coopmans 1989)。英語の従属節内の場所句倒置は、主節現象⁴²の一つとして考えられており、場所句倒置は主語を強調して表す役割を担うとき

⁴¹ « Lorsque le 4^e constituant est un circonstant, les deux positions du sujet se rencontrent, mais une affinité tendancielle se manifeste avec l'antéposition. » (Fuchs 1997: 148)

⁴² 主節現象とは、主節においてのみ許される現象であり、従属節内では非文法的となる現象である (Green 1976)。

れている (Hooper & Thompson 1973)。主節現象が容認される従属節は断定を表す従属節に限られ、先行詞が定名詞句の制限的關係節などのように前提を表す従属節には情報構造がないため、主節現象の容認度が下がるとされている。フランス語の従属節における場所句倒置は十分に考察されていないが、場所句倒置にも従属節中の情報構造との関連があると考えられるため、第4章において論じる。

2.5. まとめ

本章では、従属節中の倒置を情報構造の観点から分析するために用いる概念を定義し、先行研究における倒置と情報構造の關係の分析と、情報の重要度に関連する主語、動詞句、その他の補語の特徴を概観した。2.2 節では先行研究において情報構造の側面から倒置がどのように分析されてきたかについて述べた。Marandin (2011) や Lahousse (2011) が示すように、倒置の例によって焦点の範囲や性質は異なっており、倒置が用いられる積極的な理由や、倒置が主語の焦点化を担うかという問題については不明確な点があることを指摘した。2.3 節では、本論文において用いる「情報の重要度」と「焦点」という二つの概念の定義を示した。情報の重要度は主語や動詞句が担う情報の量と質を考慮し、スカラー量的に考える。それに対して、焦点は質問に対する答のように、文脈によってバイナリーに決定されるものと考えられる。そして 2.4 節において、主語や動詞句、その他の補語の特徴と情報の重要度との関連を示した。表 1 は各要素と主語と動詞句の重要度の關係について表したものである。

第3章では、表 1 にまとめた特徴にもとづいて従属節中の倒置の例を分析し、關係節、補文節、副詞節など、様々な従属節における倒置は情報の重要度によって説明することができることを示す。また、状況補語の位置も情報構造に影響すると考えられるため、第4章では節頭に状況補語が置かれる場所句倒置について、従属節のタイプごとに倒置の頻度と語用論的特徴を分析する。第5章では、従属節における倒置の焦点の範囲が主語のみとなる場合があるのかを検討する。

	主語の情報の重要度が高い	動詞の情報の重要度が高い
主語名詞句の長さ	主語が動詞句よりも長い	主語が動詞句よりも短い
主語の定性	主語が不定名詞句	主語が定名詞句
主語の指示対象の有生性	主語が有生かつ人	主語が無生物
対比	主語に対比が含意されている	動詞句に対比が含意されている
意味内容が希薄な動詞	動詞の意味内容が希薄・抽象的	動詞の意味内容が具体的
先行詞と動詞の意味的なつながり	先行詞と動詞に縁語関係がある	先行詞と動詞に縁語関係がない
助動詞の有無	決定的な差はなく、動詞の意味に影響される	
否定	主語が否定の対象である	動詞句が否定されている
直説法・接続法	(接続法)	(直説法)
受動態	状態を表す受動態	出来事を表す受動態
時制	単純時制	複合時制
目的語	目的語がない、または代名詞	直接・間接目的語名詞句を含む
状況補語	節頭にある	動詞よりも後にある

表 1：各要素の特徴と主語と動詞の情報の重要度の関係

第3章 従属節中の主語名詞句の倒置と情報構造⁴³

3.1. 本章の目的

本章では、フランス語の従属節中の主語名詞句の倒置が、書き言葉においてどのように用いられているのかについて、量的・質的に分析を行う。本章で分析対象とするのは、従属節の接続詞の直後に動詞がある倒置とし、場所句が接続詞と動詞の間にある例は除外する。第2章で、主語や動詞、その他の補語の特徴と情報の重要度の関係についてまとめた。その特徴が、実際の従属節中の倒置の例においてどのように現れるのか、コーパスを用いて検討することを目的とする。

分析方法として、フランス語書き言葉コーパス Frantext を使用して、従属節中の倒置の例を収集し、いずれの従属節についても主語名詞句と動詞句の情報の重要度によって倒置が説明できることを示す。そして、従属節のタイプ⁴⁴や接続詞によって倒置の頻度が異なることを指摘し、情報構造との関連について分析する。

まず 3.2 節では、本章で扱う例文のデータの収集方法と、収集した結果として倒置と正置の割合を接続詞ごとに示す。さらに 3.3 節では各従属節中の倒置の例と正置の例について、情報の重要度の観点から考察する。3.4 節では 2 章で示した情報構造に関する特徴が倒置に及ぼす影響の強さについて述べ、3.5 節では本章のまとめを行う。

3.2. データの概要

3.2.1. データ収集の方法

従属節中の倒置の例と正置の例を分析するため、下記のコーパスを用いて、関係節、補文、副詞節の例を収集した。

- (1) 使用コーパス：Frantext
対象文献：1980 年以降に出版された文献
検索実施：2017 年 6 月
- (2) 収集対象の例の語順
正置：接続詞＋固有名詞、限定辞（冠詞、所有形容詞、指示形容詞）

⁴³ 谷口 (2018)

⁴⁴ 制限的關係節、非制限的關係節、補文、副詞節の別を従属節のタイプと呼ぶ。

倒置：接続詞＋動詞、否定辞 *ne*、再帰代名詞、目的語代名詞

(3) 対象とする接続詞と典型例

- a. 制限的關係節： *que*⁴⁵ ‘that/which’, *ce que* ‘what’, *dont* ‘of which’, *où*⁴⁶ ‘where’, 前置詞+*lequel* ‘to which’⁴⁷

Tu vas me faire gober que tu n’es même pas sûr du métier *que* faisait *ton grand-père* ?

(Benoziglio J.-L., *Cabinet portrait*, 1980: 102)

Lit. Are you going to make me swallow that you’re not even sure of the job which was doing *your grandfather*.

On verra dans dix, vingt ans, *ce que* fera *ce bébé Nobel*.

(Dolto F., *La Cause des enfants*, 1985: 146)

Lit. We will see in ten, twenty years, what will do *this baby Nobel*.

- b. 非制限的關係節⁴⁸： *que* ‘which’, *dont* ‘of which’, *où* ‘where’

Et tous les fiascos en fleur, *dont* parle *Beckett*, qu’aucune bise aigre encore n’était venue dessécher, étoilaient une beauté du diable, [...].

(Gracq J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 182)

Lit. And all the fiascos in bloom, of which speaks *Beckett*, that no bitter wind had yet come to dry up, starred a beauty of the devil, [...].

- c. 補文・間接疑問： *que* ‘that’, *où* ‘where’, *comment* ‘how’, *combien* ‘how many’, *voici/voilà que* ‘here/there is that’

[...] nous attendons *que* passe *la souffrance* [...].

⁴⁵ *que* 節は、關係節と補文を区別するため、關係節は *que* の直前に名詞が来る例、補文は *que* の直前に動詞が来る例に分けて収集した。

⁴⁶ 關係節の *où* 節と間接疑問の *où* 節を区別するため、關係節としては *où* の前 2 語以内に名詞が含まれる例、補文として *où* の直前に動詞が来る例を対象とした。

⁴⁷ 検索する際は、各接続詞の直前が名詞である例を対象とした。關係代名詞 *qui* は主格の關係代名詞であり、主格の關係節内には主語がないため、今回の分析対象からは除外する。また、*lequel* の女性形や複数形の *laquelle*、*lesquels*、*lesquelles* や、*duquel* ‘of/from which’, *auquel* ‘to which’は *lequel* に含める。

⁴⁸ 古川 (1983) が指摘しているように、關係代名詞の前に « , » ヴィルギュル (コンマ) がない場合でも、非制限的な意味である關係節が存在する。しかし、ここでは便宜上、制限的關係節と非制限的關係節の区別を關係代名詞の前のヴィルギュルの有無によって判断した。

(Soupault P., *Georgia. Épitaphes. Chansons et autres poèmes*, 1983: 263)
Lit. [...] we wait that pass the pain [...]

Très intrigué et sérieux tout à coup, il me demanda où était cet ami.
(Tournier M., *Le Médinoche amoureux*, 1989:143)
Lit. Very intrigued and serious all of a sudden, he asked me where was this friend.

- d. 時間を表す副詞節 : quand ‘when’, lorsque ‘when’, alors que ‘while’, dès que ‘as soon as’, pendant que ‘while’, avant que ‘before’, tandis que ‘while’

Les derniers oiseaux se sont tus depuis longtemps lorsque retentit dans les bois le hullement d’une chouette. (Simon C. *Les Géorgiques*, 1981: 38)
Lit. The last birds have been silent for a long time when resounded in the woods the hooting of an owl.

- e. 比較を表す副詞節 : plus / moins adj. que ‘more / less adj. than’, aussi adj. que ‘as adj as’, si adj. que ‘so adj that’, comme ‘as’, tel que ‘as’, autant que ‘as’

[...] cette initiation graduelle était érotiquement plus captivante que ne l’aurait été une licence d’un seul coup totale.
(Matzneff G., *Ivre du vin perdu*, 1981: 54)
Lit. [...] this gradual initiation was erotically more captivating than would have been a one-shot license.

- f. 目的を表す副詞節 : pour que ‘for that’

Et il lui fallait un après-midi de funérailles, un Manivelle retrouvé sur la tombe de Vincent pour que s’opère la fusion, le transfert.
(Thérôme V., *Bastienne*, 1985: 128)
Lit. And he needed an afternoon of funeral, a crank found on the grave of Vincent for that takes place the merger, the transfer.

- g. 除外を表す副詞節 : sans que ‘without that’⁴⁹

⁴⁹ 英語では without に that 節は続かないが、フランス語を逐語訳するために without that と表記する。

Il se décoiffa, s’assit au bord du lit sans que bouge le garçon...

(Cluny C.M., *Un jeune homme de Venise*, 1983: 153)

Lit. He took off his hair, sat down on the edge of the bed without that move the boy...

- h. 理由を表す副詞節 : *parce que* ‘because’, *puisque* ‘since’

C’est le métaphysicien bégayeur au visage concassé qui, [...], passera quelques mois à Rome où tu l’as déjà rencontré parce que ne comptent pour toi ni le temps ni l’histoire : c’est Ballanche.

(D’Ormesson J., *Tous les hommes sont fous*, 1993:170)

Lit. It is the stuttered metaphysician with a crushed face who, [...], will spend a few months in Rome where you have already met him because do not count for you nor time nor history: it’s Ballanche.’

- i. 譲歩を表す副詞節 : *même si* ‘even if’, *bien que* ‘although’

Pourtant, bien que se dégageât d’elle ce rayonnement qui enveloppe les femmes amoureuses ou simplement les femmes à la mode, ... (Duvignaud)⁵⁰

Lit. However, although emerged from her that radiance which envelops women in love or simply women in fashion, ...

以上の条件で検索後、分析対象ではない例を除外する作業を行った⁵¹。

3.2.2. データ収集の結果

上記の方法で Frantext から例を収集した結果、各従属節のカテゴリ及び従属接続詞ごとの倒置と正置の例数と割合は、図 1 と表 2 に表す通りとなった。まず、従属節全体における倒置の例数や割合の高い従属節と低い従属節についてまとめる。次に、従来の断定を表す従属節と非断定を表す従属節の分類と倒置の割合の関係について分析する。

⁵⁰ Lahousse (2011) からの引用。

⁵¹ 除外された例としては、Marie が固有名詞ではなく、動詞 *marier* の現在形として認識されていた例や、従属接続詞の直後にある中性代名詞 *y* ‘there’ が提示表現 *il y a* ‘there is’ の省略形である例などがあつた。

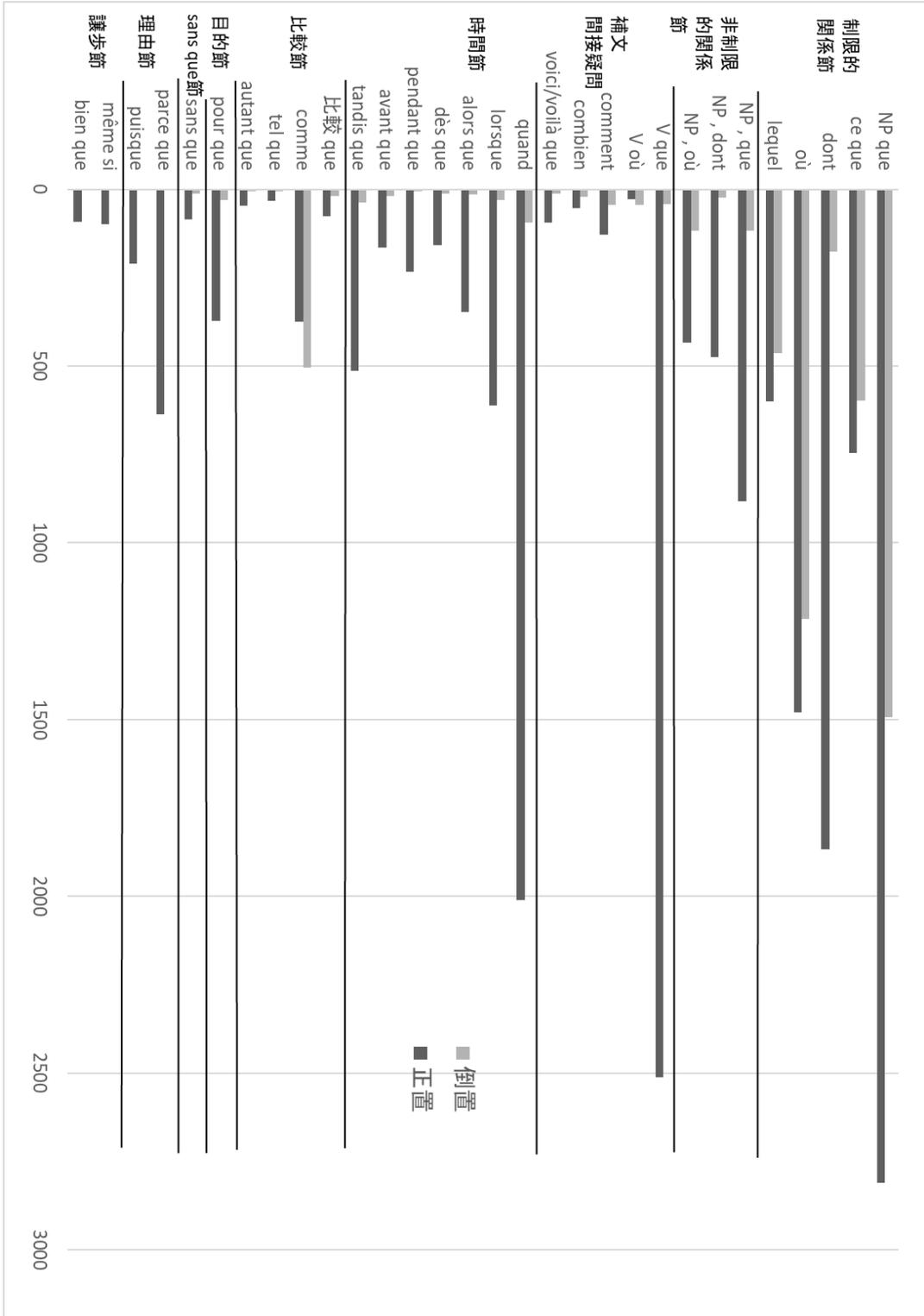


図 1 従属節中の倒置と正置の数

		SV	VS	total
制 限 的 関 係 節	NP que	2810	1493	4303
		65%	35%	
	ce que	745	598	1343
		55%	45%	
	NP dont	1868	176	2044
NP où	1479	1215	2694	
	lequel	601	464	1065
		56%	44%	
非 制 限 節	NP , que	882	116	998
		88%	12%	
	NP , dont	475	23	498
		95%	5%	
	NP , où	434	116	550
		79%	21%	
補 文	V que	2953	41	2994
		98%	1%	
間 接 疑 問	V où	31	54	85
		36%	63%	
	comment	129	44	173
		75%	25%	
	combien	53	21	74
		72%	28%	
	voici/ voilà que	93	11	104
		89%	11%	
時 間	quand	2001	95	2096
		95%	5%	
	lorsque	611	30	641
		95%	5%	

		SV	VS	total
時 間	alors	347	15	362
	que	96%	4%	
	dès que	159	11	170
		94%	6%	
	pendant que	234	6	240
		98%	3%	
	avant que	165	19	184
		90%	11%	
	tandis que	513	38	551
		93%	7%	
比 較	比較 que	76	18	94
		81%	19%	
	comme	374	504	878
		43%	57%	
	tel que	32	6	38
		84%	16%	
	autant que	47	5	52
		90%	10%	
目 的	pour que	372	30	402
		93%	7%	
sans que	sans que	85	11	96
		89%	11%	
理 由	parce que	636	3	639
		100%	0%	
	puisque	210	3	213
		99%	1%	
譲 歩	même si	98	0	98
		100%	0%	
	bien que	92	0	92
		100%	0%	

表 2 従属節中の正置 (SV) と倒置 (VS) の例数と割合

表2によると、従属節のタイプや接続詞のカテゴリーによって、倒置の割合にかなり差がある。まず倒置の例数と割合が高い従属節から挙げる。倒置の例数については、従属節のタイプでは制限的關係節が最も多く、その中でも *que* 節の 1493 例、*où* 節の 1215 例が多い。そして例全体に対する倒置の割合では、間接疑問の *où* 節は 63%、比較を表す副詞節の *comme* 節は 57% であり、倒置の割合が正置の割合を上回っている。続いて制限的關係節の *ce que* 節と *où* 節がそれぞれ 45%、*lequel* が 44% という結果が得られた。制限的關係節では頻繁に倒置されているという先行研究の記述と一致する結果であると言える (Wall 1980, Fuchs 1997)。さらに、これまでに指摘されてこなかった点として、間接疑問の *où* 節や比較を表す *comme* 節は制限的關係節よりも倒置の頻度が高いことが明らかになった。

次に倒置の例数や割合が低かった従属節を確認しておく。譲歩を表す副詞節 *même si* 節や *bien que* 節では倒置の例が見つからず、理由を表す副詞節も *parce que* 節と *puisque* 節を合わせて 6 例のみである (表 2)。この結果は、譲歩や理由を表す副詞節では倒置が珍しいという先行研究の記述を裏付けている (Le Bidois 1952, Lahousse 2011)。その他で倒置の割合が低かったのは、非制限的關係節の *dont* 節、補文の *que* 節、時間を表す *quand* 節、*lorsque* 節、*alors que* 節、*pendant que* 節であり、すべて 5% 以下である。

従属節の断定と非断定の区別と倒置の頻度の関係について、Lahousse (2011) は、断定を表す従属節は倒置の頻度が低いと述べており、理由や譲歩を表す従属節、直説法を用いる補文、非制限的關係節を断定の従属節としていた。表 2 によると、理由節や譲歩節は、従属節全体の中でも倒置の例数も頻度も少なく、非制限的關係節の *dont* 節も倒置の割合が 5% と低い。その他の非制限的關係節は *que* 節が 12%、*où* 節が 21% となっており、副詞節よりも倒置の頻度が高い。ただし、非制限的關係節と制限的關係節を比較すると、制限的關係節における倒置の割合は *que* 節が 35%、*dont* 節が 9%、*où* 節が 45% であり、非制限的關係節の方が倒置の割合が低い。これらをまとめると、非制限的關係節中の倒置の割合は、副詞節の倒置よりも大きい、制限的關係節中の倒置の割合よりも小さいということになる。Lahousse (2011) は、断定を表す従属節は前提を表す従属節よりも倒置に係る制約が強いため倒置が少ないと説明しているが、非制限的關係節については断定を表す従属節であっても、補文や副詞節を含めた全ての従属節の中で倒置の割合が低いのではなく、關係節という分類においてのみ頻度が低いと言える。断定を表す従属節は倒置の頻度が低い傾向にあるという点は正しいものの、従属節が關係節であるか、副詞節であるか、という従属節のタイプによって倒置の頻度は異なると考えられる。

このように、従属節の断定と非断定の区別と倒置の頻度の相関について、制限的關係節よりも非制限的關係節のほうが倒置の頻度が低いことが明らかになった。これに加えて、制限的關係節の中でも先行詞が定名詞句か不定名詞句かによって断定と非断定は区別される。制限的關係節のうち先行詞が不定名詞句の場合は、關係節は非制限的になるとされている (古川 1983, 河野 2012)。(4) は、それぞれ不定名詞句を先

行詞とする制限的關係節と非制限的關係節、定名詞句を先行詞とする制限的關係節と非制限的關係節である。定名詞句が先行詞となる場合、制限的關係節は先行詞の指示対象を同定するために必要な情報として非断定的だが、(4d) の非制限的關係節は同格の情報であって断定である。不定名詞句の場合、話し手はその指示対象の同定を求めるわけではないため、制限的關係節も非制限的關係節も同格的であり、(4a) と(4b) の間に大きな違いはないとされている (古川 1983)。

- (4) a. Un homme qui portait une cravate verte est entré.
 b. Un homme, qui portait une cravate verte, est entré.
 c. L'homme qui portait une cravate verte est entré.
 d. L'homme, qui portait une cravate verte, est entré. (古川 1983: 72)

これは、先行詞が定名詞句であるか不定名詞句であるかによって、制限的關係節は断定にも非断定にもなることを意味しており、倒置の頻度にも影響を与える可能性がある。そこで、収集したデータの關係節の que 節について、先行詞が定名詞句である例と不定名詞句である例をそれぞれ集計したところ、表 3 のようになった。

	SV	VS	total
定名詞句+制限的關係節 (le/la/les NP que)	1097 (64%)	610 (36%)	1707
不定名詞句+制限的關係節 (un/une NP que)	411 (76%)	132 (24%)	543
非制限的關係節 (NP, que)	434 (87%)	67 (13%)	501

表 3. 制限・非制限的關係節と倒置 (VS) の割合 (關係代名詞 que の場合)

倒置の割合を比較すると、次のような順に倒置の割合が低くなっている。

- (5) 定名詞句+制限的關係節 > 不定名詞句+制限的關係節 > 非制限的關係節

前提を表す關係節である、定名詞句に係る制限的關係節のほうが倒置が起りやすいと言える。それに対して、断定を表す關係節である、不定名詞句に続く制限的關係節や、非制限的關係節は倒置が起りにくい傾向があると言える。

その他、補文や副詞節における下位分類において、断定と非断定の区別が倒置の頻度に影響するかという点については、次節以降、従属節の各カテゴリーの分析において触れることとする。

3.3. 従属節ごとの倒置の特徴

本節では、關係節、補文、副詞節に分け、それぞれの倒置と正置の例を分析し、

倒置と情報の重要度の関係、すなわち、第2章で示した、主語、動詞句、その他の補語の特徴が、倒置の例に現れているかを分析する。また、前節で明らかにした各従属節中の倒置の頻度と、情報の重要度に関連する要因が何であるかについて、接続詞ごとに検討する。

3.3.1. 関係節中の倒置

関係節は、補文や副詞節に比べて倒置の頻度が高い。その理由としては、関係節の統語的特徴があると考えられる。主節の倒置では、直接目的語や間接目的語、状況補語が動詞の後に置かれると、倒置は容認されにくくなる。関係節の場合、単文では目的語や状況補語となる名詞句が関係代名詞となり、従属節内部にありながら従属節と主節の先行詞を結びつける役目を果たす。目的語や状況補語の名詞句がそのまま従属節内にあると倒置を妨げるが、それらが関係代名詞となり節頭に置かれることによって、従属節内の動詞句に含まれる要素が少なくなる。例えば (6a) の制限的關係節では、節内の要素数は動詞と主語名詞句という二つの要素のみであるのに対して、(6b) の補文では直接目的語がある分、制限的關係節よりも動詞句の要素数が多い。(7) でも同様であり、(7a) の非制限的關係節では単語数は2つであるが、(7b) の補文では状況補語 *dans cette maison* が動詞に続く。

- (6) a. Tu vas me faire gober que tu n'es même pas sûr du métier que faisait ton grand-père ?
(Benoziglio J.-L., *Cabinet portrait*, 1980: 102)
Lit. Are you going to make me swallow that you're not even sure of the job which was doing your grandfather.
- b. Tu sais que ton grand-père faisait ce métier ?
Lit. Do you know that your grandfather was doing this job?
- (7) a. J'aime bien cette maison, où habitait Satie.
Lit. I really like this house, where lived Satie.
- b. Il m'a dit que Satie habitait dans cette maison.
Lit. He told me that Satie lived in this house'

このように、補文では節内に含まれる要素が、関係節では関係代名詞として節外に置かれるため、その分、関係節内の要素数は少なくなる。特に関係代名詞となるのは、目的語や状況補語などの、動詞句に含まれると倒置を困難にさせる要素である。倒置を妨げる要素が先行詞として外に置かれるため、関係節内は他の従属節よりも倒置しやすい統語構造になっていると考えられる。

以下では、制限的關係節と非制限的關係節の中での倒置について、主語や動詞句の特徴を述べる。

3.3.1.1. 制限的關係節

前節で概観したように、制限的關係節の例のうち倒置は約 4 割であり、他の従属節に比べて倒置の頻度が高いと言える。また、そのうちの **que** 節について、先行詞が定名詞句である場合と、不定名詞句である場合を比べると、前者のほうが倒置の割合が高いことが明らかになった。本節では、制限的關係節を対象として、主語名詞句の担う情報の重要度が高いため倒置が用いられている場合と、動詞句の情報の重要度が低い場合相対的に主語の情報の重要度が高くなっている場合について述べる。

まず、従属節内において主語が不定名詞句である場合、その主語は新情報として談話に導入されることになり、主語名詞句の担う情報の重要度は高くなる。制限的關係節の **que** 節、**ce que** 節、**où** 節の倒置の例で主語が不定名詞句である例を挙げる。

- (8) [...] l'émotion que ressent un lecteur de roman, un auditeur de concert, n'est pas une corde vibrante qui donne la même note [...] ⁵²
(Gracq J., *En lisant, en écrivant* 1980: 167)
Lit. [...] the emotion which feels a reader of novel, a listener of concert, is not a vibrating string that gives the same note [...]
- (9) « Je n'ose imaginer, s'exclame-t-il en péroration, ce que penserait un contemporain de Pénclès, pour qui le mot olympiade signifiait grâce, force, beauté, [...] » (Blondin A., *Ma vie entre les lignes*, 1982: 362-363)
Lit. "I dare not imagine, he exclaims in peroration, what would think a contemporary of Pénclès, for whom the word Olympiad meant grace, strength, beauty, [...]"
- (10) C'est là que le guide et Nour s'installèrent d'abord, pour prier. Ici, en haut de la colline, près du tombeau de l'homme saint, avec la vallée de la Saguiet el Hamra qui étendait à perte de vue son lit desséché, et l'horizon immense où apparaissaient d'autres collines, d'autres rochers contre le ciel bleu, le silence était encore plus poignant. (Le Clézio J.-M.G., *Désert*, 1980: 28)
Lit. This is where the guide and Nour first settled down, to pray. Here, at the top of the hill, near the tomb of the holy man, with the valley of the Saguiet el Hamra which stretched out of sight its dry bed, and the immense horizon where appeared other hills, other rocks against the blue sky, the silence was even more poignant.

⁵² 本章では、倒置を含む従属節に下線、倒置された主語名詞句を斜字にして表す。また引用例は Frantext からの引用であり、文学作品などの著者名、作品名、出版年、ページ番号を記す。出版年は Frantext に登録されている初版の出版年とする。

(8) は que 節内の倒置された主語は *un lecteur de roman, un auditeur de concert* であり、不定名詞句が並列されており、語数が多いのに対して、動詞は *ressent* 一語である。動詞句よりも主語名詞句の方が明らかに情報の重要度が高いため、倒置されていると考えられる。(9) の *ce que* 節中の主語は、不定名詞句 *un contemporain de Pénelès* であり、新しい指示対象として「ペクレと同時代の人」を導入し、さらに名詞句の後に非制限的關係節の *pour qui* 節が続いている。この主語名詞句の担う情報が豊富で、動詞句の情報の重要度よりも高いために倒置されていると言える。(10) では、*où* 節中の不定名詞句 *d'autres collines, d'autres rochers contre le ciel bleu* が主語であり、主語が新しい情報を談話に導入している。この例では動詞に *apparaître* 「現れる」が用いられているが、意味としては出現を表すというより、風景の描写として、「ほかの丘や、青空に際立つ岩山がある広大な水平線」の存在に気付くことを、主体の立場から「現れる」と表現している。この動詞の「現れる」「存在する」という動詞の内容ではなく、「何があるのか」という主語の情報のほうが重要になる文脈である。主語が眼前描写の中で新しい情報であり、主語名詞句の情報の重要度が高いために倒置が用いられている。

制限的關係節内の主語が不定名詞句であるという特徴が、節内の語順に影響を及ぼしているかを検討するため、収集した制限的關係節の倒置の例と正置の例の中で、不定名詞句が主語である例が何割かを調べた。制限的關係節の正置の例のうち、主語が不定名詞句である例は 15%であった。それに対して、制限的關係節の倒置の例のうち、主語が不定名詞句である割合は 21%という結果が得られた。正置の場合よりも、倒置の場合のほうが、主語が不定名詞句の例が多いことが分かる。制限的關係節内の主語が不定名詞句の場合、若干ではあるが倒置しやすくなると考えられる。

主語の情報の重要度が高くなる特徴として、主語名詞句の語数が動詞句の語数よりも多いことがあげられる。主語の語数が多くなる場合として、關係節が主語名詞句にかかっている例がある。(11)~(13) は制限的關係節中の主語名詞句の後にさらに制限的關係節が続いている例である。

- (11) *l'homme en blouse blanche m'envoyait l'excuser d'avance auprès des voisins du dessous pour le bruit qu'allait faire le confetti que, sinistrement, nous nous jeterions à la tête, [...]* (Benoziglio J. L., *Cabinet portrait*, 1980: 193)
Lit. the man in the white coat sent me to apologize in advance to the neighbors of the downstairs for the noise that was going to make the confetti that, sinisterly, we would throw at each other's heads,
- (12) *Mais tout autre chose fut sans doute ce que vit la femme qui s'avança, le visage et la démarche placides, et s'arrêta entre la mise au tombeau et la maternité.*
(Bianciotti H., *Sans la miséricorde du Christ*, 1985: 38-39)
Lit. But something quite different was no doubt what saw the woman who came

forward, placid face and gait, and stopped between the entombment and the motherhood.

- (13) le Reich allemand d'Adolf Hitler, l'Union soviétique de Staline. C'étaient des pays où revivait la conjonction qui avait fait la force des Chinois, des Romains, des Mongols (D'Ormesson J., *La Douane de mer*, 1993: 216)
Lit. the German Reich of Adolf Hitler, the Soviet Union of Stalin. They were countries where revived the conjunction which had made the force of the Chinese, the Romans, the Mongols

(11) は制限的關係節 que 節内の主語 le confetti にさらに que 節が続く。(12) では、ce que 節中の倒置された主語 la femme の後に qui 節が続く。(13) では où 節の中の主語 la conjonction の後に qui 節が続いている。それぞれ単に「紙玉」「女性」「結びつき」という表現よりも、情報量が多くなることで情報の重要度が高くなる。また (11) (12) では動詞句も「作る」「見た」という意味的な重さが軽い動詞であり、動詞句の情報の重要度が低いために倒置されているとも考えられる。(13) の revivait 「よみがえる」は意味的な重みが軽いわけではないが、単純形の動詞 1 語のみであり、動詞の情報の重要度が主語よりも低いと考えられる。正置すると主語と動詞の距離が離れすぎるという統語的な理由もあるが、動詞句よりも主語名詞句の担う情報の重要度が高く、倒置が用いられていると言える。

主語名詞句が列挙である場合も、主語の情報量が多くなり、主語の重要度が高い。(14) の制限的關係節の例は、倒置された主語が列挙になっている。

- (14) La première question que posèrent la mère et le père et la grand-mère et les deux tantes, et, deux ou trois jours plus tard, la totalité de la population de Green River, qui n'était pas très nombreuse et qui, par des canaux mystérieux, avait tout su presque aussitôt, c'était : « Qui est le père ? »
(D'Ormesson J., *La Douane de mer*, 1993: 427-428)
Lit. The first question that asked the mother and the father and the grandmother and the two aunts, and, two or three days later, the whole population of Green River, which was not very numerous and who, by mysterious channels, had known everything almost immediately, it was: "Who is the father?"

この例では、主語が「質問をしたのが誰であるか」という情報を列挙しており、倒置によって重要な情報である主語が節末に置かれている。また、この例の動詞 poser は先行詞の question と縁語関係にあることから、動詞が主語に比べて明らかに情報の重要度が低いため、倒置されていると考えられる。

さらに主語の情報の重要度が高い例として、制限表現が主語に係っている例がある。「～だけ」という制限の意味が主語に係ることで、従属節中の主語が重要な情報

を担うと言える。(15)(16) では *ne...que* ~ 「～しか...ない」という制限表現が主語にかかっている。

(15) *Lalla avance au hasard, au centre du plateau où ne vivent que les scorpions et les scolopendres.* (Le Clézio J.-M.G., *Désert*, 1980:200)

Lit. *Lalla advances at random, in the center of the plateau where live only the scorpions and centipedes.*

(16) *Un parc prenait la place du vieux manoir dont ne subsistaient que quelques ruines.* (Kristeva J., *Les Samouraïs*, 1990: 68)

Lit. *A park took the place of the old manor of which subsisted only a few ruins.*

(15) は、*où* 節内の主語 *les scorpions et les scolopendres* が制限の対象となり、「サソリとムカデしか生きていない」という意味になる。さらに動詞 *vivre* は意味的に軽くなりやすい動詞の一つであり、動詞の「生きている」という情報よりも主語のほうが重要な情報を担うと言える。また、(16) は *dont* 節内に倒置が用いられている例であり、「いくつかの残骸だけが残っていた」という意味であり、限定が主語にかかっている。主語名詞句が制限の対象となることによって、主語の情報の重要度が上がり、倒置が起きていると言える。このように主語に *ne...que* の限定の意味がかかるとき、正置ではなく倒置が選ばれる。これは動詞よりも重要な情報を担う主語名詞句を従属節内の後方に置くためと考えられる。

以上、制限的關係節内の倒置された主語が不定名詞句である例や、關係節を伴う名詞句である例、列挙になっている例、制限表現がかかる例を挙げた。これらの特徴を備える場合、主語の情報の重要度が動詞の重要度よりも高くなりやすいため、倒置が好まれる。ただし、これらの特徴が該当する場合でも、必ずしも倒置が用いられるわけではなく、正置となっている例がある。(17) は制限的關係節内の主語が不定名詞句であり、(18) も主語が不定名詞句、かつ列挙となっているが、両例とも正置となっている。主語は倒置を好む特徴を持っているものの、状況補語 *sur les hommes* や、間接目的語があることで、倒置が妨げられ、正置が用いられていると考えられる。

(17) [...] *il ne faut surtout pas conclure : « Les réponses qu'une conscience scrupuleuse donnerait à ces huit questions l'inclineraient-elles à la miséricorde qui est l'autre nom de la justice ? Eh bien ! oui, je le crois. »*

(Blondin A., *Ma vie entre les lignes*, 1982: 64-65)

Lit. [...] above all, we must not conclude: "Would the answers that a scrupulous conscience would give to these eight questions incline it to mercy, which is the other name of justice? Well ! yes, I believe so."

(18) *Quant à moi, je découvrais à quinze ans le pouvoir qu'un frais minois, un brin de caractère et un discours direct avaient sur les hommes...*

(Grece M., *De la nuit du serail*, 1982: 173-174)

Lit. As for me, I discovered at fifteen the power that a fresh face, a bit of character and a direct speech had on men...

動詞が状況補語や間接目的語を伴うことによって、動詞句の情報量が増え、動詞句の担う情報の重要度が高いため、正置が用いられていると考えられる。

ここまで、主に主語の情報の重要度が高いことが倒置の要因となっている例を挙げたが、動詞の情報の重要度が低く、相対的に主語の重要度が高くなっている例もある。動詞の重要度が低い倒置の例について検討する。

まず、意味内容が希薄な動詞や、倒置が好まれやすい動詞が用いられている例を挙げる。動詞 *être*, *aller*, *venir*, *avoir*, *faire* は意味内容が希薄であり、*apparaître*, *dire*, *parler*, *donner* も Wall (1980) で意味的に軽くなりやすく、倒置が起こりやすいと指摘されていた動詞である。

(19) Tu vas me faire gober que tu n'es même pas sûr du métier que faisait ton grand-père ? (Benoziglio J.-L., *Cabinet portrait* 1980: 102)

Lit. Are you going to make me swallow that you're not even sure of the job which was doing your grandfather.

(20) Je me sentais vieux tout à coup, et très au-delà déjà de ce milieu du chemin de la vie dont parle Dante. (Tournier M., *Le Médianoche amoureux*, 1989: 56-57)

Lit. I felt old suddenly, and already far beyond that midpoint of journey of the life which speaks Dante.

(21) Je vois qu'il fait un effort et puis il le dit, il dit qu'il comprend ce que veut dire ma mère, il dit : ce déshonneur. (Duras.M., *L'Amant*, 1984: 56-57)

Lit. I see that he is making an effort and then he says it, he says that he understands what wants to say my mother, he says: this dishonor.

(19) の倒置された主語 *ton grand-père* は語数が少ない既知情報であるが、動詞が *faire* 「する」という意味内容が希薄な動詞であることが倒置の起因となっている。動詞の「していた」という動詞の情報よりも、「誰がしていたのか」という主語の担う情報のほうが重要度が高くなり、倒置が用いられていると考えられる。(20) では、*dont* 節内で、動詞 *parler* 「話す」が用いられている例である。関係代名詞 *dont* と *parler* は共起しやすい組み合わせであり、意味的に軽い動詞である⁵³。主語 *Dante* も一語であり語数としては多くないが、動詞の情報よりも「誰の言ったことであるのか」という主語が表す内容の重要度のほうが高いため、倒置が用いられている。(21) も発言動

⁵³収集した制限的関係節の *dont* 節内が倒置となっている例のうち、動詞が *parler* である例が 1 割を占めている。

詞 *dire* であり、主節の挿入節でも倒置が習慣化している動詞であり、情報の重要度が低い。相対的に主語の情報の重要度が高くなり、倒置となっている。

また、制限的關係節の先行詞と縁語関係にある動詞も、情報の重要度は低いと言える。ある名詞句と動詞が共起しやすい組み合わせで、意味的に推測されやすい場合、動詞は聞き手にとって前提の情報として理解されやすく、情報重要度は低くなる。(22)~(24)は、それぞれ先行詞と動詞が共起しやすい組み合わせである例である⁵⁴。

(22) Enfin, il fut naturel et put parler de ce qu'il appréciait, en ajoutant les titres à la mode, les romans que lisait sa tante, Margaret Kennedy ou Rosamond Lehmann.
(Sabatier R., *Les Fillettes chantantes* 1980: 203)

Lit. Finally, he was natural and could talk about what he liked, adding the titles un vogue the novels which read his aunt, Margaret Kennedy or Rosamond Lehmann.

(23) Nil faillit répondre que l'école religieuse où étudiait sa jeune amante n'était pas mixte, mais il se tut, car ce détail était de peu d'importance : sur le fond, le banquier avait raison. (Matzneff G., *Ivre du vin perdu*, 1981: 123)

Lit. Nil almost replied that the religious school where was studying his young lover was not mixed, but he was silent, because this detail was of little importance: basically, the banker was right.

(24) [...], par le ronronnement des fours où cuisent les pierres.

(Le Clézio J.-M.G., *Désert*, 1980: 165)

Lit. [...], by the purring of the ovens where bake the stones.

(22) の先行詞 *romans* 「小説」と動詞 *lire* 「読む」は共起頻度が高く、動詞の情報の重要度は低い。主語 *sa tante* の情報量は多いとは言えないが、動詞の情報の重要度が低いため、倒置が起きていると言える。(23) も先行詞 *école* 「学校」と *étudier* 「勉強する」は縁語関係にあり、既に「学校」という表現がある中で「勉強する」という動詞の情報の重要度は低い。(24) も主語は *les pierres* 「石」という定名詞句かつ語数が少ないため、情報の重要度は高くない。一方で動詞 *cuire* 「焼く」は先行詞 *fours* 「炉」と共起しやすい単語であり、この文脈における情報の重要度は低い。いずれの例も、動詞の情報の重要度が低いことで、相対的に情報の重要度が高くなった主語名詞句を節末に置くために倒置が用いられていると考えられる。また、先行詞と共起しやすい動詞は、*l'école religieuse de sa jeune amante* というように動詞を省略して前置詞句に置き換えが可能ながある。この点からも分かるように、先行詞と共起しやすい動詞である場合、その動詞の持つ情報の重要度は低いと言え、制限的關係節内で

⁵⁴ 共起頻度は Sketch engine の Word sketch の共起頻度高位語のリストを判断基準とした。

も情報の重要度に沿った語順となっていると考えられる。先行詞から想起しやすい動詞が用いられていた倒置の例の割合は、制限的關係節の *que* 節では約 3 割を占めており、先行詞と動詞句の縁語関係は重要な倒置の起因と言える。

本節では制限的關係節中の倒置の例について、動詞句の情報の重要度が低いことによって、主語の情報の重要度が相対的に高くなる例について検討した。このように倒置の例には主語の情報の重要度が積極的に高い場合と、動詞の情報の重要度が低い場合があり、動詞よりも主語の情報の重要度が高いという特徴が該当する場合に倒置が用いられていると考えられる。

3.3.1.2. 非制限的關係節

本節では、非制限的關係節中の倒置の例について検討する。先にも述べたが、制限的關係節は先行詞を同定するために必要な情報を前提として表すのに対して、非制限的關係節は先行詞に関する情報を補足的に表すと言われている (古川 1983, 河野 2012)。このことから、非制限的關係節は断定を表す従属節とされている (Lahousse 2011)。断定を表す従属節中の倒置には制約があるため倒置の頻度が低いと言われていたが (Lahousse 2011)、補文や副詞節と比較すると倒置の頻度は高い。

断定を表す従属節である非制限的關係節でも、主語の情報の重要度が動詞の情報の重要度よりも高い時に倒置が用いられていることを示す。まず、(25)(26) では倒置された主語が不定名詞句であり、談話に新しい指示対象を導入している。主語名詞句が重要な情報であるため、倒置されていると考えられる。

(25) Et c'est à ce moment, quand on eut passé le pont, qu'il y eut un autre petit tumulte, que soulevait une femme irritée qu'on venait de refuser parce qu'elle n'avait pas cette chaîne, et que son nom ne figurait point sur les listes.

(Cluny C. M., *Un jeune homme de Venise*, 1983: 58-59)

Lit. And it is at this time, when we had crossed the bridge, that there was another little uproar, which raised an angry woman that we came to refuse because she did not have that channel, and that her name did not appear at all on the lists.

(26) la chambre au carreau rouge, au loquet de fer, la table couverte d'un tapis de serge, le pot d'aspidistras, l'armoire ventrue et close, d'où sortait une faible odeur d'iris.

(Gracq J., *La presqu'île*, 1970: 75-76)

Lit. Room with red tile, the latch of iron, the table covered with a carpet of serge, the pot of aspidistras, the bulging and closed cabinet, from which came a faint odor of iris.

(25) の倒置された主語には、さらに関係節が続いており、主語名詞句の情報の重要

度が明らかに高い例である。また、倒置された動詞 *soulever* 「引き起こす」は先行詞 *un autre petit tumulte* 「小さな喧噪」と意味的なつながりがあり、先行詞から想起しやすい動詞であるため、この動詞の情報の重要度は比較的低いと言える。(26) では主語が *une faible odeur d'iris* という不定名詞句で、動詞 *sortir* は意味的に軽く倒置が起りやすい動詞であるため、主語の情報の重要度のほうが高い。また動詞 *sortir* と前置詞 *de* の結びつきが強く、関係代名詞 *d'où* と動詞の距離を近く保つことも倒置の要因となっている。

主語が不定名詞句である倒置の例を挙げたが、(27)~(29)のように主語が定名詞句や固有名詞であっても動詞の情報の重要度が低いために倒置されている例もある。

(27) *Les premières gouttes sont imperceptibles. On regarde là-haut, on doute qu'on ait reçu quoi que ce soit de ce ciel gris perle, lumineux, où jouent à distance les miroitements de l'Océan.* (Rouaud J., *Les champs d'honneur*, 1990: 18-19)

Lit. The first drops are imperceptible. We look up there, we doubt that we have received anything of this pearl-gray sky, luminous, where play remotely the shimmers of the Ocean.

(28) ... le jardin donne des quartiers sans vie et sans joie, agrémentés d'un cimetière, et que traverse la silencieuse et morne rue d'Allonville.

(Gracq J., *La Forme d'une ville*, 1985: 37)

Lit. ... the garden face districts without life and without joy, embellished with a cemetery, and which cross the silent and gloomy street of Allonville.

(29) En cherchant un pyjama pour remplacer le costume de bonne coupe, mais usé et fripé, que portait Fitzgerald, Pandora ouvrit un tiroir : une douzaine de bouteilles de gin y étaient rangées avec soin.

(D'Ormesson J., *Tous les hommes sont fous*, 1986: 262)

Looking for pajamas to replace the well-cut but worn and wrinkled suit which was wearing Fitzgerald, Pandora opened a drawer: a dozen bottles of gin were neatly stored there.

(27) の動詞は *jouer* 「(光が) 揺らめいている」であり、かつ *à distance* という状況補語を伴うため、情報の重要度が低くはないが、先行文脈の *ce ciel* 「空」と主語 *les miroitements de l'Océan* 「海のきらめき」が対比の関係にあることで、主語の情報の重要度が高く、倒置されている。(28) では、動詞 *traverser* 「通る」が先行詞 *des quartiers* 「地区」と共起しやすい関係にあり、動詞の情報の重要度が低い例である。さらに、主語は定名詞句であるが語数が多く情報量が多いため、主語の情報の重要度が高いと言える。(29) では、主語は固有名詞 *Fitzgerald* だけであり、情報の重要度が積極的に高いとは言えないが、動詞 *porter* が先行詞 *le costume* と縁語関係にあり、動詞の情報の重要度が低くなり、相対的に主語の情報の重要度が高くなっているため、

倒置されている。ただし、(29) のように動詞の情報の重要度が低いという要因だけで倒置される場合はあるものの、非制限的關係節の中では少数であった。動詞の情報の重要度が低いだけでなく、主語の情報の重要度が高いという要因が働いている例が多数であった。動詞句の情報の重要度が低いという要因よりも、主語名詞句の語数が多いという要因の方が、倒置を起こしやすいと考えられる。そしてその傾向は、制限的關係節よりも非制限的關係節において強く表れている。下の例でも、動詞が1語であるのに対して、主語が前置詞句を伴う定名詞句であるため、動詞よりも主語の担う情報のほうが重要度が高いと考えられる。

- (30) Les barrières imposées par la pudeur traditionnelle, que renforçait la méfiance envers l'étranger, s'effondraient sous les baguettes magiques, en bambous ou plastique, que ses doigts maniaient lourdement, mais qui portaient cependant à la bouche des plaisirs enfin permis. (Kristeva J., *Les Samourais*, 1990: 214)
Lit. The barriers imposed by traditional modesty, which reinforced the distrust of strangers, crumbled under the magic wands, made of bamboo or plastic, which his fingers handled heavily, but which nevertheless brought to the mouth pleasures finally permitted.

動詞句が一語であるのに対して、主語は前置詞句 *envers l'étranger* を伴う名詞句であり、主語の情報の量が多く、主語の情報の重要度が高いと言える。非制限的關係節でも制限的關係節と同様に、動詞句よりも主語の情報の重要度が高い場合に倒置されているものの、非制限的關係節中の倒置は、主語の語数が多いという特徴や、主語が不定名詞句であるという特徴を備えている傾向がある。非制限的關係節の場合は、主語の情報の重要度が高いという積極的な要因があるほうが倒置されやすいと考えられる。

3.3.2. 補文と間接疑問の中の倒置

本節では、補文節と間接疑問節における倒置を扱う。補文節を扱うにあたり、補文節内で直説法が用いられている場合と、接続法が用いられている場合を分け、法の違いが倒置に影響するののかという点も踏まえて検討していく。

3.3.2.1 動詞に直説法を用いる補文

本節では、補文節内で直説法が使われているときの倒置を扱う。補文節の倒置は少なく、しかも第2章で述べたように、接続法は倒置を容易にする要因として働くが直説法はそうではない(2.4.2.5 節参照)。そのため直説法を用いる補文は正置が好ま

れる環境ではあるが、限定的ではあるものの実際に倒置の例が観察された。収集した直説法を用いる補文でも、主語名詞句の重要度が倒置の要因になっていると考えられる。

- (31) Et je vis qu'errait sur le quai une sorte de petite fille en blue-jeans, chantonnante, qui jetait son ombre à elle sur le ciment en deux ou trois lignes courbes, aiguës, agitées comme des oiseaux, qui me parurent des phrases, riches peut-être de sens.

(Bonnetfoy Y., *Rue traversière et autres récits en rêve*, 1987: 12-13)

Lit. And I saw that was wandering on the platform a kind of little girl in blue jeans, singing, who was casting her own shadow on the cement in two or three curved lines, sharp, agitated like birds, which seemed to me like sentences, perhaps rich in meaning.

(31) では、主語が「青いジーンズをはいた少女」という新しい登場人物を導入しており、後続の制限的關係節も主語の「少女」に関する言及である。動詞句も状況補語 *sur le quai* 「ホームの上で」を含み、情報の重要度は低くはないが、主語が不定名詞句であり、かつ単語数が多いため、主語の情報の重要度が高くなり、倒置されていると言える。

(32) の例は主語が *des choses* 「物事」という本来情報量が低い名詞句であるが、動詞が *se préparaient* という直説法半過去形であり、未完了を表す活用である。未完了を表す動詞は、完了を表す動詞よりも倒置されやすいため、倒置が可能となっていると考えられる。

- (32) Je commençais à repérer les coteries, les alliances ; à renifler l'odeur de quelques cadavres dans les placards ; à connaître l'existence de quelques entités secrètes, le groupe interarmées antiterroriste ou la cellule sur le sentiment national, pour ne donner que deux exemples. Je sentais bien que se préparaient des choses.

(Orsenna E., *Grand amour*, 1993: 189-190)

Lit. I began to spot the coteries, the alliances; to sniff the smell of a few corpses in the cupboards; to know of the existence of a few secret entities, the joint anti-terrorist group or the cell on national sentiment, to give only two examples. I felt that were brewing things.

また、(33) の例では主語は語数が少ない定名詞句 *le front* であるが、動詞が *se trouver* という存在を表す表現であり、動詞の情報の重要度が低いことで、相対的に主語の情報の重要度が高くなり倒置が用いられていると言える。

- (33) ([...] ils n'en avaient pas eu l'occasion, pris ou plutôt raflés par des hommes

vêtus de vert, casqués, hilares et gueulards, à la descente d'un train de permissionnaires ou encore paisiblement endormis dans leurs casernes ou dans leurs dépôts à trente ou quarante kilomètres en arrière de l'endroit où ceux qui les commandaient se figuraient que se trouvait le front)

(Simon C., *L'Acacia*, 1989: 371-372)

Lit. ([...] they hadn't had the chance, taken or rather rounded up by men dressed in green, helmeted, laughing and shouting, when they got off a leave train or still peacefully asleep in their barracks or in their depots at thirty or forty kilometers behind the place where those which command them thought that was found the front)

以上、直説法を用いる補文節中の倒置の例を挙げた。ただし直説法の補文で、主語の情報の重要度が高いと言える場合でも、(34)(35)のように正置が用いられる例がある。

(34) À dix heures, j'apprends que tout un petit peuple de commerçants, de boutiquiers, d'artisans s'est rallié aux Yamaks et leur emboîte le pas.

(De Grece M., *La nuit du serail*, 1982: 408)

Lit. At ten o'clock, I learn that a whole small population of merchants, shopkeepers, artisans has rallied to the Yamaks and is following in their footsteps.

(35) S'ils savaient qu'une aussi belle femme que Vivy l'avait embrassé !

(Sabatier R., *Les fillettes chantantes*, 1980: 239)

Lit. If they only knew that a woman as beautiful as Vivy had kissed him!

(34)(35)の主語は不定名詞句であり、語数も多く、重要度の高い情報である。しかし(34)では動詞句が並列されており、さらに状況補語や直接目的語が続いているため、主語よりも動詞句の情報の重要度が高くなり、正置が用いられている。(35)では動詞の語数も短く、倒置が用いられても不思議ではないが、代名詞の形ではあるものの直接目的語が含まれていることや、動詞が複合時制であることによって動詞の情報の重要度が上がり、正置が選択されている。ただし補文の正置の例のうち、(35)のように文末が動詞で終わる例は少なく、(34)のように目的語や状況補語が後続している例が多く観察された。このことから、直接目的語などの補語が動詞句に含まれる場合は正置が、補語がなく主語の情報の重要度が高い場合に倒置が用いられると言える。

3.3.2.2. 動詞に接続法を用いる補文

本節では、補文節中の動詞が接続法となる倒置の例を扱う。接続法を用いる補文

においても、直説法を用いる補文と同様に、主語名詞句のほうが動詞句よりも情報の重要度が高いために倒置されていることを示す。

- (36) *Tel morceau de bois qui servira encore pour une rame à haricots, telle barre d'acier, telle poutrelle et tel piquet, tout ce qui a rendu son comptant de services mais qu'on ne jette pas parce qu'on a l'amitié reconnaissante et qu'on aime que s'imbriquent les objets comme les passés vivants.*

(Bienne G., *Le silence de la ferme*, 1986: 65)

Lit. Such a piece of wood that will still be used for a bean oar, such a steel bar, such a joist and such a stake, everything that has rendered its share of service but that one does not throw away because one has a grateful friendship and that we like that fit together the objects like living pasts.

(36) では、動詞が単純形の代名動詞 *s'imbriquent* のみであるのに対して、主語名詞句が前置詞句を伴う定名詞句であり、主語の情報の重要度が高いために倒置が用いられていると考えられる。

(37) は動詞句が状況補語を伴っており、倒置が敬遠されそうな特徴を備えているものの、主語が前置詞句を伴う不定名詞句であり、情報の重要度が高いために倒置されている。

- (37) *Rien serrer avec force, tant de force que les larmes pourraient jaillir et abreuver les boutons de fleurs blanches ? [...] Il voudrait que jaillissent de ses yeux des larmes au parfum d'iris sauvage.*

(Bienne G., *Les jouets de la nuit*, 1990: 86)

Lit. Squeeze anything with force, so much force that the tears could gush out and water the buds of white flowers? [...] He would like that spring from his eyes tears of the scent of wild iris.

(37) は先行文脈に「涙」の言及があり、その涙と主語「アイリスの香りの涙」の対比が含意されていると考えられる。また動詞 *jaillir* は出現を表す動詞であることから、この例も他の例と同様に、動詞句に比べて主語の情報の重要度が高いために、倒置が容認されていると言える。

(38) は主語が *ce qui* 節であり、主語の情報量が多く、情報の重要度が高いと考えられる例である。

- (38) *L'eau dégouttait de la rame de bois noir. Elle refusait que lui échappe ce qui ne lui appartenait pas, ce qu'elle n'avait pas su retenir.*

(Cluny C.M., *Un jeune homme Venise*, 1983: 143-144)

Lit. The water was dripping from the black wooden oar. She denied that escapes her what didn't belong to her, what she hadn't been able to retain.

主語として二つの *ce qui* 節と *ce que* 節が並列されており、語数が多く情報量も多い。それに対して、動詞句に含まれるのは、間接目的代名詞 *lui* と動詞 *échappe* 「離れてゆく」という二語のみである。ただし *lui* は主節の主語の「彼女」と同じ指示対象を指すため、既出の情報であり情報の重要度は低いため、主語の情報の重要度のほうが高いと言える。

このように、接続法を用いる補文は非断定的な従属節であるため、情報構造はないという見方もあるが、倒置の分析から、より重要な情報である主語名詞句を、情報の重要度が相対的に低い動詞よりも後方に置くという構造は存在すると考えられる。

以上では、動詞句よりも主語の情報の重要度が高いために倒置が起きている例を挙げたが、(39)(40) のようにこの条件に当てはまっているが正置が用いられている例もある。

- (39) Il faut que l'âme du mort qui l'a mordu, et qui ne trouve aucune issue, de l'urètre ni de la gorge bloquée par la luette, ni de l'anus trop étroit, ni de la plaie trop fangeuse, ni de l'auriculaire mielleux, puisse rendre son souffle, passez-moi la lancette que de son aine par le sang cette âme sournoise expire.

(Guibert H., *Voyage avec deux enfants*, 1982: 53)

Lit. It is necessary that the soul of the dead who bit him, and who finds no way out, from the urethra nor from the throat blocked by the uvula, nor from the too narrow anus, nor from the too muddy wound, nor from the honeyed little finger, may it breathe, pass me the lancet that from its groin through the blood this sly soul expires.

- (40) Lescrabes ne faisait jamais le premier pas. Il attendait qu'un regard, un sourire ou le silence espacé qui s'installe dans une conversation entre un homme et une femme là où les phrases n'ont pas besoin de silence, indique un accord ou, même, une invite.

(Labro P., *Des bateaux dans la nuit*, 1982: 22)

Lit. Lescrabes never took the first step. He expected that a look, a smile or the spaced silence that settles in a conversation between a man and a woman where the sentences do not need silence, indicates an agreement or, even, an invitation.

(39) も (40) も主語にかかる修飾部が長く、情報量が多いのに対して、動詞句は短いという倒置が好まれる環境ではあるが、正置となっている例である。主語の情報の重要度が高いという点では倒置が自然と考えられるが、動詞句に直接目的語があることによって倒置が妨げられていると言える。倒置を妨げる直接目的語の存在は、主語の情報の重要度という倒置を自然にする要因よりも、語順の選択に強く働くと考えられ

る。

3.3.2.3. 間接疑問

間接疑問節内の動詞は直説法を用いるが、その節の内容の真偽について断定を表すわけではないため、間接疑問は非断定の従属節である。間接疑問の *où* 節では約 6 割、*comment* 節と *combien* 節では 3 割弱に倒置が用いられており、倒置が頻繁に用いられていると言える。

間接疑問では節内の何らかの要素が疑問詞となり、節頭に移動することによって、動詞句の情報量が少なくなり、倒置されやすくなると考えられる。(41a) の補文では状況補語 *à Paris* が節末にあるのに対して、(41b) の間接疑問では *où* が節頭に来る。(42a) の補文では副詞が節末にあるが、(42b) の間接疑問で接続詞 *comment* が節頭に置かれる。

- (41) a. Je sais que Marie habite à Paris.
Lit. I know that Marie lives in Paris.
b. Je sais où habite Marie.
Lit. I know where lives Marie,
- (42) a. Je sais que sa mère va bien.
Lit. I know that his mother is fine.
b. Je me demande comment va sa mère.
Lit. I wonder how is his mother.

このように間接疑問では補文の場合よりも、状況補語や属詞などの動詞句の後に置かれる要素が少なくなる。したがって動詞句の情報の重要度が低くなりやすく、倒置の頻度が高くなりやすいと考えられる。

また、特に間接疑問の *où* 節では、(43)(44) のように *être* や存在を表す動詞が用いられる例が多くみられた。

- (43) Très intrigué et sérieux tout à coup, il me demanda où était cet ami.
(Tournier M., *Le Médianoche amoureux*, 1989: 143)
Lit. Very intrigued and serious suddenly, he asked me where was this friend.
- (44) Je répons : « Si tu veux. » Il demande comment est ce Rouquin, alors je lui montre la photo quand il était enfant, en short blanc et sandalettes rouges.
(Belloc D., *Néons*, 1987: 84-85)
Lit. I answer: "If you want." He asks how is this Ginger, so I show him the photo when he was a child, in white shorts and red sandals.

(43)(44) では être という重要度が低い動詞が用いられている上に、補語部分が疑問の対象となっているため、倒置が義務的となる。

その他の倒置の例でも、関係節や補文と同様に、動詞の意味内容が希薄である例や主語の情報の重要度が高い例が多い。

(45) Nous travaillons le bois, me dit l'un d'eux, et nous voudrions savoir comment se fait un livre. (Tournier M., *Le Méridien amoureux*, 1989: 182-184)

Lit. We work with wood, one of them told me, and we would like to know how is made a book.

(46) Elle savait où habitait l'enfant, à quelle école il allait.

(Romilly J., *Les œufs de pâques*, 1993: 162-163)

Lit. She knew where lived the child, what school he went to.

(47) Tu l'auras résolu, David, je sais où se cache Timothée Bataille.

(Hermaty-Vieille C., *L'Épiphanie des dieux*, 1983: 184-185)

Lit. You will have solved it, David, I know where is hiding Timothée Bataille.

(48) Ils demandent à Naman l'argent qu'on peut gagner, le travail, combien coûtent les habits, la nourriture, combien coûte une auto, s'il y a beaucoup de cinémas.

(Le Clézio J.-M.G., *Désert*, 1980: 102-103)

Lit. They ask Naman the money which you can earn, the job, how much cost the clothes, the food, how much costs a car, if there are many cinemas.

(45)(46)(47) はそれぞれ動詞が se faire 「作られる」、habiter 「住む」、se cacher 「隠れる」という、意味内容が希薄な動詞や、場所が問題となる接続詞 où から連想しやすい動詞であり、いずれもこの間接疑問の中で担う情報の重要度は低いと言える。主語名詞句の情報量は少ないが、動詞句に比べて相対的に重要な情報となり、倒置が用いられていると考えられる。また、(48) のように combien は coûter 「(費用が) かかる」という動詞と共起しやすく、動詞の情報の重要度が低いため、定名詞句や短い主語であっても倒置されやすい。この疑問詞と動詞の組み合わせの場合、直接疑問でも « combien coûtent les habits ? » あるいは « Les habits coûtent combien ? » の語順とするのが自然である。直接疑問の語順が、間接疑問においても影響を及ぼすと考えられる。

このように間接疑問においては特に動詞句の意味内容が希薄であったり、疑問詞と共起しやすい動詞である場合が多く観察された。ただし間接疑問でも、主語の情報の重要度が高く、倒置されている例がある。(49) は主語が制限的關係節の qui 節が後続している例であり、(50) は主語の語数が多い例である。

(49) Il aurait fallu savoir comment était habillée la cliente qui provoquait la jalousie

de Lili Liebermann dans la boutique de son père, [...].

(D'Ormesson J., *Le vent du soir*, 1985: 101-102)

Lit. You should have known how was dressed the customer who caused the jealousy of Lili Liebermann in the shop of her father, [...].

- (50) - Pas le moment de flancher, mon petit père : tu sais à combien se monte le premier tirage du Seigneur des monnaies ?

(Pennac D., *La petite marchande de prose*, 1989: 150-151)

Lit. - No time to flinch, my little father: do you know to how much amounts the first draw of the Lord of the currencies?

間接疑問においても、動詞句より主語名詞句の情報の重要度のほうが高いため、倒置が用いられる場合があると言える。

一方、(51)のように主語の情報量が多く、倒置しやすい条件が該当していても正置が用いられている例がある。

- (51) *Leurs faces sont devenues plus lunaires et l'agitation qui s'empare d'eux traduit le désir violent de voir où et comment l'homme qui a tant pesé sur leur vie quotidienne va disparaître.* (Labro P., *Des bateaux dans la nuit*, 1982: 108)

Lit. Their faces have become more lunar and the agitation that seizes them translates the violent desire to see where and how the man who weighed so much on their daily life will disappear.

間接疑問においても、主語の情報の重要度が動詞の情報の重要度よりも高いと言う要因によって、必ず倒置が起きるという条件なのではなく、倒置されやすいという傾向であると言える。

3.3.3. 副詞節

本節では、副詞節における倒置においても関係節や補文と同様の主語や動詞句の特徴が観察されるのか検討する。副詞節として、時間節、比較節、目的節、*sans que* 節、理由節を扱う。譲歩節については、収集例の中に見られなかったため、除外する。

3.3.3.1. 時間を表す副詞節

本節では時間を表す副詞節中の倒置を扱う。時間節として、*quand* 'when', *lorsque* 'when', *alors que* 'while', *dès que* 'as soon as', *pendant que* 'while', *avant que* 'before',

tandis que ‘while’を分析対象としたところ、各接続詞の例のうち倒置の例は平均して約 5%、avant que 節のみ 11%であり、関係節や間接疑問より倒置の頻度が低い（表 2）。

quand 節は、Lahousse (2011) では非断定の従属節として扱われていたが、主節に後続する位置では断定を表す場合がある。下の例では、主節部分が状況を設定する役割を果たし、quand 節がその状況で生じた出来事を表す。

(52) Le chevalier se détourna et il quittait la chambre quand déboula du couloir, sans aucun bruit, dans sa voiture à pédales, un petit garçon roux avec deux épis comme des cornes au sommet du crâne. (Orsenna E., *Grand amour*, 1993: 30)

Lit. The knight turned away and he was leaving the room when tumbled out of the corridor, without a sound, in his pedal car, a little red-haired boy with two spikes like horns on the top of his head.

(53) J'étais là à décrocher quand s'est produit chez lui un mystérieux dé clic.

(Degaudenzi J-L., *Zone*, 1987: 105)

Lit. I was there picking up when happened in him a mysterious click.

(52)(53) はそれぞれ、「彼が部屋を出ようとしたとき、少年が飛び出した」、「私が受話器を取ろうとしていた時、不思議なシャッター音が鳴った」という意味になり、quand 節部分が断定となっている。そして quand 節中の主語が不定名詞句であり、新しい情報を導入する役割を果たしているため、主語の情報の重要度が高い。また、いずれも状況補語 du couloir、chez lui を伴うが、動詞自体は出現や発生を表す表現であり、意味的に情報の重要度が低くなりやすい動詞である。主語名詞句のほうが、動詞句よりも情報の重要度が高いため、倒置が容認されていると言える。

時間節においても、(54) のように主語の情報の重要度は高くないが、動詞が主語と共起しやすい動詞であり、動詞の情報の重要度が低いため倒置されている例がある。

(54) On entendait les cloches de l'église au loin, mais lui le dimanche il était déjà au champ quand sonnaient les matines. (Boudard A., *Mourir d'enfance*, 1995: 29)

Lit. We heard the bells of church in the distance, but on Sundays he was already in the field when rang the matins.

次に、前提を表す時間節として、主節の前に置かれた quand 節の倒置の例を挙げる。主節の前の quand 節の倒置でも、動詞句よりも主語名詞句の情報の重要度が高いという特徴がある。

(55) Et quand vient l'heure d'enterrer l'un d'eux, nous éprouvons tous la même souffrance. (Lanzmann J., *La Horde d'or*, 1994: 213)

Lit. And when comes the time to bury one of them, we all experience the same pain.

- (56) Olivier savait qu'il baiserait la main de la tante Victoria et que les ouvriers s'en amuseraient. Quand arriva la tante, cela se fit tout naturellement.

(Sabatier R., *Les Fillettes chantantes* 1980: 91)

Lit. Olivier knew that he would kiss the hand of Aunt Victoria and that the workers would have fun. When arrived the aunt, it happened quite naturally.

(55) では主語名詞句に前置詞句が後続していて情報量が多い。動詞 *vient* は物体の移動を表すのではなく、「その時間になる」という時間の到来を表している。(56) でも動詞 *arriva* は、「到着した」という到達の意味よりも、主語 *la tante* の出現を表しており、動詞の情報よりも、登場人物として重要な主語 *la tante* のほうが重要な情報とみなされ、倒置されていると考えられる。

quand 節以外の時間を表す従属節においても、主節内の従属節の位置に関わらず、動詞句よりも主語名詞句の方が重要な情報である場合に倒置が用いられている。下の例は *lorsque* 節中の倒置の例である。

- (57) Après les applaudissements et quelques cris « Duce ! Duce ! » lorsque apparurent sur l'écran, en lettres énormes, les trois impératifs de la propagande mussolinienne : Credere, Obbedire, Combattere, tout le monde se leva dans une grande rumeur d'élégance, de robes de soie froissées et d'exaltation virile.

(D'Ormesson J., *Tous les hommes sont fous*, 1986: 281)

Lit. After the applause and some cries of "Duke! Duke!" when appeared on the screen, in huge letters, the three imperatives of the Mussolini propaganda: Credere, Obbedire, Combattere, everyone rose in a great roar of elegance, of robes of crumpled silk and of virile exaltation.

- (58) Les derniers oiseaux se sont tus depuis longtemps lorsque retentit dans les bois le hululement d'une chouette. (Simon C., *Les Géorgiques*, 1981: 38)

Lit. The last birds have been silent for a long time when resounded in the woods the hoot of an owl.

- (59) Lorsque vint le petit matin, elle mit le feu à l'étaupe et libéra les hirondelles une à une. (Lanzmann J., *La Horde d'or*, 1994: 265)

Lit. When came the dawn, she set fire to the tow and freed the swallows one by one.

(57) では、主語名詞句の語数が多いのに加え、コロン以降がその主語名詞句の情報の補足になっているため、主語の情報の重要度が高いのに対し、動詞は *apparurent* 「現れた」という出現を表す動詞 1 語のみで情報の重要度が低い。(58) は動詞

retentit 「鳴り響いた」の後に状況補語 *dans les bois* が続くが、主語名詞句 *le hulument d'une chouette* 「フクロウの鳴き声」と、主節の「鳥が鳴くのをやめた」の対比となっている。(59)では「朝がきた」という時間を表す表現であるが、この場合、移動の意味ではなく、その時間が「朝か、昼か、夜か」という何時であるのが問題となるため、主語のほう情報が情報の重要度が高いと言える。

pendant que 節や *tandis que* 節、*dès que* 節においても、同様に考えられる。

- (60) *Pendant que défilait par les rues les chars de verdure d'une fête folklorique*, je regardais d'une terrasse d'estaminet la haute et sombre masse de schiste de son abbaye surplomber la kermesse de toutes ses fenêtres sourcilleuses, menaçante et de dur orgueil comme une manse du *Grand Forestier*.

(Gracq. J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 78)

Lit. While paraded through the streets the green floats of a folk festival, I watched from a tavern terrace the high and dark mass of schist of its abbey overhanging the fair from all its stern windows, threatening and with hard pride like a manse of the *Grand Forestier*.

- (61) Mosquées, palais, caravansérails s'éroulaient *pendant que s'allumaient partout des incendies*. (De Grece. M., *La nuit du serail*, 1982: 317)

Lit. Mosques, palaces, caravanserais were collapsing while were kindled everywhere fires.

- (62) Olivier, en compagnie de Victor et de Marceau, se rendit à un bal de village. *Tandis que s'exprimait par la danse la joie campagnarde*, il regarda les visages éblouis par une valse lente, les sourires, l'application et la gravité des pas, [...].

(Sabatier R., *Les fillettes chantantes*, 1980: 271-272)

Lit. Olivier, accompanied by Victor and Marceau, went to a village ball. While was expressed through dance the country joy, he watched the faces dazzled by a slow waltz, the smiles, the application and gravity of the steps, [...]

- (63) Elle ferma les yeux, les vagues faisaient osciller son corps *tandis que montait en elle, irrépressible, violente, la houle qui allait la submerger*.

(Hermaty-Vieille C., *L'Épiphanie des dieux*, 1983: 158)

Lit. She closed her eyes, the waves made her body sway while was rising inside her, irrepressible, violent, the swell that was going to submerge her.

- (64) *Dès que passait dans la ville le seul cirque qui trouvait grâce à ses yeux*, Arthur me mobilisait. (Olivier É., *L'Orphelin de mer*, 1982: 79)

Lit. As soon as passed through the city the only circus that found favor in his eyes, Arthur mobilized me.

- (65) Pour lui, le diable rôdait chaque été au bord du lac *dès que résonnaient les premières notes du festival de Montreux...*

(Embareck M., *Sur la ligne blanche*, 1984: 59)

Lit. For him, the devil prowled every summer by the lake as soon as sounded the first notes of the festival of Montreux...

(60) の pendant que 節では、動詞句が状況補語を伴っているものの、主語のほうが語数が多く、情報量が多い要素であるため、倒置が用いられている。(61) の主節に後置された pendant que 節では主語が不定名詞句で新しい情報を表し、主語の情報の重要度が高い。(62) の tandis que 節では、主語は定名詞句であり動詞句に比べて情報量が多いわけでもなく、倒置よりも正置が好まれる要因が揃っている。しかし、動詞句 s'exprimer par la danse は先行文脈の「舞踏会に行った」という情報から連想できる表現となっており、情報の重要度は低い。さらに「舞踊によって表される「田舎風の喜び」」の内容が、tandis que 節の後の主節で説明されている。書き手が、後続の談話において話題となるような、新しい要素を導入するために、倒置が用いられていると考えられる。(63) と (64) は主語名詞句に制限的關係節が後続している例であり、主語の情報量が多く、主語の情報の重要度が高いために倒置されている。(65) は主語名詞句の語数が多く情報量が多いのに対して、動詞が一語で情報量が少ないので、主語のほうがより重要な情報となっている。

以上、時間を表す副詞節のうち、直説法が用いられる時間節を扱ったが、接続法を用いる時間節である avant que 節のほうが倒置の頻度は高い。avant que の節内の動詞には接続法が用いられ、事態が非断定的に表される。その事態についての真偽に関する態度を表さない分、動詞句の担う情報量が少なくなるため、他の時間を表す従属節よりも倒置の頻度が高くなっていると考えられる。(66)(67) は avant que 節の倒置の例である。

(66) on ne les informait jamais de rien : simplement, la veille, à l'appel du soir, avant que sonne l'extinction des feux, le gradé de service avait dit : « Demain, douches. Prêts à neuf heures ! » (Simon C., *L'Acacia*, 1989: 43)

Lit. they were never informed of anything: simply, the day before, at evening roll call, before rings the extinction of the lights, the noncommissioned officer had said: "Tomorrow, showers." Ready at nine o'clock!"

(67) Des centaines d'hommes se précipitèrent vers le port : ils voulaient à tout prix partir avant que n'arrive l'ennemi. (Olivier É., *L'Orphelin de mer*, 1982: 172)

Lit. Hundreds of men rushed towards the port: they wanted at all costs to leave before arrives the enemy.

(66) では「消灯の知らせが鳴る」という「鳴るか否か」という動詞の情報よりも、主語の「消灯」の情報のほうが重要であると考えられる。(67) でも同様に、「着くか着かないか」という動詞の情報よりも、「着くのが誰であるか」を表す主語の情報の

ほうが重要度が高いと考えられる。

このように時間を表す従属節は、直説法と接続法の区別と、主節との位置関係によって断定と非断定の区別が異なるが、いずれの倒置の例も主語の情報の重要度が動詞の情報の重要度より高いという条件を満たしていると考えられる。

3.3.3.2. 比較を表す従属節

この節では、比較を表す従属節として、*plus / moins / aussi / si adj. que* 節、*comme* 節、*tel que* 節、*autant que* 節の倒置を検討する。まず、*plus / moins / aussi adj. que* 節の例を挙げる。

- (68) [...] cette initiation graduelle était érotiquement plus captivante que ne l'aurait été une licence d'un seul coup totale. (Matzneff G., *Ivre du vin perdu*, 1981: 54)
Lit. [...] this gradual initiation was erotically more captivating than would have been a one-shot license.
- (69) La dissymétrie des vallées de l'Armagnac, pont-aux-ânes de l'apprenti géographe, est moins nette que ne l'indique sur la carte un chevelu hydrographique trop caractérisé : les longues rides de collines qui séparent les rivières - les serres - plus épaisses qu'on ne l'imaginait, sont compliquées de vallons et de ravins à contre-pente. (Gracq J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 47)
Lit. The asymmetry of the valleys of Armagnac, pont-aux-ânes of the apprentice geographer, is less clear than indicates on the map an overly characterized hydrographic hairline: the long wrinkles of hills that separate the rivers - the greenhouses - thicker than imagined, are complicated with valleys and ravines on the opposite slope.
- (70) La santé de l'enfant est aussi psychosomatique que l'est la maladie.
(Dolto F., *La Cause des enfants* 1985: 374)
Lit. The health of the child is as psychosomatic as is the illness.

(68)(69) では、主語が不定名詞句であり新しい情報を表すため情報の重要度が高い。また、(68) は動詞が *être* という意味内容が希薄であり、倒置が強く好まれる動詞である。(69) の *indiquer* 「示す」は、Wall (1980) において倒置されやすい動詞の一つである。(70) においては動詞が *être* の直説法現在形であり、倒置が義務的な例である。いずれの例も動詞の前に直接目的代名詞 *le* が付加されているが、先行文脈の形容詞を指しており、情報の重要度は低い。動詞句の情報の重要度が主語の情報の重要度よりも低く、倒置になっていると言える。

また、*comme* 節では動詞に *dire* 「言う」が用いられた例が多くみられた。

- (71) Comme dit Killy : « Les racistes pour la plupart, c'est des ignorants, ils savent pas ces choses-là. » (Thérame V., *Bastienne*, 1985: 88)
 Lit. As says Killy, "Racists for the most part, they are ignorant people, they don't know those things."
- (72) Comme le dirait mon professeur de math, s'il passait par là, « Il n'y a pas lieu d'être fière, n'est-ce pas, mademoiselle Lecler ? » (Aventin C., *Le Cœur en poche*, 1988: 49)
 Lit. As would say my math teacher, if he experienced that, "There is no reason to be proud, is it, Miss Lecler?"

何らかの発言があったことは引用符の存在から明らかであり、引用符の中が発言内容であることも明白である。この場合、「言う」という行為そのものより、「誰が」発言するのかが重要な情報であると考えられるため、相対的に重要度が低い動詞を前方に、重要度が高い主語を後方に置くために倒置が用いられていると考えられる。また、*comme* 節において *dire* が用いられるとき、正置より倒置の頻度が高く、倒置の *dire* の例が 175 例あったのに対して、(73) のように正置で *dire* が用いられていた例は 3 例のみであった。

- (73) Le père et la mère sont, pour lui, maîtres de tout ce qui arrive... donc, si la prise de courant lui donne un courant électrique, exactement comme un ancien disait : « C'est Jupiter qui est dedans », il dit : « C'est Papa qui est là. » (Dolto F., *La cause des enfants*, 1985: 91)
 The father and the mother are, for him, masters of everything that happens... so, if the socket gives him an electric current, exactly as an old man said: "Jupiter is inside", he says "It's Dad who's here."

この例では、主語が不定名詞句であり、倒置になりそうな環境であるものの、正置となっている。これは、後続の *il dit* という節との対比があり、同じ語順とするために正置が用いられていると考えられる。このような例外のほかは、*comme* 節中の動詞が *dire* の時には倒置となっていた。*dire* は挿入節の倒置にも用いられやすい動詞であり、この *comme (le) dire S* という表現が慣用化したことが、*comme* 節の倒置の割合が 57%にのぼるという結果に影響していると考えられる。

最後に *autant que* 節の倒置の例を挙げる。

- (74) On trouve ici le type même des villes-mères, castratrices et possessives dans leur exclusivisme jaloux, tout autant que peut l'être, sur le plan charnel, la Genitrix du même Mauriac. (Gracq J., *La Forme d'une ville*, 1985: 195)

Lit. We find here the very type of mother-towns, castrating and possessive in their jealous exclusivism, just as much as can be, on the carnal level, the Genitrix of the same Mauriac.

- (75) Pour le souvenir qui reconstruit et simplifie, il n'y a, en dehors de ces boyaux épineux de la sierra, qu'un seul autre type de route en Espagne : les grands chemins des hauts plateaux, panoramiques de bout en bout et lunaires, moins encore parce qu'on y roule à même le sol nu que parce que le rayon de notre sphère semble s'y raccourcir, et qu'un simple dos de plateau y domine les lointains autant que ferait une montagne.

(Gracq J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 16-17)

Lit. For the memory that reconstructs and simplifies, there is, apart from these thorny guts of the sierra, only one other type of road in Spain: the great paths of the highlands, panoramic from end to end and lunar, even less because we roll there on the bare ground than because the radius of our sphere seems to shorten there, and because a simple back of plateau dominates the distance as much as would do a mountain.

(74)(75) のように、動詞が être や faire であり、意味内容が希薄であるため、主語の情報の重要度が相対的に高くなっている。また、être, faire 以外にも、vouloir や、(76) のような permettre が用いられている例が観察された。

- (76) Sauf délire et sauf drame qui les incitait à se haïr eux-mêmes, sauf exaltation nationale ou mystique qui les invitait au sacrifice et à l'abnégation, ils s'efforçaient, autant que le permettaient leur tempérament et leurs moyens, de garder en bon état de marche la machine qui leur appartenait et à laquelle, en retour, ils appartenaient aussi. (D'Ormesson J., *La Douane de mer*, 1993: 170)

Lit. Barring delirium and drama which incited them to hate themselves, barring national or mystical exaltation which invited them to sacrifice and abnegation, they strove, as far as permitted it their temperament and their means, to keep in good working order the machine that belonged to them and to which, in return, they also belonged.

(76) では、主語が並列であり、主語の方が動詞句よりも情報量が多いため、倒置が用いられていると考えられる。一方で、(77) のように主語の情報量が多くなく、節内の動詞が主節の動詞と対比されているような場合は、正置となっていた。

- (77) Devant les témoignages d'étrangers qui les visitent toutes deux pour la première fois, et que Nantes rebute autant qu'Angers les séduit, j'ai parfois l'impression

d'être sans équité pour cette ville. (Gracq J., *La forme d'une ville*, 1985: 16-17)
Lit. In front of the testimonies of foreigners who are visiting them both for the first time, and whom Nantes repels as much as Angers seduces them, I sometimes have the impression of being without fairness for this city.

正置が用いられていた例では、動詞が表す内容に対比が含意されている文脈や、主語が短いなど、倒置が妨げられる要因が見られた。

収集した比較を表す従属節では、動詞が être や dire など、意味内容が希薄な動詞である例や、倒置が習慣化している動詞の例が半数を占めた。また直接目的代名詞が付加される場合も、代名詞は既出の表現を指しているため、動詞句全体の情報の重要度は低いため、相対的に主語の情報の重要度が高くなり、倒置されていると考えられる。

3.3.3.3. 目的を表す副詞節

目的を表す副詞節である pour que 節は、節内の動詞に接続法を用いる従属節であり、その節の内容を非断定的に表す。非断定的な従属節では倒置しやすい傾向にあるものの、pour que 節で倒置が用いられていたのは 7%であり、他の副詞節と比べても倒置の割合が高いわけではない。他の従属節においては、主語に不定名詞句となる例が多くみられたが、pour que 節の倒置で主語が不定名詞句である例は 5 例のみ、pour que 節の正置でも不定名詞句主語は 10% (372 例中 37 例) のみであった。pour que 節は、主語の新しい情報を提示するというよりも、「(主語) が (~を) ~する」という出来事全体が問題になるため、倒置の頻度が低いと考えられる。pour que 節は倒置が起こりにくい従属節ではあるが、pour que 節中の倒置の例では、他の従属節と同様に、主語が不定名詞句である、語数が多く情報量が多い、動詞句の意味内容が希薄であるという特徴が観察された。

(78) Mais il avait suffi que je touche le sol de l'Union soviétique pour que se fît sentir comme au premier jour une peine sans nom.

(Thorez P., *Les Enfants modèles*, 1982: 70)

Lit. But it was enough for me to touch the soil of the Soviet Union in order that made feel as in the first day a nameless pain.

(79) Et il lui fallait un après-midi de funérailles, un Manivelle retrouvé sur la tombe de Vincent pour que s'opère la fusion, le transfert.

(Thérame V., *Bastienne*, 1985: 128)

Lit. And he needed an afternoon of funeral, a crank found on the grave of Vincent in order that takes place the merger, the transfer.

- (80) La note inscrite sur la copie a moins d'importance... elle sera probablement un 8 ou un 9... Mais il faut absolument pour que soit confirmée ma réussite que le devoir soit en tête de la liste ! (Sarraute N., *Enfance*, 1983: 216-217)
 Lit. The mark written on the paper is less important... it will probably be an 8 or a 9... But it is necessary absolutely in order that is confirmed my success that the assignment is at the top of the list!

(78) では、主語が不定名詞句であり、新しい情報を談話に導入している。それに対して動詞句は状況補語を伴っているが、動詞句の *se fit sentir* は主語の「痛み」と共起しやすい表現であり、動詞句の情報の重要度は低いため、倒置が用いられていると考えられる。(79) では、主語は定名詞句が二つ並べられ、*la fusion* が *le transfert* で言い換えられており、情報の重要度が高いと言える、一方、動詞は *s'opérer* 「作動する」という意味的に軽くなりやすい動詞であるため、主語の情報の重要度が高くなっていると考えられる。(80) は課題が返却される場面での一文であり、動詞の表す「確かになる」という情報よりも、主語の *ma réussite* が表す「合格であるか不合格であるか」という対比された情報のほうが重要である。いずれの例も、主語名詞句の情報のほうが、動詞句の情報よりも重要度が高い場合に倒置が用いられていると考えられる。

以上のように倒置の例では、主語のほうが重要な情報になるような特徴が観察されたが、正置の例においても、主語が不定名詞句であり、動詞句の意味内容が希薄であるという、倒置が好まれるような条件を備えた例が観察された。

- (81) Il suffisait que quelqu'un lève les yeux vers le ciel pour qu'un groupe de badauds se forme, chacun scrutant quelque gros nuage d'où surgirait peut-être un monstre d'acier porteur de bombes. (Sabatier R., *Les Fillettes chantantes*, 1980: 285)
 Lit. It was sufficient that someone looks up at the sky for in order that a group of onlookers forms, each peering into some large cloud from which might emerge a monster of steel carrying bombs.

(81) では主語が不定名詞句であり、さらに *se former* 「形成される」という倒置が好まれる動詞が用いられているが、正置となっている。この例のほかにも、動詞句が節末を占め、倒置が起こる条件が該当してはいるが正置が用いられている例が収集された。このように、目的節は接続法を用いる従属節であるものの、倒置の頻度が低く、正置が用いられやすい理由として、目的節が動詞の情報に重きが置かれやすいためであると推測できる。例えば (81) の目的節は、「野次馬の集団のため」という主語の情報が主であるわけではなく、「野次馬の集団が形成されるため」という動詞句を含めた節全体の情報が重要と考えられる。倒置では、動詞の情報の重要度が低い、目的節では動詞句の情報や節全体の情報が主な伝達内容となりやすいため倒置の頻度が低

く、正置が使われやすいと考えられる。

3.3.3.4. sans que

sans que は「～することなく」という意味で用いられる従属節であり、節内の動詞には接続法が用いられる。収集した *sans que* 節のうち倒置の割合は 11%であり、時間を表す副詞節に比べると、比較的倒置が起こりやすい副詞節である。接続法によって非断定的に表されるという特徴が、倒置の頻度に影響していると考えられる。さらに、従属接続詞 *sans que* 自体が否定の意味を持ち、従属節内の動詞が表す事態の成否事態はそもそもの問題とならないため、動詞の情報の重要度は低くなりやすい。また、収集した倒置の例では、他の従属節と同様、主語のほうが情報の重要度が高い例が多く見られた。

- (82) [...], et je ne me rappelle jamais ces dînettes si frugales et si tendres, que le soleil qui balayait la place inondait au travers des rideaux, sans que vienne s'y entrelacer la belle strophe de Baudelaire : *Et le soleil, le soir, ruisselant et superbe Qui, derrière la vitre où se brisait sa gerbe Semblait, [...]*.

(Gracq J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 180)

Lit. [...], and I never remember those dinettes, so frugal and so tender, that the sun which was sweeping the square flooded through the curtains, without that comes to intertwine there the beautiful stanza of Baudelaire: Et the sun, the evening, dripping and superb Who, behind the glass where her sheaf was breaking Seemed, [...].

- (83) il importe que ces postes soient réservés à d'authentiques représentants de la race polonaise, sans que s'interpose un élément non national connaissant mal les traditions du véritable peuple polonais...

(Poirot-Delpech B., *L'été 36*, 1984: 216-217)

Lit. it is important that these positions be reserved for authentic representatives of the Polish race, without that intervenes a non-national element unfamiliar with the traditions of the true Polish people...

- (84) Certes, seul le jugement divin condamne l'homme à la tragédie. Or, aujourd'hui, Dieu est absent, sans que disparaisse pour autant la soif de communauté et d'univers. Pascal a vécu cela le premier. (Kristeva J., *Les Samouraïs*, 1990: 21)

Lit. Certainly, only the divine judgment condemns man to tragedy. Now, today, God is absent, without that disappears however the thirst of community and of universe. Pascal was the first to experience this.

(82) は、主語名詞句の「ボードレールの詩の節」の内容がコロン以降に続いており、主語の名詞句の情報の重要度が高く、倒置されている例である。(83) は、動詞は *s'interpose* 「間に入る」という主語の存在を表す動詞のみであり、情報の重要度が低いのに對し、主語は不定名詞句であり修飾部が長く、情報量が多く重要度が高い。(84) では、主語が並列を含む情報量が多い要素であり、さらに後続文脈でも言及がある要素であるため、主語の情報の重要度が高い。

sans que 節においても、動詞よりも主語の情報の重要度のほうが高い場合に倒置が用いられていると言える。ただし、少数ではあるが (85) のような例外的な例もある。

- (85) *En plein Paris du Front populaire, des militaires en service commandé pouvaient donc enlever une femme sans que rien ne se passe, sans qu'un uniforme ni une toga ne bouge ?* (Poirot-Delpech B., *L'Été 36*, 1984: 253)
Lit. In the middle of Paris of the Popular Front, soldiers on commissioned service could therefore kidnap a woman without that anything happens, without that a uniform or a toga moves?

(85) では、主語は不定名詞句が並列されており、倒置も可能な特徴を備えているものの、直前の *sans que* 節では *rien ne se passe* という正置の語順となっており、語順を同じくするために後続の *sans que* 節でも正置が選択されていると考えられる。一方で、このように倒置が好まれる条件が揃っている正置の例は少なく、その他の正置の例では目的語や状況補語を伴うか、主語が定名詞句であり、正置が好まれる要因が観察された。

3.3.3.5. 理由を表す副詞節

本節では理由を表す従属節として *parce que* 節と *puisque* 節における倒置を検討する。*parce que* 節は断定を表す従属節であるが、*puisque* 節は聞き手にとっても既知の情報として、前提を表す従属節である。したがって *puisque* 節のほうが倒置が起こりやすいと予測されるが、*parce que* 節と *puisque* 節の倒置の例はそれぞれ 3 例ずつのみであった。*puisque* 節は、前提を表す従属節であるものの、*parce que* 節と同様に倒置の例が少ないことが明らかになった。この原因として、理由を表す従属節は統語的には従属節であるが、意味的には主節に従属しているというより、主節と等位に近い節であるという特徴が考えられる。実際、理由節の *parce que* 節も *puisque* 節も動詞に直説法を用いることが倒置の頻度に影響していると言える。

このように理由節では倒置が起こりにくい、収集した *parce que* 節の倒置の例として (86)(87) を挙げる。

- (86) C'est le métaphysicien bégayeur au visage concassé qui, [...], passera quelques mois à Rome où tu l'as déjà rencontré parce que ne comptent pour toi ni le temps ni l'histoire : c'est Ballanche. (D'Ormesson J., *La Douane de mer*, 1993: 170)
Lit. It is the stuttered metaphysician with a crushed face who, [...], will spend a few months in Rome where you have already met him because do not count for you neither time nor history: it's Ballanche.
- (87) Peut-être parce qu'il savait que je l'aimais vraiment, et parce que s'était usée chez lui un peu avec les années cette disposition si caractéristique qu'il avait eue à trancher dans son vif n'importe quel lien d'amitié, dès qu'un différend se faisait jour dans le domaine des idées.
(Gracq J., *Carnets du grand chemin*, 1992: 175)
Lit. Perhaps because he knew that I really loved him, and because had worn out in him a bit over the years this disposition so characteristic that he had had to cut off any bond of friendship, as soon as a difference arose in the field of ideas.

(86) では、節内が否定文となっているが、その否定が主語にかかり、さらに主語が列挙となっているため、主語のほうが必要な情報である。(87) では、主語名詞句に制限的關係節が後続しており、語数が多い要素となっている。動詞句も状況補語を含んではいるが、主語のほう語数が多いため、倒置が容認されていると言える。

puisque 節の倒置の例では、(88)(89) のように主語が ne...que の制限の対象となっていた。

- (88) Quand les études ont été organisées, rien n'était imposé puisque n'allaient à l'école que ceux qui voulaient y aller.
(Dolto F., *La Cause des enfants* 1985: 428)
Lit. When the studies were organized, nothing was imposed since went to school only those who wanted to go there.
- (89) Or la littérature, elle ne peut qu'être narcissique, puisque n'écrivent que des gens qui souffrent de désirs qu'ils ne peuvent pas satisfaire et qui les satisfont par le fait d'écrire leurs fantasmes. (Dolto F., *La Cause des enfants* 1985: 250)
Lit. However the literature, it can only be narcissistic, since writes only people who suffer from desires that they cannot satisfy and who satisfy them by the fact to write their fantasies.

puisque 節中の倒置の例として収集した 3 例のうち、(88)(89) 以外の 1 つの例では、主語が語数の少ない定名詞句であったが、詩の一部であり、情報構造とは別の要因である音韻が強く働いていた。その 1 例を除く全ての parce que 節と puisque 節の倒置において、主語名詞句が列挙である、關係節を伴う、「～だけ」という制限の対象で

あるなど、主語が重要な情報を担う特徴を備えていた。

一方、(90) のように主語が不定名詞句であり、動詞が目的語や補語を伴っておらず、倒置が起こりやすい特徴を備えていても、正置が用いられている例がある。

- (90) *Avançant, reculant, se penchant d'un côté, de l'autre, attentive, critique, elle se faisait belle pour elle-même et aussi parce qu'une certaine idée du dimanche le lui recommandait.* (Sabatier R., *David et Olivier*, 1985: 145)
Lit. Advancing, retreating, leaning from one side to the other, attentive, critical, she made herself beautiful for herself and also because a certain idea of Sunday recommended it to her.

以上から、理由節では、主語が不定名詞句であるという特徴や、動詞句の情報の重要度が低いということだけでは、倒置が用いられにくいと考えられる。さらに理由節内で倒置が起きるためには、動詞の情報の重要度が低いという特徴ではなく、主語の情報の重要度が積極的に高いという特徴を満たす必要があると言える。

3.4. 倒置の要因

本節では、第2章で挙げた倒置の要因が、それぞれ従属節中の倒置にどのように現れていたのかまとめ、要因間の倒置に与える影響の優劣について分析する。倒置に関わる要因として、主語、動詞、その他の補語の特徴として下記の点を挙げていた。

- (91) 主語：名詞句の長さ、定性、有生性、対比の含意
動詞句：意味内容の希薄さ、先行詞との意味的なつながり、助動詞の有無、否定、法、受動態、時制
その他の補語：直接目的語、間接目的語、状況補語の有無

これらの要因は各従属節の例を挙げる中で、倒置を引き起こす要因あるいは、倒置を妨げる要因として、収集した例の中にも観察された。この中で、倒置を引き起こす要因のうち、最も影響が強く、必ず倒置となる特徴としては、主語が否定や限定表現 *ne...que* の対象となっているという点と、動詞が *être* の単純形でその後には状況補語や目的語などが続かないという点がある。前者の特徴は、倒置が起こりにくい従属節である *puisque* 節でも見られた。例として、理由節の倒置の例を再掲する。

- (92) *Quand les études ont été organisées, rien n'était imposé puisque n'allaient à l'école que ceux qui voulaient y aller.* (= (86))
(Dolto F., *La Cause des enfants*, 1985: 428)

Lit. When the studies were organized, nothing was imposed since went to school only those who wanted to go there.

倒置の頻度が低い従属節の中でも、制限や否定の対象が主語である場合には倒置が用いられることから、強く倒置を導く要因であると言える。また、動詞が être であるという特徴は、関係節や比較節、間接疑問の où 節で観察されやすい。その他の従属節では、être が属詞や状況補語などを伴う場合が多いため、正置が用いられやすい。(93) に制限的關係節、(94) に間接疑問の où 節で動詞が être であるために倒置されている例を挙げる。

(93) Pourtant, chaque fois qu'elle peut, quand elle a décidé qu'elle a terminé son travail, Lalla sort de la Cité et elle va vers les collines où sont les bergers.

(Le Clézio J.-M.G., *Désert*, 1980: 136)

Lit. However, whenever she can, when she has decided that she has finished her work, Lalla leaves the City and she goes towards the hills where are the shepherds.

(94) Elle lui demanda où était son sac, pour le monter dans le dortoir.

(Carrère E., *La Classe de neige*, 1995: 16)

Lit. She asked him where was his bag, to carry it in the dormitory.

これらの特徴以外にも倒置の要因となっていると考えられるものはあったものの、必ず倒置を導くわけではなく、倒置が起こりやすいという傾向に過ぎない。それに該当する特徴としては、まず主語が不定名詞句であるという点である。主語が不定名詞句であっても、(95)のように倒置ではなく、正置となっている例が観察された。

(95) Il suffisait que quelqu'un lève les yeux vers le ciel pour qu'un groupe de badauds se forme, chacun scrutant quelque gros nuage d'où surgirait peut-être un monstre d'acier porteur de bombes. (=79))

(Sabatier R., *Les Fillettes chantantes*, 1980: 285)

Lit. It was sufficient that someone looks up at the sky for in order that a group of onlookers forms, each peering into some large cloud from which might emerge a monster of steel carrying bombs.

このように不定名詞句であるということは、絶対に倒置を引き起こす要因とはならない。ただし、目的節以外の倒置の頻度が低い従属節において、主語が不定名詞句であるにもかかわらず正置が用いられているときには、目的語や状況補語などを伴っている例が大半を占めていた。倒置を引き起こす強い要因ではなくとも、やはり不定名詞句は重要な情報として認められやすい傾向はあると考えられる。

倒置を好む主語名詞句の特徴の一つとして、有生かつ人であるという特徴を挙げているが、この点については際立った傾向は見られず、むしろ無生物の主語の例が多く収集された。正置の例においても、人を表す固有名詞が主語となっている例が多かった。指示対象が人であるということだけが倒置の要因となっていると考えられる例は稀であり、倒置の要因としては強いものではないと言える。平塚 (2002) では、関係節中の倒置の条件として、主語のほうが先行詞の指示対象の同定への寄与が大きいことを挙げ、それを満たす主語の特徴として、有生かつ人であることに触れていた。しかしこの特徴が満たされない例も多いことから、それほど強力な制約ではないことが推測できる。

動詞句に関しては、意味内容が希薄な動詞や、関係節において先行詞と縁語関係にある動詞であるとき、情報の重要度が低いため倒置となる。特に関係節や比較を表す従属節において、これらの特徴があるため倒置が用いられている例が多く収集された。これらの動詞句の特徴は、先に述べた動詞が être の単純形の場合ほど強く倒置を導くわけではなく、正置となる場合もあるものの、倒置されやすくなる要因と考えられる。

一方で、倒置を好む要因としていたものの、倒置への影響が弱いと考えられる要因としては、助動詞の有無、受動態、時制がある。非制限的關係節などでは、助動詞がなく、能動態であり、単純時制の動詞が節末を占める正置の例は稀であったが、動詞の特徴よりも目的語や状況補語の有無のほうが強く影響していると言える。また、助動詞の存在や受動態、複合形の時制は、正置を好む特徴と考えられていたが、これらの特徴を備えた倒置の例はいずれの従属節においても観察された。したがって、これらの特徴が強く倒置を妨げるわけではなく、倒置と正置の選択に強く影響するとは考えられない。

もう一つの動詞の特徴として、直説法と接続法の区別がある。接続法を用いる従属節では、若干ではあるものの倒置の割合が高い結果が得られた。しかし目的を表す *pour que* 節や譲歩を表す *bien que* 節は接続法を用いる従属節ではあるが、倒置の割合は低かった。これらの従属節には、従属節自体の特徴として、節全体や動詞句の表す情報の重要度が高くなりやすく、倒置されにくい性質があると考えられる。接続法の動詞は、従属節自体の性質を覆すほど強く倒置を引き起こすわけではないと言える。

動詞句の情報の重要度には、直接目的語、間接目的語、状況補語の存在も関連し、これらが動詞の後に置かれる場合、倒置が好まれないという特徴がある。ただし、倒置への影響度はそれぞれ異なり、最も倒置が妨げられるのが直接目的語、次に間接目的語、そして状況補語と続く⁵⁵。直接目的代名詞や間接目的代名詞は、動詞の一部となるため倒置を妨げず、収集した倒置の例の中にも観察されたが、動詞の後に直接目的語や間接目的語という名詞句の形で置かれた倒置の例は見られなかった。直接目的

⁵⁵ これは既に東郷・大木 (1986) においても指摘されていたことであるが、本研究のコーパスの調査からも裏付けられた。

語や間接目的語がある場合、動詞の意味内容が希薄であっても、強く正置が好まれる。それに対して、動詞の後に状況補語がある倒置の例は散見されたことから、状況補語は強く倒置を妨げるものではないと言える。

また、否定が主語に係る場合には倒置が強く好まれると先に述べたが、否定が動詞句に係る場合は強く正置を好む要因となる。否定だけではなく、対比についても同様であり、対比が主に主語名詞句に含意される文脈がある場合には、倒置が強く好まれるが、動詞句のみ、あるいは主語と動詞句それぞれに対比が含意されると強く正置が好まれる。

以上に挙げた、主語や動詞句、その他の補語が、従属節中の語順に及ぼす影響を、表4に表す。

必ず倒置される	主語が否定や限定の対象である 動詞が être の単純形かつ属詞や状況補語などを伴わない
倒置が好まれる度合いが高い	主語が列挙である、関係節を伴う、主語に対比が含意される、動詞の意味内容が希薄である
倒置の要因となるが程度は低い	主語が不定名詞句である、主語が有生であり人を表す、動詞が接続法である
正置が好まれるが倒置も可能である	状況補語がある、否定が動詞句にかかる、動詞に対比が含意される
倒置が妨げられる	直接目的語名詞句がある

表4：倒置の要因とその影響度

以上のように、主語、動詞、その他の補語の各特徴が倒置の要因となるが、倒置を引き起こす程度はそれぞれの特徴によって異なる。そして複数の要因が、相互に影響しあうことによって、従属節中の語順が選択される。

3.5. まとめ

本章では、関係節、補文、副詞節における倒置について、コーパスの収集結果を基に、情報の重要度との関係から考察を行った。結果として、従属節のタイプや接続詞ごとに倒置の頻度が異なるということ、そして接続詞ごとの倒置の特徴を明らかにした。また、従属節中の倒置の例は、主語名詞句の担う情報の重要度が、動詞句の担う情報の重要度よりも高いという条件を満たすことを示した。そして各例の分析から、第2章で挙げた情報の重要度に関わる主語、動詞句、その他の補語の各特徴が倒置に与える影響の強さについて考察を行った。本節では、以上の点に関する本章の分析のまとめを行う。

まず、コーパス調査の結果から、倒置の頻度が従属節のタイプや接続詞ごとに異なることを明らかにし、その差異には従属節の意味と情報の重要度が関係することを指摘した。本研究で扱った従属節のうち、倒置の頻度が高かったのは、関係節と間接疑問節であった。関係節や間接疑問節では、直接目的語や属詞、状況補語などが、関係代名詞や疑問詞として節頭に位置づけられることによって、節内の動詞の後に現れる要素数が少なくなり、動詞句に含まれる情報量が減少し、動詞句の担う重要度が低くなることによって、相対的に主語名詞句の担う情報の重要度のほうが高くなりやすくなる。その結果として、倒置が生起しやすい統語構造となるため、関係節や間接疑問における倒置の頻度が高いと考えられる。

また、比較節の *comme* 節においても倒置の頻度が高く、これには *comme* 節で用いられやすい動詞が、*être* や *dire* など、意味内容が希薄な動詞であることが影響していた。情報の重要度が低い動詞と共起しやすいため、それに伴って倒置を用いる表現が慣例化していき、倒置の頻度が高い結果につながっている。

また関係節や間接疑問、比較節ほど倒置の頻度は高くないが、副詞節の一部において接続法を用いる従属節では倒置の頻度が若干高くなる。ただし接続法を用いる副詞節のうち *pour que* 節は、主語の情報よりも、動詞句や節全体の情報が重要になりやすく倒置に適さないため、倒置の頻度が低いと考えられる。

倒置の例数が最も少なかった従属節は、理由節と譲歩節であり、譲歩節では *bien que* 節のように接続法を用いる場合もあるが、倒置の例が収集されなかった。譲歩節も理由節も統語的には従属節であるが、意味的には主節と同様に断定的に表される節であるため、倒置が起こりにくいと言える。

また 3.3 節においては、各従属節の倒置の例の分析から、第 2 章で挙げた倒置の要因となる主語、動詞句、その他の補語の特徴が倒置に与える影響の程度について考察を行った。先行研究においても倒置が好まれる特徴として挙げられてきたものでも、その強さには差があることを指摘した。動詞が *être* の単純形であり後続の要素がないという場合や、否定や限定が主語にかかっている場合は必ず倒置を引き起こしている。主語が列挙であったり、関係節を伴う場合、主語に対比が含意されている場合、動詞の意味内容が希薄である場合、倒置の頻度が低い従属節でも倒置の例があることから、倒置を起こす強さが強いと言える。主語が不定名詞句であるという点も、倒置を起こす要因にはなるものの、必ず倒置となるわけでもないため、倒置を起こす強さは若干弱い。また、直接目的語や間接目的語がある場合の倒置の例は観察されず、強く倒置を妨げる要因となるが、状況補語を含む倒置の例は収集されたため、状況補語の存在が倒置を妨げる程度は弱いと言える。

本研究では、「情報の重要度」という概念によって、従属節における倒置について主語名詞句の担う情報の重要度と、動詞句の担う情報の特徴を比べ、主語名詞句の重要度のほうが高い時に倒置が用いられており、倒置はより重要度の高い要素を節の後方に置く機能があることを示した。そして断定を表す従属節だけではなく、非断定を表す従属節においても、情報の重要度が語順に影響を与えている。さらに、情報の重

要度と倒置の生起に影響する特徴にも、それぞれ程度の差があることを指摘した。

第4章 従属節中の場所句倒置

4.1. 本章の目的

前章では、様々な従属節中の倒置について、接続詞の直後に動詞句が来る例を扱った。本章では、従属節の内部が場所句倒置になっている例を分析対象とする。まず、主節における場所句倒置 *inversion locative* とは、(1) のように場所や時間を表す前置詞句が文頭に前置され、その後が動詞・主語という倒置の語順である現象を指す¹。

- (1) *Dans la cour, régnait l'animation habituelle.* (Brincourt; in Lahousse 2011: 65)
Lit. In the courtyard, reigned *the usual animation.*

主節の場所句倒置について Fuchs & Fournier (2003)²は、前置された場所句はテーマを表し、場所句によって設定された場面の中に倒置された主語がレーマとして導入されると分析している。そして場所句倒置では、場所句の主題化と主語の焦点化の機能が働いているとされている。一方、先行研究の従属節中の倒置に関する記述や、情報構造の観点からの分析における主な分析対象は、接続詞の直後が動詞・主語の語順となっている例である (Wall 1980, Lahousse 2011)。従属節中で場所句倒置のように場所句の前置と主語の倒置が共起する例は、主な分析対象とされてこなかった (Marandin 2011, Lahousse 2011)。

英語にも (2) のような場所句倒置構文が存在し、豊富な先行研究がある。

- (2) a. Down the hill rolled the baby carriage.
b. On the table was put a valuable book. (Coopmans 1989: 729)

その中で、英語の場所句倒置は「提示機能」を持ち (Bolinger 1977, Levin & Rappaport Hovav 1995, 中島 2001)、「情報的に軽い *informationally light*」動詞のみが許容されると指摘されている (Coopmans 1989)。そして英語の場所句倒置は主節現象の一つであり、主節では自然であるが、従属節中に現れると不自然であったり、非文法的とみなされる (Hooper & Thompson 1973)。Hooper & Thompson (1973) は主

¹ 場所句倒置で文頭にある前置詞句は、場所を表す前置詞句だけではなく、時間を表す前置詞句も含まれる。本論文では、場所を表す前置詞句と時間を表す前置詞句を総称して場所句と呼ぶこととする。これ以降、前置詞句+VSの語順を「場所句倒置」、前置詞句を節頭に置くことは「場所句の前置」、場所句の前置に関わらずVSの語順は「倒置」、SVの語順は「正置」と呼ぶ。

² 詳細は第2章参照。

節現象の分析の中で、(3) のように述べている。

- (3) a. 場所句倒置は主語を強調して表す役割を担う。
b. 主節現象が容認される従属節は、不定名詞句を先行詞とする制限的關係節、非制限的關係節、断定的な動詞に導かれた補文、非制限的な *because* 節であり、これらの従属節は主節のように断定を表すため、主節にしか認められないはずである構文も容認される。
c. 先行詞が定名詞句の制限的關係節や、非断定的な動詞に導かれた補文、制限的な *because* 節、(even) *though* 節、時間を表す副詞節は前提を表し、節内に情報構造はないため、何らかの要素を強調する働きを持つ主節現象の容認度が下がる。

このように Hooper & Thompson (1973) では、従属節内の主節現象の生起には、従属節内の情報構造の有無と前提・断定の区別が関係すると指摘されている。Lambrecht (1994) は話し手が聞き手に既知情報として表す場合、その節は前提の情報であり、その節内には情報構造がないとしている。一方で従属節の内容を話し手が新情報として表す場合、その従属節は断定を表すことになり、その内部には主節と同様に情報構造が存在すると考えられている。

前提を表す従属節と断定を表す従属節の分類についても、研究者によって見解が異なる。例えば Lahousse (2011) は、従属節内に *probablement* ‘probably’や *peut-être* ‘may be’を挿入可能な場合は話し手が命題の真偽を判断していると言えるため断定であり、挿入不可能の場合は話し手が命題の真偽値には関わらないことを示すため前提を表すとしている。これによると時間節、比較節、目的節は前提を表す従属節に含まれ、Hooper & Thompson (1973) の分析と異なる。

このように、従属節の前提と断定の区別については議論の余地があるといえるが、本論文では、前提は話し手が聞き手にとって既知情報として表すこと、断定は話し手が聞き手にとっての新情報とし、その命題が真であると新たに表すこととする。例えば、「*le livre qu’il lisait*」の關係節の内容は聞き手が知っていることを表しているため、前提を表す従属節と考える。一方「*Je pense qu’il lit un livre.*」の補文は聞き手が知らなかった情報を伝達していると考えられるため、断定を表す従属節と考える。

また、先行研究では、主節の場所句倒置では主語のみが焦点となる場合と、場所句以外が焦点となる場合があると言われている (Marandin 2011)。従属節中の場所句倒置は主語をその文の狭い焦点として提示する機能があるとは考えにくいものの、主語を重要な情報として表していると言えるかを検討していく。

以上を踏まえ、フランス語の従属節中の場所句倒置について、以下の3点に着目して考察していく。

- 1) 場所句倒置と、場所句の前置がない倒置の場合には、倒置の頻度や情報構造に差

異があるのか。

- 2) フランス語の場所句倒置は、英語の場所句倒置のように断定を表す従属節に限られるのか。
- 3) 場所句の前置がない倒置と同様に、場所句倒置についても、主語名詞句の情報の重要度が動詞句の担う情報の重要度よりも高いという特徴で説明できるのか。

本章では、この 3 つの問題に関して、コーパス調査に基づいて検討する。まず 4.2 節でフランス語の従属節中の場所句倒置をコーパスで収集する手法とその結果を提示する。4.3 節～4.5 節ではそれぞれ関係節、補文、副詞節の中の場所句倒置の特徴について従属節の前提と断定の別を検討しながら分析し、4.6 節ではまとめとして考察を行う。

4.2. 収集したデータおよび各従属節の内訳

従属節中の場所句倒置の例を収集するため、Frantext intégral を使用した³。1980 年以降に出版された文献を対象とし、Recherche avancée を用いて、従属節接続詞の直後に前置詞が来る例を検索した。従属節ごとに検索を行うのではなく、従属節接続詞 *conjonction de subordination* としてタグ付けされている要素の直後に、前置詞句が現れる例を検索した。従属節接続詞として対象となっているのは、*que*、*où*、*dont*、*lequel* の関係代名詞と、*quand*、*si*、*lorsque*、*quoique*、*comme*、*parce que*、*puisque* といった接続詞である。節内で前置された前置詞として対象としたのは、*derrière* ‘behind’、*devant* ‘in front of’、*entre* ‘between’、*à côté de* ‘beside’、*sur* ‘on’、*sous* ‘under’、*dans* ‘in’、*à* ‘at’、*de* ‘from’である。検索結果から分析対象外の例を除外し、前置詞句の後が正置の例 (LSV) と倒置の例 (LVS) を抽出した⁴。各例を、制限的關係節、非制限的關係節、同格節、補文、時間を表す副詞節、比較を表す副詞節、理由を表す副詞節、譲歩を表す副詞節、仮定節、*sans que* 節、目的を表す副詞節に分類した。

結果は表 5 に示す通りであり⁵、場所句の前置がない倒置と比較するため、第 3 章のデータと併せて従属節のタイプごとに生起数をまとめたものが表 6 である。表 6 では左から場所句前置がない正置 (SV) と倒置 (VS)、右に場所句前置のある場合の正置 (LSV) と倒置 (LVS) の割合を示している⁶。

³ <https://www.frantext.fr/> 2020 年夏に調査を行った。

⁴ 除外した例として、*entre* が前置詞ではなく動詞 *entrer* の現在形である例や、接続詞の後が前置詞句のみで主語や動詞が含まれていない例があった。

⁵ *dans*、*à*、*de* の検索結果数が多数であったため、一部のみを分析した。*dans* は約 4 倍、*à* 約 9 倍、*de* 約 3 倍の例数がある。制限的關係節と非制限的關係節の分類は便宜上、ヴィルギュルの有無を基準としている。

⁶ 表中の LSV は場所句の後が正置である場合を、LVS は場所句の後が倒置である場合を表す。

分析対象を行った例の総数は 692 件であり、そのうち倒置の例は 28%に当たる 192 例であった (表 5)。従属節のタイプごとに見ると、倒置の例数が最も多かったのは補文であり、次に時間を表す副詞節、制限的關係節中が続いた。一方で、譲歩節や目的節中の場所句倒置は少数であることが明らかになった。また、各従属節において場所句の後の語順が正置である場合と倒置である場合の例数を比較すると、場所句倒置の割合が高いのは制限的關係節、非制限的關係節、比較を表す副詞節、目的を表す副詞節であり、正置と倒置が同様な割合で用いられていることが明らかになった。補文中の倒置は例数は多かったものの、正置の例も多く、場所句の前置がある例のうち倒置の割合は 23%となった。

また従属節のタイプに関わらず全体的な傾向として、第 3 章で扱った場所句の前置がない場合よりも、場所句の前置があるほうが倒置の割合が高いことが明らかである。例えば、制限的關係節では、場所句の前置がない場合は倒置の割合が従属節の中で最も高かったものの、倒置の割合は 34%にとどまっていた。それに対し、場所句の前置がある場合は 53%で倒置が起きている。倒置の割合が比較的少なかった時間を表す副詞節においても、場所句前置がない倒置は 5%のみであったが、場所句前置がある倒置は 43%であり、半数が場所句倒置であることが分かる。場所句が前置されることによって、倒置の頻度が高くなると言える。

	derrière/devant		entre		à côté de		sur/sous		dans		à		de		total	
	sv	vs	sv	vs	sv	vs	sv	vs	sv	vs	sv	vs	sv	vs	sv	vs
restrictive	2	4	5	1	0	0	1	10	6	6	2	1	6	4	22	25
non-restrictive	0	1	2	0	0	1	2	5	4	1	1	0	2	2	11	11
appositive	1	0	2	0	0	0	8	2	7	0	2	0	1	1	21	3
complétive	11	14	44	12	7	2	71	14	97	12	51	11	23	24	304	89
temporelle	3	4	1	1	1	0	15	17	12	3	7	2	5	6	44	33
comparative	1	0	1	1	0	0	3	3	5	6	3	0	0	1	13	11
causale	1	2	4	0	2	2	2	3	14	2	5	2	3	1	31	12
concessive	2	0	1	0	1	0	3	1	18	1	7	0	2	0	34	2
si	0	0	0	0	0	0	2	1	9	1	3	0	2	1	16	3
sans que	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
pour que	0	0	0	1	0	0	0	0	2	2	0	0	1	0	3	3
	21	25	61	16	11	5	107	56	174	34	81	16	45	40	500	192

表 5 : 従属節中の場所句倒置の生起数⁷

⁷ 表中の SV は正置、VS は倒置を表す。

	場所句前置無			場所句前置有		
	SV	VS	total	LSV	LVS	total
制限的關係節	7503	3946	11449	22	25	47
	66%	34%		47%	53%	
非制限的關係節	1791	255	2046	11	11	22
	88%	12%		50%	50%	
補文	3256	175	3431	304	89	393
	95%	5%		77%	23%	
時間	4030	214	4244	44	33	77
	95%	5%		57%	43%	
比較	529	533	1062	13	11	24
	50%	50%		54%	46%	
目的	372	30	402	3	3	6
	93%	7%		50%	50%	
理由	846	6	852	31	12	43
	99%	1%		73%	27%	
譲歩	190	0	190	34	2	36
	100%	0%		94%	6%	

表 6：場所句前置の有無と倒置の有無の例の生起数

4.3. 関係節中の場所句倒置

関係節のタイプを、定名詞句を先行詞とする制限的關係節、不定名詞句を先行詞とする制限的關係節、非制限的關係節に分け、まず、断定を表すと考えられている不定名詞句を先行詞とする制限的關係節と非制限的關係節中の考察から始める (Lambrecht 1994)。表 5 が示すように、非制限的關係節中の場所句倒置 (LVS) は 11 例、場所句の後が正置である例 (LSV) も同数の 11 例であった。表 6 では、場所句の前置がない場合の非制限的關係節中の倒置の割合は 13% であるため、場所句前置によって倒置の割合が高くなることがわかる。

まず、非制限的關係節中の場所句倒置を分析すると、主節の場所句倒置について分析されてきたように、節頭の前置詞句が状況を表し、主語名詞句の指示対象の存在や出現、消失を表す表現や、主語の状態を表し、動詞が意味的に軽い傾向があることがわかる (Cornish 2001)⁸。(4)~(6) に非制限的關係節中の場所句倒置の例を挙げ、意味的な特徴と情報の重要度の点から分析する。

- (4) On dit qu'aux Antilles, où dans une même famille apparaissent des types si différents, les commères demandent, après la naissance d'un bébé : « Il est bien sorti, au moins ? ».
 (Nourissier F., *À défaut de génie*, 2000: 177)
 Lit. It is said that in the Antilles, where in the same family appear such different

⁸ « le dénominateur sémantique commun à tous ces verbes est la dénotation d'existence ou d'apparition d'une entité ou d'un état de choses, et le critère discursif sous-jacent, celui de la « légèreté » de l'apport d'information associé à ces verbes. »
 (Cornish 2001; 5)

- types*, the gossips ask, after the birth of a baby: "Did he come out well, at least?"
- (5) De là j'ai été à la B.N.C., où derrière un guichet siège la compagnie météo du corps d'armée. (Sartre J.P., *Carnets de la drôle de guerre : septembre 1939-mars 1940*, 1983: 443)
- Lit. From there I went to the B.N.C., where behind a counter sits the weather company of the army corps.
- (6) Nouveau petit film, haché, précipité, où à ce moment précis s'ouvrira à toute volée la porte donnant sur le couloir de la maison et où quelqu'un, le successeur par exemple, fera irruption dans la pièce, fusil de chasse à deux canons braqué dans sa direction.
- (Benoziglio J.-L., *La voix des mauvais jours et des chagrins rentrés*, 2004: 241)
- Lit. New little film, choppy, rushed, where at this precise moment will fly open the door leading to the hallway of the house and where someone, the successor for example, will burst into the room, shotgun to two guns pointed in his direction.

(4) では、動詞 *apparaître* 「現れる」という出現を表す動詞が用いられており、節頭の前置詞句は主語が出現する状況を設定する役割を果たしている。主語は不定名詞句であり、主語が動詞句よりも情報の重要度が高いと言える。(5) では場所句の後に、存在を表す動詞 *siège* が用いられている。主語名詞句は定名詞句であるが、動詞句に比べて語数が多く、情報の重要度は動詞句よりも主語のほうが高いと考えられる。(6) では、時間を表す前置詞句が節頭に置かれ、状況を設定している。動詞は、状態を表すわけではないが、倒置された主語 *la porte* 「ドア」と共起しやすい表現であり、情報の重要度は低い。主語には現在分詞が続いており情報量が多く、主語名詞句の情報の重要度が動詞句の情報の重要度よりも高いと言える。一方、(6) の *où* 節の後にはさらに *où* 節が続いており、後続の *où* 節では正置が用いられている。後続の *où* 節でも倒置が可能と考えられるが、主語が *quelqu'un* という情報の重要度が低く倒置になりにくい不定代名詞であるため、倒置が妨げられていると考えられる。このように、従属節中の場所句倒置に関しても、情報の重要度の観点から考察すると、動詞句よりも主語の情報の重要度が高いときに倒置が用いられるという特徴があると言える。

節頭の場所句の後が正置である例では、(7) のように動詞句にさらに状況補語が続いているなど、動詞句の情報量が多く、主語の情報の重要度が低いという特徴が見られた。

- (7) Soir, 20 heures *Émilie et moi* marchons jusqu'au 170 rue de Charonne, passage Bureau, où dans un petit théâtre, le Proscenium, Léo va jouer avec quatre comédiens la pièce de J.- C. Grumbert Linge sale.

(Chaix M., *L'été du bureau*, 2005: 68)

Lit. Evening, 8 p.m. Emilie and I walk to 170 rue de Charonne, passage Bureau, where in a small theatre, the Proscenium, Léo is going to perform with four actors J.-C. Grumbert's play *Linge sale*.

このように場所句が前置されている場合も、倒置が起こるときには動詞句よりも主語名詞句の担う情報の重要度が高いと言える。

次に不定名詞句を先行詞とする制限的關係節中の場所句倒置について考察する。第3章でも述べたように、不定名詞句を先行詞とする制限的關係節は、断定を表す従属節であると言われている(古川 1983)。収集した制限的關係節の例を対象とし、先行詞が不定名詞句であるか定名詞句であるかを分類したところ、不定名詞句を先行詞とする制限的關係節中の場所句倒置は6例、場所句の後が正置である例は4例であった。場所句前置がない倒置の場合、先行詞が不定名詞句の制限的關係節の例は24%である。収集した場所句倒置の例数が少ないため確定的ではないが、場所句の前置を伴うと倒置の頻度が高いという一定の傾向は見られる。

- (8) J'ai cacheté ces papiers éparés, fermé à clef des choses, remué un tiroir où sur des feuilles de rose dorment mes plus beaux jours.

(Pozzi C., *Journal: 1913-1934*, 1997: 170)

Lit. I sealed these scattered papers, locked things, moved a drawer where on rose leaves sleep my best days.

- (9) Un jardin aux mystérieux éclairages, une nuit laiteuse où sur le vert lumineux des feuillages se détachaient les sphères blanches de petits ballons dont les cordes en cellophane brillaient. (Mauriac C., *Bergère ô tour Eiffel*, 1985: 361)

Lit. A garden with mysterious lighting, a milky night where on the luminous green of the foliage stood out the white spheres of small balloons of which the cellophane strings shone.

(8)の倒置された動詞は *dormir* であるが、「美しい思い出がある」という主語の存在を比喩的に表している。(9)でも「浮かび上がる」という出現を主体の立場から表す表現となっている。さらに主語名詞句に *dont* 關係節が後続していることから、動詞句よりも主語名詞句のほうが情報の重要度が高いと言える。關係節中の場所句倒置でも、節頭の場所句が場面を設定し、その場面において存在・出現するものである主語名詞句を重要な情報として提示するために、場所句の前置と主語の倒置が用いられると考えられる。

次に、定名詞句を先行詞とする制限的關係節中の場所句倒置について検討する。先行詞が定名詞句の制限的關係節は、前提の情報を表す(Lambrecht 1994)。前提を表す關係節の内部には、情報構造がなく、主節現象が認められないとされている(Hooper & Thompson 1973)。しかしフランス語に関しては、コーパス調査の結果、

定名詞句を先行詞とする制限的關係節内の場所句倒置の例は 19 例収集した。Hooper & Thompson (1973) の主張とは異なり、フランス語では前提を表す従属節の中でも場所句倒置が用いられることが分かる。また、表 6 が示すように、制限的關係節中の場所句倒置の割合は 53%であり、場所句の後が正置の場合と同程度の頻度で用いられている。さらに、場所句前置がない場合の倒置の割合は 34%であることから、場所句倒置のほうが倒置の割合が高いと言える。

- (10) [...] l'environnement matériel qui s'appesantit sur une vie mal oxygénée finit par émettre en vase clos les mêmes radiations débilantes que sur ses ultimes possesseurs émet la *Maison Usher*. (Gracq J., *La forme d'une ville*, 1985: 14)
Lit. [...] the material environment that weighs down on a poorly oxygenated life ends up emitting in a vacuum the same debilitating radiation that on its ultimate owners emits *the House Usher*.
- (11) Le moment où sous le chemisier apparaît le soutien-gorge, qui est toujours plus compliqué, adulte, dentelle noire, plus dégoûtamment transparent qu'on ne l'attendait. (Nourissier F., *À défaut de génie*, 2000: 544)
Lit. The moment when under the blouse appears *the bra, which is always more complicated, adult, black lace, more disgustingly transparent than expected*.
- (12) Comme dans ces inondations où sur le fleuve de boue qui charrie des arbres et des voitures, apparaît tout à coup une baignoire, ou un panier avec une poupée. (Pachet P., *Devant ma mère*, 2007: 75-76)
Lit. As in these floods where on the river of mud which carries trees and cars, suddenly appears *a bathtub, or a basket with a doll*.

(10) は「アッシャー家の建物が最後の所有者に放った妖気」という制限的關係節である。場所句の前置によって場所が設定されているが、動詞は主語の存在や状態を表すわけではない。しかし動詞 *émettre* は先行詞の *radiation* と共起しやすい単語であり、動詞の情報の重要度は低い。動詞よりも「誰が放ったか」という主語の情報のほうが重要であるため倒置されていると考えられる。(11) では動詞に *apparaître* という出現を表す表現が用いられており、動詞句の情報の重要度は低い。それに対して主語名詞句には非制限的關係節が後続しており、情報の重要度が高いと言える。(12) でも出現を表す動詞が用いられているのに加えて、主語が不定名詞句で新しい指示対象を談話に導入しているため、主語の情報の重要度が動詞よりも高くなっている。

いずれの場所句倒置の例も、制限的關係節内で主語をより重要な情報として提示する役割を果たしていると言える。ただし、(11) は統語的には制限的關係節であるが、発話が一つの名詞句のみで構成されており、主節が欠けている構造となっている。この制限的關係節は、意味的には主節のような働きをしており、一般的な制限的關係節のように前提の情報を表しているというより、断定の情報を表していると考えられ

る。また、(12) の制限的關係節も、先行詞の指示対象を同定するために必要な情報
を表しているのではなく、洪水に関する補足的な内容であり、前提ではなく断定の内
容を表していると言える。これらの例は統語的には「定名詞句+關係節」であるもの
の、意味的には断定を表す關係節と考えられる。先行研究では、定名詞句を先行詞と
する制限的關係節は前提を表すとされてきたが、同じ統語構造であっても前提を表さ
ず、断定を表す制限的關係節もありうるということがわかる。統語的には關係節であつても、
場所句倒置が起きている例の一部は断定的であるということは、場所句倒置が断定を
表す従属節に限られるという Hooper & Thompson (1973) の主張に沿うものであり、
フランス語においても断定的な従属節において現れやすいと考えられる。

關係節が断定を表す場合も前提を表す場合も、場所句倒置が現れうる。さらに主
語の倒置が起こるときには、動詞は出現や存在を表すか、先行詞と共起しやすい意味
を持つなど、情報の重要度が低い傾向があつた。それに伴い主語名詞句の情報の重要
度が比較的高くなる。このことから、關係節中の場所句倒置についても、主語名詞句
の情報の重要度のほうが動詞句より高いと言える。また、3 章で扱った場所句の前置
がないときよりも、倒置の割合が高い。これは、場所句が節頭にくることによって、
動詞句に含まれる要素が少なくなり、その後続く主語名詞句と動詞句の情報の量を
比較した際、主語名詞句の情報の重要度が高くなりやすくなることが影響していると
推測できる。

以上、場所句倒置の例を挙げたが、場所句の後が正置となっている例でも、主語
の情報の重要度のほうが高いと考えられる例も見られた。(13) では動詞句には目的
語や状況補語が含まれず、主語は二つの単語で構成されており、倒置が好まれそうな
条件が揃っている。

(13) *Accepter de faire, comme eux, le silence sur la maladie, c'est accepter la distance
qu'entre moi et les autres leur délicatesse et leur indifférence ont creusée.*

(Nourissier F., *À défaut de génie*, 2000: 806)

*Accepting to remain, like them, silent on the disease, it is to accept the distance
that between me and the others their delicacy and indifference have created.*

(13) では、主語が二つの名詞句の並列となっており、主語の情報の重要度が高いと
考えられるが、動詞が複合過去形であるため倒置が妨げられていると考えられる。こ
のように、主語の情報の重要度が高いと考えられる場合にも必ず倒置となるわけでは
ない。主語の情報の重要度が動詞句よりも高いのは、倒置を可能にする必要条件の一
部であり、必ず倒置されることを予測するものではない。

4.4. 補文中の場所句倒置

次に補文中の場所句倒置について考察する。まず倒置の頻度は、場所句が前置されているときの倒置の割合は 22%であり、場所句の前置がないときの倒置の割合が 5%であることと比較すると、場所句前置があるほうが倒置の頻度が高くなっていることが明らかである。

Hooper & Thompson (1973) は、主節現象は補文が断定となる場合のみ生起が可能であり、英語の場所句倒置も断定を表す補文に限られると主張している⁹。英語の断定の補文を導く動詞には、say, be certain, think, suppose 等がある。例えば、主節の動詞が say である場合、その発話における主な断定の内容は、主節の表す「誰かが（何かを）言った」ということではなく、補文が表す発言内容となる。一方で、英語の非断定的な補文を導く動詞には、resent, regret, be interesting 等があり、これらの動詞に導かれた補文は、その内容に対する話し手や主節の主語の指示対象の態度を表し、補文の内容の真偽については断定されない。このような非断定を表す補文内の主節現象は容認度が下がるとされている。

フランス語の補文では、補文内の動詞が直説法である場合は断定を表し、接続法である場合は非断定を表すとされている (Lahousse 2011)。フランス語の場所句倒置を含む補文について、補文を導く動詞及び提示詞のタイプ数とトークン数を調べたところ、補文中の倒置 89 例中、動詞のタイプ数は 47 であり、そのうち 3 回以上使われたものは、croire ‘believe’, dire ‘say’, espérer ‘hope’, être ‘be’, penser ‘think’, savoir ‘know’, voici/voilà ‘here is(are)’である。これらの動詞はいずれも、基本的に動詞には直説法が用いられる動詞であり、断定を表す補文を導く。

(14) Je serais plutôt tenté de croire que derrière chaque visage se cachent des abîmes de métaphysique et tout le mystère du monde.

(D’Ormesson J., *La douane de la mer*, 1993: 367)

Lit. I would rather be tempted to believe that behind each face are hidden abysses of metaphysics and all the mystery of the world.

(15) Beaucoup de gens espéraient que de cette révolte soudaine sortirait une mutation.

(Mendès-France P., *Œuvres complètes. 6. Une vision du monde*, 1990: 489)

Lit. Many people hoped that from this sudden revolt would come a mutation.

(16) Nous voudrions que l’on cesse de penser en Allemagne que derrière toute initiative française se cache de la malveillance à votre égard.

(Mendès-France P., *Œuvres complètes. 3. Gouverner, c’est choisir*, 1986: 669)

Lit. We would like that people stop thinking in Germany that behind any French initiative hides malevolence towards you.

(17) J’ai compris que sur cette liste ne figuraient que des noms pour lesquels Mme

⁹ Green (1976) は、従属節の断定と前提の区別だけでなく、倒置された主語の定性も容認度に影響すると指摘している。

Sarah avait des projets d'avenir.

(Bober R., *Quoi de neuf sur la guerre ?*, 1993: 47)

Lit. I understood that on this list figured only names for which Ms. Sarah had plans for the future.

(14) では、主節の croire に続く補文の中で場所句倒置が用いられている。主語が不定名詞句と定名詞句の並列となっており、情報の重要度が高い。また、節頭の前置詞句が表す場所において、「隠れている」という状態を表す動詞が用いられている。Se cacher は純粹に主語の存在だけを表すわけではないが、主語の存在を提示する役割を果たしており、主語のほうが情報の重要度は低いと言える。(15) では、espérer の後に補文で、前置詞句の後が倒置となっている。補文節内の動詞は sortir という移動を表す動詞であるが、主語 une mutation 「突然変異」の発生を比喩的に表現している。倒置された主語は不定名詞句であり、新しい情報を提示する役割を果たしている。(16) の倒置を含む補文は penser で導かれている。動詞は (14) と同じ se cacher が用いられており、部分冠詞を伴う名詞句が主語となっている。前置詞句が表す場所における主語の指示対象の存在が表されており、主語名詞句のほうが動詞句よりも情報の重要度が高いと言える。(17) は comprendre に後続する補文内の場所句倒置の例であり、動詞には出現を表す動詞 figurer が用いられている。そして ne...que の制限表現が主語に係り、さらに主語名詞句に制限的關係節が続いており、明らかに主語名詞句の情報の重要度が高くなっている。

以上、直説法を用いる補文中の場所句倒置の例では、主節ではなく従属節の内容が主な伝達情報となり、ある場面での主語の指示対象の存在や出現を表している例が多く観察された。いずれの例も、動詞句の担う情報よりも、主語の担う情報の重要度が高いという性質が該当した。断定を表す補文中でも重要な情報である主語を節末に置くために、場所句倒置が用いられると考えられる。

次に、非断定を表す従属節中の倒置について検討する。英語では断定を表さない補文では場所句倒置が容認不可能と言われているが (Hooper & Thompson 1973)、フランス語では非断定の補文内においても場所句倒置の例が見られた。非断定を表す補文を導く動詞には、補文内の動詞が接続法となる craindre ‘fear’, sembler ‘seem’, vouloir ‘want’ などがある。これらの動詞で導かれた補文内でも場所句倒置の例がある。

(18) Il craint que de l'augmentation de l'autorité que nous reconnaissons au gouvernement fédéral ne résultent les plus mauvais développements sur le plan psychologique et sur le plan politique, [...].

(Mendès-France P., *Œuvres complètes. 3. Gouverner, c'est choisir*, 1986: 392)

Lit. He fears that from the increase of the authority which we recognize in the federal government will result the worst developments psychologically and

politically, [...].

- (19) Il semblait donc qu'entre la population urbaine et celle des champs dût naître une sympathie de similitude. (Aymé M., *Nouvelles complètes*, 2002: 95)

Lit. It therefore seemed that between the urban population and that of the fields should be born a sympathy of similarity.

- (20) l'axiome de la composition au présent qui m'anime s'accompagne d'un principe de continuité qui voudrait qu'entre deux moments achevés de prose ne se passe qu'une seule nuit de vie courante.

(Roubaud J., *La Bibliothèque de Warburg : version mixte*, 2002: 137)

Lit. the axiom of composition in the present that inspires me is accompanied by a principle of continuity which would like that between two completed moments of prose happens only one night of everyday life.

(18) では、*craindre* に続く補文の中で場所句倒置が用いられている。補文内の倒置された動詞は *résultent* 'result' であり、「結果として主語の *développements* 「発展」が発生した」という主語の指示対象の出現を比喩的に表している。倒置された主語名詞句は最上級の形容詞と、前置詞句で修飾されており、情報量が多い要素となっている。

(19) では、非人称構文 *il semble que* の中で場所句倒置が起こっている。場所句の後の動詞は *devoir* を伴っているが、*naître* 「生まれる」という出現を表す動詞句が続き、不定名詞句の主語が節末に置かれている。文脈的に主語名詞句のほうが相対的に重要度が高い要素と考えられる。(20) の *vouloir* に続く補文の中では、場所句の後に発生を表す動詞 *se passer* 「起こる」が置かれている。主語には、制限表現の *ne...que* がかかっており、主語の情報の重要度が高いと言える。

主語の情報を導入するために、場所句を前置することで場面が設定され、提示する対象である主語を重要な情報として後方に置くために倒置が用いられていると考えられる。以上の例では補文内で接続法の動詞が用いられており、補文節の内容の真偽についての態度は示さない表現である。しかし、その補文節の内容の中での、情報の流れは存在し、場面を設定する場所句が節頭に置き、補文節内の主語名詞句の指示対象を提示するために倒置が用いられていると考えられる。

以上、断定を表す補文の場合と同様、断定ではない補文内でも場所句倒置が容認されることを示した。断定・非断定に関わらず、補文内の場所句の前置がある倒置では、主語の存在や出現を表す傾向があり、主語を重要な情報として表すために倒置が用いられていると言える。

一方、前置された場所句の後に正置となっている例では、主語の存在や出現より、動詞句の表す事態が重要な情報となっている。

- (21) Il est regrettable que dans cette circonstance le Parti communiste ait voté avec la droite et l'extrême droite pour renverser un gouvernement de progrès.

(Mendès-France P., *Œuvres complètes. 6. Une vision du monde*, 1990: 214)

‘It is regrettable that in this circumstance the Communist Party voted with the right and the extreme right to overthrow a government of progress.’

- (22) De plus, j’avais tout de même suffisamment lu les journaux en 1948, je savais que dans les zones d’occupation alliées, en Allemagne, le parti communiste était interdit. (Goldschmidt G.-A., *La traversée des fleuves*, 1999: 239)

‘Moreover, I had still read the newspapers enough in 1948, I knew that in the Allied occupation zones, in Germany, the Communist Party was prohibited’

(21) は長い状況補語を伴っており、動詞の情報の重要度が高い。(22) は短い動詞句ではあるが、*était interdit*「禁止されていた」という意外性のある情報を担っており、動詞の重要度が高いと言える。(21)(22) のように場所句の後が正置のとき、節頭の前置詞句は場所を設定する役割は果たしているが、動詞句が表す事態が補文の表す情報の中心になると考えられる。

4.5. 副詞節中の場所句倒置

本節では、時間、比較、目的、理由、譲歩を表す副詞節中の場所句倒置について検討する。*sans que* 節に関しては、前置詞句が前置されている例が少数であり、倒置の例が見られなかった。副詞節のうち断定を表すとされているのは理由節と譲歩節であり、時間節、比較節、目的節は非断定を表すとされている (Lahousse 2011)。ただし、接続詞の種類や主節との位置関係によって、断定と前提の分類が異なる場合があるため、各従属節について個別に考察を行う。

4.5.1. 時間を表す副詞節

まず時間を表す副詞節について検討する。時間節中の場所句倒置は 33 例で、場所句の前置がある時間節のうち倒置の割合は 43%であった。時間節の前提・断定の区別は主節との位置関係によるものであり、時間節が主節の後方にある場合、断定を表し、主節の前にある時間節は前提的な情報として、場面を導入する役割を担う。まず、時間節が主節の後方にある場合の、場所句倒置の例を検討する。

- (23) [...] toute son attention est à la manière dont la terre prend le soc. Mesure d’une résistance qu’il perçoit au creux de sa propre gorge, quand sur les paumes glissent, tournent, les flancs mêmes de la terre.

(Trassart J.-L., *Des cours d’eau peu considérables*, 1981: 210)

Lit. [...] all his attention is to how the earth takes the ploughshare. Measurement of a resistance that he perceives in the hollow of his own throat, when on the palms slide, turn, the very sides of the earth.

- (24) Mais sa benjamine, [...], décide d'envahir ma modeste Citroën, où Tio a pris place à côté de moi, tandis que sur la banquette arrière se serrent mes deux filles, jusqu'ici convenables. (Bazin H., *L'école des pères*, 1991: 16)

Lit. But his youngest, [...], decides to invade my modest Citroën, where Tio has taken his place next to me, while on the back seat huddle together my two daughters, so far been decent.

- (25) Elle ne progresse plus guère que dans la cybernétisation du capital et dans cette science de la communication qui gagne si fort en utilité lucrative depuis qu'entre la société marchande et la société vivante s'est instauré un dialogue de sourds.

(Vaneigem R., *Nous qui désirons sans fin*, 1996: 57)

Lit. It hardly progresses except in the cybernetization of capital and in this science of communication which has gained so much in lucrative utility since between the market society and the living society has been established a dialogue of the deaf.

(23) は *quand* 節中の場所句倒置の例である。動詞は *glissent* と *tournent* が並列されており動詞句の情報の重要度が高いように見えるが、主語に *même* 「まさにその」という形容詞が付加され、主語が強調されることによって、主語名詞句のほうが重要な情報となっている。(24) では、*tandis que* 節の中で場所句倒置が起きている。動詞が *serrent* という一つの動詞であるのに対し、主語には形容詞が後続しており、主語名詞句のほうが重要度が高いと言える。(25) の *depuis que* 節では、*s'est instauré* 「創設された」という代名動詞の複合過去形の動詞が用いられている。主節の場所句倒置では、複合過去形や大過去形などの完了アスペクトは用いられないと言われているが (Gournay 2001)、従属節中では完了アスペクトも可能であることが分かる。ただし複合過去形でも倒置となっている理由としては、動詞 *s'instaurer* 自体が主語の出現を表し、さらに主語が不定名詞句であるという倒置を好む条件が揃っていることが考えられる。いずれの例も、主語を重要な情報として提示するために倒置されていると考えられる。

次に、主節に前置された時間節の例を検討するが、場所句倒置の例は少数であった。時間節が前提を表す場合には場所句倒置が起こりにくく、断定を表す副詞節のほうが場所句倒置が起こりやすいと考えられる。

- (26) Lorsque sur Main Street défile la grande parade du soir, elle est au premier rang parmi les fauteuils roulants et les petits mongoliens [...].

(Forest P., *L'enfant éternel*, 1997: 324)

Lit. When on Main Street marches the great evening parade, she is in the front row among the wheelchairs and the little Mongolians [...].

- (27) En janvier 1945, alors que sur le pays pesait l'hypothèque de la peur, nous dira Henri Duvillard, André Mutter et moi nous avons posé le problème de la réconciliation. (Blondin A., *Ma vie entre les lignes*, 1982: 48)

Lit. In January 1945, when on the country weighed down the mortgage of fear, Henri Duvillard will tell us, André Mutter and I posed the problem of reconciliation.

- (26) と (27) はそれぞれ、主節に前置された時間を表す副詞節中で、場所句倒置が起きている例である。動詞の意味としては存在を表す動詞とは言えないが、それぞれ「大通りにパレードが行われている」「国に恐怖の障害がのしかかっている」というように、主語の指示対象が前置詞句の表す場所に在ることを表していると考えられる。そしてどちらの例も動詞が一語であり、主語が動詞句よりも重要な情報を占めている。

以上、時間を表す副詞節に関しては、主節の位置に関わらず、場所句倒置の語順が用いられうるものの、断定を表す時間節のほうが、場所句倒置が起きやすいことが明らかになった。また、関係節や補文の場合と同様、重要な情報を提示するために倒置が用いられていると考えられる。

4.5.2. 比較を表す副詞節

比較を表す節は、比較の基準を表すため前提を表す従属節と言えるが、場所句倒置が生起可能である。比較節中の場所句倒置は 11 例であり、倒置の割合は 46%であり、場所句前置がない倒置の 50%と比べると、明確な差はなかった。前置詞句の前置がある倒置の例は *comme si* 節のみで、*plus adj que* などの比較節における場所句倒置は見られなかった。収集された *comme si* 節中の場所句倒置の例を挙げる。

- (28) Il va d'un endroit à l'autre comme si sous ses yeux se brouillaient tous les âges, toutes les couches du passé et que ressortent plus nettement des épisodes oubliés de sa vie ou de son enfance. (Bienne G., *Le Silence de la ferme*, 1986: 87)

Lit. He goes from one place to another as if before his eyes are blurred all the ages, all the layers of the past and that stand out more clearly forgotten episodes of his life or his childhood.

- (29) Les photographies se suivent, précédées chacune d'un sifflement électronique, comme si dans le boîtier nichait quelque vipère.

(Martin L.-É., *Le Tremblement : Haïti, 12 janvier 2010*, 2010: 82)

Lit. The photographs follow one another, each preceded by an electronic whistle,

as if in the box was nesting some viper.

(28) では、動詞は *se brouiller* 「混在する」という一単語のみであるのに対して、主語は二つの名詞句の並列となっており、主語の情報のほうが重要度が高いと言える。(29) では、「ケースの中に住み着いているのがマムシだ」という、主語の存在を表す表現となっている。動詞句よりも、「何が現れたのか」「何がいるのか」という主語の担う情報の重要度のほうが高いと言える。(30)(31) のような前置詞句の前置がない倒置の比較節では、動詞の前に文脈を指示するような代名詞がある例が多くあるが、場所句倒置では動詞に前置される代名詞を含む例は収集されなかった。

(30) [...] *cette initiation graduelle était érotiquement plus captivante que ne l'aurait été une licence d'un seul coup totale.* (Matzneff G., *Ivre du vin perdu*, 1981: 54)
Lit. [...] this gradual initiation was erotically more captivating than would have been a one-shot license.

(31) Comme le dirait mon professeur de math, s'il passait par là, « Il n'y a pas lieu d'être fière, n'est-ce pas, mademoiselle Lecler ? »

(Aventin C., *Le Cœur en poche*, 1988: 49)

Lit. As would say my math teacher, if he experienced that, "There is no reason to be proud, is it, Miss Lecler?"

場所句の前置がない場合、動詞には *être* や *dire*、*parler* などが多用されており、動詞句の情報の重要度が低いため相対的に主語の情報の重要度が高くなっていた。一方場所句倒置がある場合は、出現や存在を表す動詞や、状態を表す動詞が用いられ、その動詞の情報重要度が低いために倒置が用いられていると考えられた。場所句倒置は文脈から重要な情報と言える主語名詞句を提示するために倒置が用いられており、動詞句よりも主語の情報の重要度が低いために倒置されていると言える。

4.5.3. 目的を表す副詞節

目的を表す副詞節である *pour que* 節では、節内の動詞に接続法が用いられるため、その節内の内容は非断定的に表される。この非断定的な *pour que* 節においても、少数ではあるが場所句倒置の例があり、主節現象が断定を表す従属節に限られるという Hooper & Thompson (1973) の主張とは異なっている。場所句倒置は3例のみであったが、場所句の後が正置となっている例も3例のみである。*pour que* 節では、場所句の後の語順に関わらず、前置詞句の前置自体が稀であることが分かる。前置された場所句は主語が出現・存在する状況を設定する表現であり、主語をより重要な情報として表すために場所句倒置が用いられていると言える。

- (32) Ce n'était pas la parole, qui discours à l'aventure, ni sa feinte oratoire qui singe la spontanéité, mais une voix nue, sans fard ni déguisement de théâtre, une voix inapprise, dont l'inaptitude même articulait l'inflexion, et qu'avait-il donc écrit à cette femme pour qu'entre eux s'établisse la correspondance ?

(Garat A.-M., *L'enfant des ténèbres*, 2008: 630)

Lit. It was not speech, which discourses haphazardly, nor its oratorical pretense which apes spontaneity, but a bare voice, without make-up or theatrical disguise, an unlearned voice, whose very inaptitude articulated the inflection, and what had he written to this woman for that between them establish the correspondence?

- (33) Car vous ne savez rien de ce qui reste encore à venir, de l'obstination cruelle, de la vengeance impersonnelle de cette force sans nom qui s'est saisie au hasard de votre enfant pour que dans le temps resplendisse sa splendeur noire.

(Forest P., *L'enfant éternel*, 1997: 120)

Lit. For you know nothing of what is yet to come, of the cruel stubbornness, of the impersonal vengeance of this nameless force which seized your child at random for that in time might shine its black splendor.

(32) では、前置された場所句によって「彼らの間に」という状況が先に設定され、動詞 *s'établisse* 「築かれる」が続く。動詞は単純に主語の存在や出現を表すわけではないが、「彼らの間に」主語の *la correspondance* 「文通関係」が現れることを表していると考えられる。主語も短い定名詞句であり、倒置が回避されそうであるが、単純形の動詞が文末に来ることを避けるために倒置が用いられていると言える。(33) は動詞の *resplendisse* 「輝く」という情報ではなく、主語の *splendeur noire* 「闇の栄光」がその時代に存在していたことを表し、主語のほうが情報の重要度が高いと言える。*pour que* 節における場所句倒置の例は少数であったが、特に単純形の動詞が節末に置かれるのを避け、動詞よりも主語の情報を重要な情報として提示するために、倒置が用いられていると考えられる。

4.5.4. 理由を表す副詞節

次に、理由を表す副詞節中の場所句倒置について検討する。理由節内で前置された場所句の後が倒置である例は 12 例、割合は 27%であり、他の従属節に比べて理由節内の倒置の割合は低い。しかし、場所句の前置がない場合の倒置の割合が 1%であることと比較すると、場所句の前置がある場合のほうが倒置の割合が高いことが分かる。

まず、理由節のうち *parce que* 節中の場所句倒置の例について検討する。 *parce que* 節は断定を表す従属節である (Lahousse 2011)。

- (34) Malgré le regard averti, il y avait encore quelque grâce enfantine dans ce visage. Peut-être à cause de la courbe de la joue, de ce duvet léger qui l'ombrail encore. Peut-être parce que derrière le rideau glacé de ce regard flottaient encore *des rêves inassouvis, des désirs d'enfant*. (Page A., *Tchao pantin*, 1982: 114)
Lit. Despite the knowing look, there was still some childlike grace in that face. Perhaps because of the curve of the cheek, of this light down which still shaded it. Perhaps because behind the icy curtain of this gaze still floated *unfulfilled dreams, childish desires*.
- (35) Tu n'imagines pas combien à l'hôpital je suis heureuse de voir une crise d'appendicite, un accouchement, une fracture du bras dans une chute de bicyclette, tous ces problèmes que soignent les autres hôpitaux ; parce que dans celui-là arrivent jour et nuit *des gens blessés par balles, au couteau, brûlés par des explosions*. (Jenni A., *L'Art français de la guerre*, 2011: 570)
Lit. You can't imagine how happy I am in the hospital to see an attack of appendicitis, childbirth, a broken arm in a fall from a bicycle, all those problems treated in other hospitals; because in there arrive day and night *people wounded by bullets, with knives, burned by explosions*.

(34) の *parce que* 節では、主語の不定名詞句が並列された長い要素であり、さらに動詞は単純形の活用で一語のみである。動詞の「浮かんでいた」という事態よりも「叶えられていない夢や、子供の頃の欲望」が在ることのほうがより重要な情報と考えられる。(35) でも、主語名詞句は過去分詞などの修飾要素が長く、動詞句より重要な情報を担っていると言える。

次に、*puisque* 節中の場所句倒置の例を分析する。*puisque* 節は聞き手にとって既知情報を表すため、前提を表す副詞節といえる。しかし、この *puisque* 節内にも場所句倒置が現れうる。

- (36) Il serait bien en peine de mieux définir sa position. Elle est haute, assurément, puisque devant lui, pour ce qu'il en voit à travers le pare-brise ruisselant, au-delà de la zone éclairée par les phares de voitures, ne s'ouvrent que *d'étroites rues en pente, trois ou quatre rues en faisceau, plongeant brusquement dans des directions opposées autant qu'obscures*. (Garat A.-M., *Chambre noire*, 1990: 60)
Lit. He would be hard pressed to better define his position. It is high, certainly, since in front of him, as far as he can see through the streaming windshield,

beyond the zone lit by the headlights of cars, open up only narrow sloping streets, three or four streets in a bundle, plunging abruptly in opposite and dark directions.

- (37) Il me faudrait comprendre quel homme était mon père le capitaine, puisque lui est née l'alliance. (Garat A.-M., *Le Monarque égaré*, 1989: 99-100)
Lit. I would have to figure out which man was my father the captain, since from him was born the alliance.

(36) では、主語の「傾斜した狭い道」を描写する表現となっている。動詞句は「(その道が) 開けている」という表現によって、その道の存在を表すと考えられる。また動詞句が短く情報の重要度が低いのに対して、主語は不定名詞句であり、語数が多く、さらに限定表現の *ne ... que* がかかっていることから、主語のほうが情報の重要度が高い要素である。(37) は動詞句が出現を表す表現であるため、相対的に主語のほうが情報の重要度が高くなっている。*puisque* 節においても、場所句倒置は場所句が表す時空間において主語の情報を提示しており、情報の重要度が高い主語が節末に置かれていると言える。

理由を表す副詞節でも、従属節の断定と前提の区別は場所句倒置の生起に影響しないと言える。そして、いずれの場合も、主語を重要な情報として提示するために倒置が用いられる傾向があると考えられる。

4.5.5. 譲歩を表す副詞節

最後に譲歩を表す副詞節内の場所句倒置について検討する。譲歩節は断定を表す副詞節とされているが (Lahousse 2011)、本章で対象としている *bien que* 節は節内の動詞が接続法であるため非断定であり、*même si* の節内容は仮定であるため断定とは言えない。したがって譲歩節の *bien que* 節も *même si* 節も、節の内容を非断定的に表す従属節であると考えられる。譲歩節内で場所句倒置が見られたのは、*même si* 節のみであり、*bien que* 節の場所句倒置の例は見られなかった。*même si* 節内の場所句が前置された例のうち、倒置の割合は 6%で、2 例のみであった。場所句前置がない場合の倒置の割合 0%と比べると、場所句倒置のほうが若干倒置の割合が高いが、場所句の前置があっても他の従属節よりも倒置が現れにくいことがわかる。譲歩節では「～であるのに」という対立の意味が際立ち、譲歩節の内部で特定の要素を強調するのに適さないため、主語を際立たせる役割を担う倒置が拒まれるのだと考えられる。これは、主節現象が断定的な従属節で現れやすく、非断定的な従属節では現れにくいという Hooper & Thompson (1973) の指摘に沿う結果と考えられる。収集した譲歩節中の場所句倒置の例を 2 例挙げる。

- (38) Freud, je crois, n'a jamais renoncé à qualifier la psychanalyse de « psychologie des profondeurs » même quand profondeur est devenue surface [...], même si sous une surface ne se rencontre jamais qu'une autre surface, comme ne l'ignore pas celui qui pèle un oignon (Pontalis J.-B., *Traversée des ombres*, 2003: 58)
 Lit. Freud, I believe, never renounced qualifying psychoanalysis as "depth psychology" even when depth has become surface [...], even if under one surface is ever encountered only another surface, as does not ignore it the one who peels an onion....
- (39) Même si dans mes premières attributions ne figurait pas la Sécurité sociale - c'était le ministre du Travail, Michel Durafour, qui en avait alors la charge -, je me suis rapidement rendu compte que la situation financière du régime était catastrophique. (Veil S., *Une vie*, 2007: 184)
 Lit. Even if in my first attributions did not appear Social Security - it was the Minister of Labor, Michel Durafour, who was then in charge -, I quickly realized that the financial situation of the system was catastrophic.

(38) は、制限表現の *ne...que* が主語にかかっているという特徴に加え、前置された場所句の *une surface* 「ある表面」と主語の *une autre surface* 「もう一つの表面」が対比されており、主語の情報の重要度が高くなっている例である。(39) の動詞 *figurer* は否定表現を伴っているものの、出現を表す表現であり情報の重要度は低く、「何がなかったか」を表す主語の *Sécurité sociale* のほうが重要な情報と考えられる。さらに主語に関する情報が、挿入節で補足されており、主語のほうが重要な情報を担っていることが分かる。

以上のように、譲歩節内の場所句倒置は稀ではあるが、収集された譲歩節内の場所句倒置の例では、他の従属節の場合と同様に、主語の担う情報の重要度が動詞よりも高く、主語の指示対象の存在や出現に関する表現となっていることが明らかになった。

4.6. まとめ

本章では従属節中の場所句倒置の例を分析してきた。場所句の前置がある倒置と、場所句の前置がない倒置の割合を比較した結果として、比較を表す副詞節のみ場所句の前置がない倒置とほぼ同じ頻度であったが、他の従属節では場所句の前置があるほうが倒置の頻度が高くなる傾向を示した。まず、制限的關係節や非制限的關係節、時間を表す副詞節、目的を表す副詞節においては、場所句の前置がある例のうち倒置が約 4~5 割を占めており、場所句が前置されると倒置の頻度がかなり高くなることが分かる。補文や理由を表す副詞節の場所句倒置は 2 割であるが、場所句の前置がない

倒置と比べると倒置の頻度が高くなっていることが明らかになった。従属節内の場所句は、動詞の後にあると倒置を妨げる要因となるが、場所句が節頭に置かれることで倒置が好まれるようになると考えられる。場所句が動詞句の後に置かれると従属節内が「主語」と「動詞句（動詞＋場所句）」とに分けられ、動詞に場所句が後続することによって動詞句の情報量が増え、動詞句の情報の重要度が高くなるため、倒置を妨げられる。それに対して、節頭に場所句が置かれると、場所句は動詞句の塊から外され、「場所句」と「動詞」が分けられる。その結果として、動詞の情報量は低くなるため、倒置が起りやすくなると考えられる。

Hooper & Thompson (1973) は、英語の主節現象である場所句倒置は断定を表す従属節に限られると主張していた。しかし、フランス語の場所句倒置の例を分析した結果、定名詞句を先行詞とする制限的關係節や、動詞に接続法を用いる補文、比較を表す副詞節、目的を表す副詞節等、前提や非断定を表す従属節においても、場所句倒置が生起可能であることが明らかになった。したがって、フランス語の場所句倒置に関しては、断定を表す従属節に限られず、前提を表す従属節内でも現れうるという点で、英語の場所句倒置とは異なると言える。

いずれの従属節内の場所句倒置においても、前置された場所句は主語名詞句の指示対象が存在・出現する状況を設定する例が多く、これは動詞の情報の重要度が低くなる特徴である。その他の例でも、*ne ... que* の限定が主語にかかるなど、主語の情報の重要度が高くなり、主語を後方に置く特徴を備えていた。場所句の前置がない倒置と同様、主語名詞句の情報の重要度が動詞句の情報の重要度よりも高い場合に倒置が起きていることから、従属節中の場所句倒置は、従属節内でより重要な情報として主語を表す機能を持つと言える。そして、従属節中の情報構造は主節ほど明確な情報構造ではないが、情報の重要度が低い要素を前に置き、より重要な情報を後に置くという構造が、従属節中にも弱いながら存在すると考えられる。

第5章 従属節中の倒置主語と焦点

5.1. 本章の目的

本章の目的は、フランス語の従属節中の倒置が主語の焦点化の機能を担うか検討することである。第3章と第4章において、関係節や補文、副詞節における倒置は、主語名詞句の担う情報の重要度のほうが動詞句の担う情報の重要度よりも高い場合に生起していることを明らかにした。この情報の重要度は、文脈から判断される情報の重要度の相対的な重みを判断するものであった。

情報の重要度とは別の一般的な概念として、焦点がある。先行研究では、フランス語の主節の倒置において、倒置された主語は焦点化されると主張されてきた(東郷・大木 1980, Marandin 2011, Lahousse 2011)。しかし、倒置された主語が担う焦点の範囲や性質は例文によって異なることが明らかとなっていた(Marandin 2011, Lahousse 2011)。

- (1) A : Qui est reçu ?
'who is received?'
B : Sont reçus [Pierre, Paul et Bernadette]_{FOC}.
Lit. Were received Pierre, Paul and Bernadette. (Marandin 2003: 354)
- (2) A : Qu'est-ce qui se passe en septembre ?
'What happens in September?'
B : [En septembre]_{TOP} [apparaissent les grosses araignées]_{FOC}.
Lit. In September appear the big spiders. (Lahousse 2011: 223)

(1) では、主語が担う情報が、聞き手にとっての唯一の新しい情報であり、狭い焦点を担う。さらにその焦点は排他的であり、対立的な解釈を伴う。このように排他的な解釈を伴う焦点は *identificational focus* または *exhaustive focus* と呼ばれている(Erteschik-Shir 1997, Kiss 1998, Marandin 2011)。それに対して、(2) では動詞と主語の両方が新しい情報を表しており、主語だけではなく動詞も焦点に含まれる。さらにその内部では主語を重要な情報として提示するために倒置が用いられており、この焦点は *presentative focus* であって排他的解釈は伴わないと考えられている(Marandin 2011)。(1) と (2) のいずれも倒置された主語は焦点の範囲に包含されているものの、焦点の範囲や語用論的な特徴は異なっている。

従属節中の倒置に関しては、「主語の焦点化」という機能が当てはまるのか、という点が明らかではなかった。従属節中に情報構造が存在するかという問題について、第3章、第4章では、従属節内にも情報の重要度に基づく情報構造があることを主張

した。ただし、従属節内部にも焦点が存在しうるか、という点は議論の余地がある。第 2 章で述べたように、従属節中に情報構造が存在するかという問題については、3 つの立場に分かれており、従属節内には情報構造がないとする立場 (Mathesius 1975, Komagata 2003)、断定を表す従属節にのみ情報構造の存在を認める立場 (平塚 2022, Lahousse 2011, Marandin 2011)、そして全ての従属節に情報構造を認める立場がある (Partee 1996, Fuchs 1997)。

従属節中の倒置の分析においても、焦点の存在については立場が分かれている。Lahousse (2011) は、前提を表す従属節中には情報構造を認めていないが、Erteschik-Shir (1997) の f-structure の概念を引き継ぎ、トピックやコメントの内部にも焦点が存在すると考えている。また Marandin (2011) では、補文と関係節内の倒置は (2) の例と同様に、主語だけではなく動詞も焦点に含まれ、補文全体が広い焦点となりうることが示唆されている。他の先行研究においては、関係節や間接疑問の中の倒置された主語は「レマ化されている」「先行詞を同定するための寄与が大きい」と記述されてきた (Fuchs 1997, Le Querler 1997, 平塚 2002)。しかし、発話全体におけるレマと関係節内のレマの関連は明らかになっていない。さらに副詞節など、関係節や補文以外の従属節において、倒置された主語と焦点の関係については詳細に分析されていない。従属節中の主語を、発話における唯一の新しい情報として表すために、倒置を用いることが可能であるのかは検討されていない。

以上の問題点を踏まえ、本論における「焦点」と「焦点化」の定義を再掲し、分析方針を示す。

- (3) 焦点：発話時において、聞き手が既に知っていたり、当然と考えているであろう話し手が考えることに関して、発話によって伝えられる新しい情報を表す発話の部分を指す。
- (4) 主語の焦点化：倒置によって、動詞や他の補語は焦点に含まれず、主語のみを焦点として表すこと。

倒置によって主語が焦点化されているかを明確にするうえで、主語に加えて動詞句も焦点となる場合は「主語の焦点化」から除外する。そして、従属節中の倒置が「主語の焦点化」を主な機能としていると言えるか、検討していく。

まず 5.2 節で分析対象とする従属節と、主語の焦点化を担うか否かを調査する方法について述べる。そして、従属節内における主語のみが焦点となることは可能であるのか、正置の場合と倒置の場合について分析するため、5.3 節では、各従属節における主語の焦点化の可否について検討する。そして、従属節において倒置によって主語を焦点化できる場合は限定的であることを示す (5.4 節)。さらに、コーパスにおける統計的な結果から、従属節中の倒置の主な機能は主語の焦点化とは言えないことを主張する (5.5 節)。

5.2. 調査の概要

本節では、従属節内の倒置された主語が、発話における唯一の新情報となり、狭い焦点を担うことが可能かについて検討するために実施した倒置主語の焦点化のテストの調査の概要と、分析対象とする従属節の種類について述べる。

5.2.1. 従属節中の主語の焦点化テストの概要

本節では、従属節中の倒置された主語が焦点を担いうるのかどうかを分析するための方法について述べる。Marandin (2011) においては、焦点化の機能の証明として、疑問-応答のテストが用いられていたが、関係節や副詞節の内部の一要素について尋ねる疑問文を設定することはできないため、疑問-応答のテストを従属節中の要素に応用するには限界がある¹。したがって本論では、従属節内の倒置された主語が発話における狭い焦点であるかどうかを判断するために、Kiss (1998) の嘘テストを応用する。嘘テストは、A の発話に対して、B が A の発話の一部を間違いとして指摘する発話が容認されるか否かによって、A の発話の焦点部分を明らかにするというものである。B の発話が容認される場合、A の発話が断定を表し、B の発話が容認できない場合、A の発話は前提を表すと判断される。つまり、A の発話で断定されている情報

¹ 第2章で言及した通り Marandin (2011) では、補文中の倒置に関して、質問を設定するテストを行っている。(ia) の文脈を設定し、(ib) という場合には、(ia) の倒置よりも、(iib) の正置が好まれるが、(iic) の質問には倒置を用いた応答である (iia) の倒置が好まれるという結果が提示されている。

(i)

a. Une assistante sociale discute avec une patiente qui se plaint de ses problèmes avec ses enfants.

‘A social worker talks to a patient who complains about her problems with her children.’

b. Parmi tous vos problèmes, lequel devrait s’arrêter pour que vous soyez plus tranquille ?

‘Among your problems, which one should stop so that you could live more quietly?’

c. Quel changement dans votre environnement personnel vous ferait le plus plaisir ?

‘What change in your life would please you most?’

(ii)

a. Je voudrais que s’arrête [la brouille entre mes deux fils]_{Subject}

b. Je voudrais que [la brouille entre mes deux fils]_{Subject} s’arrête.

‘I would like that the quarrel between my two sons stops.’

(Marandin 2011: 331-332)

(ib) の質問であれば、応答の補文中の主語のみが新しい情報となり、主語が焦点となる。一方で、(iic) の質問では、補文全体が質問の答となり焦点を担う。しかし、Marandin (2011) では、それぞれ倒置と正置が選択された理由については考察されていない。

については、「それは違う」と反論することができる。前提の情報となっていることに対しては、反論をするような発話を続けると不自然と判断されるというテストである。Lahousse (2011) は嘘テストを、主節の倒置を対象として、倒置された主語が排他的解釈を伴うか否かを判断するために用いている。

(5) Focus identificatif exhaustif

A : C'était un chapeau que Marie a choisi pour elle-même.

'It was a hat that Marie picked for herself.'

B1 : Non, elle a également choisi un manteau.

'No, she picked a coat, too.'

B2 : Non, elle a choisi un manteau.

'No, she chose a coat.'

(Lahousse 2011: 172)

(6) Focus informationnel

A : Marie a choisi pour elle-même un chapeau.

'Mary picked herself A HAT'.

#B1 : Non, elle a également choisi un manteau.

'No, she picked a coat, too.'

B2 : No, she picked a coat.

'Non, elle a choisi un manteau.'

(*ibid.*)

B1 は、un chapeau「帽子」だけではなく un manteau「コート」も選んだ、という情報を追加する発話であり、(5) のように排他的解釈を伴う文脈でのみ、自然となると Lahousse (2011) は判断している。それに対して B2 は un chapeau「帽子」ではなく un manteau「コート」である、と修正を加える発話であり、この場合の un chapeau は情報の焦点 focus informationnel である。(5) の A の強調構文 C'est X que ... の X に当てはめられている un chapeau が A の発話における新情報であり、焦点となっていることを示している。本論文では、排他的解釈の有無は問題としないため、B1 のように情報の追加する発話で判断するのではなく、B2 の情報の訂正する発話を用いる。

また、Kiss (1998) や Lahousse (2011) の嘘テストでは、A の発話内の要素が焦点であるか否かを判断している。しかし、本研究の分析対象である従属節中の倒置における主語の焦点化の機能を検証するうえで、主語にのみ焦点があることを明確にする必要があるが、A の発話のみに着目しても A の発話の一部のみが焦点であるかは確認することができない。一方 B の発話の修正された情報は、B の発話における焦点と考えられるため、本研究では B の発話に着目する。以上を踏まえ、本論文では、A の発話に対して B が C'est faux. 'It's wrong.' と否定し、従属節中の倒置された主語の部分で修正を加えることが可能であるか、というテストを行う。B の発話における焦点を考えると、A の発話に対する修正の情報を担う部分が B の発話における唯一の新しい情

報となり、その要素が B の発話の焦点となる。(5) では、B の発話の修正情報を表す un manteau ‘a coat’ の部分が、A の発話に対する修正部分であり、B の発話における新しい情報であり、焦点となる。

倒置の問題に入る前に、例として、B の時を表す従属節中の dix ans が焦点となる場合を示す。

(7) A : Autrefois, Paul et sa famille déménageaient souvent pour le travail de son père. Ils ont emménagé à Pékin quand il avait treize ans.²

Lit. In the past, Paul and his family often moved for his father’s work. They moved to Beijing when he was thirteen.

B : C’est faux. Ils ont emménagé à Pékin quand il avait dix ans.

Lit. It’s wrong. They moved to Beijing when he was ten years old.

B の発話の quand 節中の dix ans 「10 歳」は、A の発話の文末にある treize ans 「13 歳」という情報に修正を加える部分である。B の発話において、dix ans が唯一の新情報であり、狭い焦点を担うと言える。

このテストを従属節中の倒置された主語に適用し、B の発話内の従属節中の倒置された主語が、その発話の焦点となるような文について容認度を調査する³。また、その焦点が倒置されることによるものであるかを明らかにするため、正置の場合との比較も行う。調査の結果として、倒置主語が狭い焦点を担うことができる場合は、主節に後置される副詞節に限られることを示す。次節では、このテストの分析対象とする、従属節の種類を示す。

5.2.2. 分析対象

本章の分析対象は、先行研究において焦点が現れえないとされていた非断定的な従属節中の倒置とする (Lahousse 2011)。非断定的な従属節とされていたのは、制限的關係節、動詞に接続法を用いる補文と間接疑問、時間を表す副詞節、比較を表す副詞節、目的を表す副詞節、sans que 節である。

(7) 制限的關係節の que 節

Paul a acheté le livre que lisait Marie.

Lit. Paul bought the book that was reading Mary.

² 本章の焦点のテストにおいては、作例を用いる。

³ インフォーマントとして、3名のフランス語母語話者（20代女性、20代男性2人、40代男性）を対象に調査を行った。

- (8) 接続法を用いる補文の *que* 節
 Alain décida d'attendre que rentre *Patrick*.
 Lit. Alain decided to wait that comes home *Patrick*.
- (9) 時間を表す *quand* 節
Quand est arrivé *Paul*, Jean commençait à dîner.
 Lit. When arrived *Paul*, Jean was starting to have dinner.
- (10) 比較を表す *comme* 節
 Marie voudrait voyager partout dans le monde, comme l'avaient fait *son père et son frère*.
 Lit. Marie would like to travel all over the world, as had done *her father and brother*.
- (11) 目的を表す *pour que* 節
Pour que puisse sortir *son chien*, Paul a ouvert la porte.
 Lit. So that could get out *his dog*, Paul opened the door.
- (12) *sans que* 節
 Le Premier ministre a terminé son mandat, sans que ne baisse *sa popularité*.
 Lit. The Prime Minister has completed his term, without that not lose *his popularity*.

補文中の倒置や、関係節中の倒置は、Marandin (2011) では EXTR-INV と PRES-INV に分類されている。PERM-INV の倒置された主語は狭い焦点を担うのに対して、EXTR-INV と PRES-INV の倒置は、主語と動詞を包含する節全体が焦点となるという言及がある⁴。しかし、各従属節の倒置が全て、EXTR-INV や PRES-INV に含まれ、焦点の範囲に主語だけではなく、動詞も含まれ広い焦点になるのか、という点については明確になっていない。他の先行研究においても、従属節中の倒置に関して、焦点の範囲が主語のみの場合があるかという問題については、考察されてこなかった (Lahousse 2011)。さらに、これらの制限的關係節、接続法を用いる補文、副詞節については、その内部に焦点を含みうるか、倒置によって主語を唯一の焦点とする機能があるかについても明らかにされていなかった。したがってこれらの従属節における倒置が焦点を担う場合があるか、検討する余地がある。

また関係節は先行詞となる名詞句が、主節の主語名詞句である場合や目的語名詞句である場合などがあり、主節における位置も様々である。副詞節に関しても、主節に前置される場合と主節に後置される場合があり、主節に前置された副詞節は前提を

⁴ “The fact that the informational solidarity between subject and verb afford EXTR-INV and PRES-INV has a direct impact on clauses: it limits their informational potential. They are either all focus or all ground. In other words, their informational structure is all in one piece: subject and verb together feed the focal or the ground part of the content of the whole sentence. Indeed, this is what is observed in actual discourses.” (Marandin 2011: 337)

表し、主節に後置された副詞節は断定を表す。したがって、本章では、関係節については主節内での位置を、副詞節については主節との位置関係を分類基準とし、それぞれの場合に倒置された主語が焦点となるかどうかを分析していく。

次節では、各従属節中の倒置に関して、前節で述べた焦点化のテストを適用した結果について考察を行う。そしてその結果として、従属節中の倒置によって主語のみが焦点化されるのは限定的であり、従属節中の倒置の主な機能は主語のみを焦点化することではないことを示す。

5.3. 従属節内の倒置された主語と焦点

5.3.1. 制限的關係節内の倒置主語

まず制限的關係節内の倒置された主語について狭い焦点を担うのか検討する。制限的關係節については、その先行詞の名詞句が主節のどの位置に現れるかによって、関係節内の倒置された主語の位置が異なり、焦点として認められる可能性も異なる可能性がある。主節の主語に係る制限的關係節の場合、関係節の後には主節の動詞や目的語などが後続するため、制限的關係節の倒置された主語が無標の焦点位置である文末を占めることはない。しかし、主節の直接目的語や間接目的語、状況補語の名詞句にかかる関係節である場合、関係節内の倒置主語は文末の焦点位置を担う可能性があるため、主語にかかる制限的關係節と、直接目的語にかかる制限的關係節について検討していく。

まず、主節の主語に係る制限的關係節中の倒置について、倒置された主語がその発話における唯一の新情報として、狭い焦点を担うのか検討する。(13)(14) はそれぞれ、主節の主語の定名詞句に従属する制限的關係節の *que* 節と *où* 節の中が倒置となっている例である。B1 は A の発話に対して、情報を修正する発話であり、A の発話の関係節中の主語のみ異なる情報にしたものである。B2 は B1 の倒置部分を正置の語順としたものである。

(13) A: Sophie, Jean et Paul ont fait chacun un gâteau. Aujourd'hui, ils les ont apportés et ils mangent des gâteaux ensemble. Le gâteau qu'a fait Jean plaît bien à Sophie.

Lit. Sophie, Jean and Paul each made a cake. Today they brought them and they are eating cakes together. The cake that made Jean is very pleasing to Sophie.

B1 : #C'est faux. Le gâteau qu'a fait Paul plaît bien à Sophie.

Lit. It's wrong. The cake that made Paul pleases Sophie.

B2 : #C'est faux. Le gâteau que Paul a fait plaît bien à Sophie.

Lit. It's wrong. The cake that Paul made pleases Sophie.

(14) A : Paul et Jean sont professeurs. L'université où travaille Paul se trouve juste à côté de la gare.

Lit. Paul and Jean are teachers. The university where works Paul is right next to the train station.

B1 : #C'est faux. L'université où travaille Jean se trouve juste à côté de la gare.

Lit. It's wrong. The university where works Jean is right next to the train station.

B2 : #C'est faux. L'université où Jean travaille se trouve juste à côté de la gare.

Lit. It's wrong. The university where Jean works is right next to the train station.

(13) は、A の「Sophie は Jean が作ったケーキが気に入った」という発話に対して、B1 は「Sophie は (Jean ではなく) Paul が作ったケーキが気に入った」という訂正の発話である。B1 の発話における新しい情報は、主語に係る制限的關係節中の主語 Paul のみである。B1 における焦点は Paul にあるが、この文脈においては容認不可と判断された。制限的關係節中の主語を発話の焦点として示す働きは倒置にはないと考えられる。(14) は A の「Paul が働いている大学は駅のすぐ隣である」という発話に対して、B1 の「(Paul ではなく) Jean が働いている大学」という修正の情報を提示している。しかし、この場合も B1 の発話は容認困難となり、B1 の発話における焦点として、制限的關係節中の主語を提示することはできないということが明らかである。さらに (13)(14) のどちらの場合も、B2 の制限的關係節中の語順を正置としても、この文脈においては容認不可となるため、語順に関わらず制限的關係節中の一要素を焦点とすることは困難であると考えられる。

次に、主節の直接目的語の定名詞句に従属する制限的關係節の例である。

(15) A : Marie et ses parents aiment bien lire. Mais Marie n'aime pas le livre que lisait son père.

Lit. Marie and her parents like to read. But Mary does not like the book that was reading her father.

B1 : #C'est faux. Elle n'aime pas le livre que lisait sa mère.

Lit. It's wrong. She doesn't like the book that was reading her mother.

B2 : #C'est faux. Elle n'aime pas le livre que sa mère lisait.

Lit. It's wrong. She doesn't like the book that her mother was reading.

主節の直接目的語に後続する制限的關係節においても、主語に後続する場合と同様の結果が得られた。A の「彼女の父親が読んでいた本」という発話の部分に対して、

B1 で「(父親ではなく) 母親が読んでいた本」と訂正する文脈では、B1 が容認不可と判断された。B2 の正置の場合も、この文脈においては容認できないという結果が得られた。各例の B の発話に含まれる関係節中の主語 *sa mère*、*Paul*、*Jean* は、A の発話を修正するために与えられる新情報であり狭い焦点を担うはずである。しかし、B1 と B2 のように定名詞句を修飾する制限的關係節中の主語に焦点を置くようにする場合、倒置か正置かに関わらず全ての例が、文法的には問題が無いが、この文脈に置かれると不自然な表現となる。

このように制限的關係節中の倒置された主語が文末の焦点位置を占めていても、発話の焦点として、唯一の新情報とすることはできない。節中の語順に関わらず、制限的關係節が前提を表す従属節であるという性質から、その内部の一要素を、断定の情報である焦点として表すと矛盾が生じるためだと考えられる。

これは (13)(14) のような主節が SVO の構文である場合だけではなく、焦点化の構文である強調構文 *C'est X que/qui ~ 'It is X that ~* の場合にも当てはまり、制限的關係節内の主語のみに狭い焦点を担わせることはできず、焦点は先行詞と制限的關係節を含めた名詞句全体になる。(13)(14)の例を強調構文に当てはめたものが (16)(17) である。統語構造上、B1'のように関係節中の主語のみを強調構文 *C'est X que/qui ~* の X に入れて焦点化することはできず、B3 と B4 のように関係節を含む名詞句全体を X に当てはめる必要がある。

(16) A: *Sophie, Jean et Paul ont fait chacun un gâteau. Aujourd'hui, ils les ont apportés et ils mangent des gâteaux ensemble. Le gâteau qu'a fait Jean plaît bien à Sophie.*

Lit. *Sophie, Jean and Paul each made a cake. Today they brought them and they are eating cakes together. The cake which made Jean is very pleasing to Sophie.*

B1': **C'est faux. C'est Paul que le gâteau qu'a fait plaît bien à Sophie.*

Lit. *It's wrong. It's Paul that the cake which made is very pleasing to Sophie.*

B3 : *C'est faux. C'est le gâteau qu'a fait Paul qui plaît bien à Sophie.*

Lit. *It's wrong. It's the cake which made Paul that is very pleasing to Sophie.*

B4 : *C'est faux. C'est le gâteau que Paul a fait qui plaît bien à Sophie.*

Lit. *It's wrong. It's the cake which Paul made that is very pleasing to Sophie.*

(17) A : *Paul et Jean sont professeurs. L'université où travaille Paul se trouve juste à côté de la gare.*

Lit. *Paul and Jean are teachers. The university where works Paul is right next to the train station.*

B1': **C'est faux. C'est Jean que l'université où travaille se trouve juste à côté de la gare.*

Lit. It's wrong. It's Jean that the university where works is right next to the train station.

B3 : C'est faux. C'est l'université où travaille Jean qui se trouve juste à côté de la gare.

Lit. It's wrong. It's the university where works Jean, which is right next to the train station.

B4 : C'est faux. C'est l'université où Jean travaille qui se trouve juste à côté de la gare.

Lit. It's wrong. It's the university where Jean works, which is right next to the train station.

(16)の que 節においても、(17)の où 節においても、B3 と B4 のように先行詞と関係節を強調構文の X に当てはめると容認可能となる。強調構文でも B1' のように、制限的關係節中の一要素を焦点化することは不可能であり、焦点は先行詞と関係節を含む名詞句全体となることが分かる。

直接目的語に係る制限的關係節においても、同様である。

(18) A : Marie et ses parents aiment bien lire. Mais Marie n'aime pas le livre que lisait son père.

Lit. Marie and her parents like to read. But Mary does not like the book that was reading her father.

B1' : *C'est faux. C'est sa mère qu'elle n'aime pas le livre que lisait.

Lit. It's wrong. It's her mother that she doesn't like the book that was reading.

B3 : C'est faux. C'est le livre que lisait sa mère qu'elle n'aime pas.

Lit. It's wrong. It's the book that was reading her mother that she doesn't like.

B4 : C'est faux. C'est le livre que sa mère lisait qu'elle n'aime pas.

Lit. It's wrong. It's the book that her mother was reading that she doesn't like.

B1' のように制限的關係節内の主語のみを抜き出すことはできないが、B3 と B4 のように強調構文に主節の直接目的語とそれにかかる関係節全体を当てはめると、関係節内の主語の位置に関わらず、いずれも自然な発話となる。強調構文の場合も、焦点は先行詞を含む関係節全体となる場合があるものの、制限的關係節内の主語のみを焦点とすることはできない。つまり強調構文を用いて制限的關係節全体を焦点とすることは可能であるが、制限的關係節中の主語の倒置によって、節中の主語のみを焦点とすることは困難である。

以上の結果から、制限的關係節中の語順が倒置であっても正置であっても、制限的關係節中の一要素のみが狭い焦点を担うことはできないと言える。制限的關係節の性質として、制限的關係節は前提を表し、旧情報を表すという性質を持つため、前提

の情報を表す節と、発話における唯一の新情報である焦点は性質が矛盾するという点が影響していると考えられる。前提を表す制限的關係節の内部の一要素を焦点とすることができないため、制限的關係節内の倒置主語のみも焦点を担うことができない。したがって、制限的關係節内の倒置には主語の焦点化の機能はないと言える。

5.3.2. 接続法を用いる補文と間接疑問の主語と焦点

次に、接続法を用いる補文と間接疑問の中の倒置について考察する。動詞に接続法が用いられる補文は、その節の内容の真偽について非断定的に表す。また、間接疑問が表す命題に関しても、話し手はその節の内容を断定するわけではないため、非断定的な従属節である。これらの非断定的な補文と間接疑問の中の主語のみが焦点となりうるか検討する。

まず、接続法を用いる補文を対象として、(19) についてインフォーマント調査を行った。

(19) A : Alain décida d'attendre que rentre Patrick.

Lit. Alain decided to wait that come home Patrick.

B1 : (#) C'est faux. Il décida d'attendre que rentre Robert.

Lit. It's wrong. He decided to wait that come home Robert.

B2 : (#) C'est faux. Il décida d'attendre que Robert rentre.

Lit. It's wrong. He decided to wait that Robert come home.

B1の補文中の主語 Robert が、Aの発話に対する修正の情報であり、B1の発話の焦点である。この補文の場合、インフォーマントによって容認可能という判断と、この文脈では不自然であるという意見に分かれた。完全に容認不可能というわけではないのかもしれないが、やや不自然に感じられる表現であると考えられる。この例のように補文中の主語が焦点を担う文脈とすると、容認度は低い。動詞に直説法が用いられている場合は、話し手はその事態を事実として表し、その節は断定を表す。一方で接続法は話し手の断定を表さない形である。補文中の動詞が接続法になっている場合、その発話としての焦点は補文の中にはなく、主節の直説法で表された部分が断定の箇所となる。(19)の例では、主節 *il décida* の部分が焦点となるため、断定を表さない補文内に焦点が現れにくいと考えられる。

また、下の例のような *il faut que* 節では、B1のような倒置でも、B2の正置の語順でも容認可能であるという結果が得られた。

(20) A: Nous ne pouvons pas commencer le dîner. Il faut que vienne M. Martin.

Lit. We can't start the diner. It's necessary that comes Mr. Martin.

B1: C'est faux. Il faut que vienne Mme. Martin.

Lit. It's wrong. It's necessary that comes Mrs. Martin.

B2 : C'est faux. Il faut que Mme. Martin vienne.

Lit. It's wrong. It's necessary that Mrs. Martin comes.

(20) の B1 や B2 のように、接続法を用いる補文では、焦点が主語のみにあっても容認可能である場合がある。接続法を用いる補文においては、節中の一要素のみが新情報となり焦点を担う文脈は、完全に容認可能というわけではないが、主節の表現によっては容認可能になる場合があることが明らかになった。ただし (20) でも、補文内の語順に関しては倒置が好まれるわけではなく、正置も倒置も可能であることから、倒置に焦点化の機能があるとは言えない。

一方、動詞が直説法で用いられる間接疑問文の場合は、主語が焦点として働きうる。

(21) A: (Il y a une voiture et une machine pour la réparer.) Je comprends bien comment fonctionne cette machine.

Lit. (There is a car and a machine to fix it.) I understand how works this machine.

B1: C'est faux ! Tu comprends bien comment fonctionne cette voiture.

Lit. It's wrong! You understand how works this car.

B2 : (#) C'est faux ! Tu comprends bien comment cette voiture fonctionne.

Lit. It's wrong! You understand how this car works.

(21) の B1 は A の *cette machine* を修正する情報として、主語の *cette voiture* を提示している。この文脈において B1 の発話は自然であるという結果が得られた。*comment* に導かれる間接疑問文の場合、従属節内の主語が焦点となっても問題はなく、自然な表現となる。このことから間接疑問では、疑問の内容の中の一つの要素に焦点を当てることが可能と言える。間接疑問は非断定的な従属節であるため焦点と相いれないと予測できるが、動詞には直接語法を用いることから、主節と同様に焦点を含みうると考えられる。また、倒置の語順は容認可能であるのに対して、B2 の正置の語順は若干不自然であるという結果となったことから、間接疑問では主語が焦点を担うとき、倒置の語順が好まれると言える。第3章で述べたように、倒置が用いられる頻度が比較的高いことに加え、直接疑問の場合にも倒置が起こりうるため、主語が焦点を担う場合も倒置の容認度が高いと推測できる。

5.3.3. 副詞節中の倒置主語と焦点

5.3.3.1. 主節に前置された副詞節と焦点

本節では、副詞節中の倒置された主語が焦点を担うるかについて分析する。まず、時間を表す副詞節に関して検討する。第3章、第4章でも触れたが、時間を表す副詞節を導く *quand* 節の場合、主節よりも前方に来る場合は前提を表し、主節の後方にある場合は断定の範囲に含まれる場合がある。

(22) a. *Quand j'ai quitté la France, j'avais vingt ans.*

Lit. *When I left France, I was twenty years old.*

b. *J'avais vingt ans quand j'ai quitté la France.*

Lit. *I was twenty when I left France.*

(22a) では、「フランスを離れた時、私は二十歳であった」と、*quand* 節は主節が表す事態が発生した時点を表している。この *quand* 節は、聞き手が既に知っている情報（前提）として表されている。(20b) は、「私が二十歳の頃、フランスを離れた」という意味になり、この発話の断定は *quand* 節が担っている。(20b) のような *quand* 節を、逆従属の *quand* 節という (岩田 1997)。

このように、主節よりも前に置かれる場合は前提、主節の後ろに置かれる場合は断定を表すというように、主節との位置関係に差異がある場合がある。本節では、まず主節に前置された副詞節中の主語について考察する。時間を表す *quand* 節が主節に前置されている場合について、倒置された主語が焦点を担うるか検討する。

(23) A : *Quand est arrivé Paul, Jean commençait à dîner.*

Lit. *When arrived Paul, Jean was starting to have dinner.*

B1 : #*C'est faux ! Quand est arrivé Marie, Jean commençait à dîner.*

Lit. *It's wrong! When arrived Marie, Jean was starting to have dinner.*

B2 : #*C'est faux ! Quand Marie est arrivé, Jean commençait à dîner.*

Lit. *It's wrong! When Marie arrived, Jean was starting to have dinner.*

B1 では、主節に前置された *Quand* 節内の主語 *Marie* が、A の発話に対する修正を加える情報であり、B1 の発話の焦点は主語にある。しかし、B1 の倒置の場合も、B2 の正置の場合も、この文脈においては不自然であるという結果が得られた。主節に前置された *quand* 節は、主節の断定の内容が成立する状況を前提の情報として表すため、その前提の情報の中の一要素に発話の焦点を担わせることはできないと考えられる。したがって、主節に前置された時間を表す副詞節の中の倒置には、主語の焦点化の機能はないと言える。

次に比較を表す *comme* 節の場合であるが、*quand* 節と同様、主節に前置される場合、節内の一要素を焦点とすることができないという結果になった。

- (24) A : Comme l'avaient fait son père et son frère, Marie voudrait voyager partout dans le monde.
 Lit. As had done her father and brother, Marie would like to travel all over the world.
- B1 : #C'est faux ! Comme l'avait fait sa mère, elle voudrait voyager partout dans le monde.
 Lit. It's wrong! As had done her mother, she would like to travel all over the world.
- B2 : #C'est faux ! Comme sa mère l'avait fait, elle voudrait voyager partout dans le monde.
 Lit. It's wrong! As her mother had done, she would like to travel all over the world.

A の「父親と兄」の部分を変更する情報を、comme 節内の主語とした場合、B1 の倒置も B2 の正置も不自然であると判断された。主節に前置された comme 節の場合も、quand 節と同様、節内の主語のみを焦点とすることはできないと言える。comme 節は聞き手が想起可能な前提の情報を伝達する役割を担うため、その内部の一要素を焦点とすると矛盾がおきるため容認されないと考えられる。

次に、目的を表す pour que 節であるが、quand 節や comme 節と同様な結果が得られた。

- (25) A : Pour que puisse sortir son chien, Paul a ouvert la porte.
 Lit. So that could get out his dog, Paul opened the door.
- B1 : #C'est faux. Pour que puisse sortir son chat, Paul a ouvert la porte.
 Lit. It's wrong. So that could get out his cat, Paul opened the door.
- B2 : #C'est faux. Pour que son chat puisse sortir, Paul a ouvert la porte.
 Lit. It's wrong. So that his cat could get out, Paul opened the door.

B1 と B2 の発話の焦点は、A の発話の son chien を訂正する情報である、pour que 節の主語 son chat であるが、この文脈では容認困難と判断された。pour que 節においても、節内の主語を焦点化することができないと言える。

次の sans que 節に関しては、節内の主語のみを焦点とする文脈が、容認可能という意見と不自然であるという意見に分かれた。

- (26) A : Sans que ne baisse sa popularité, le Premier ministre a terminé son mandat.
 Lit. Without that declines his popularity, the Prime Minister has completed his term.

B1 : (#) C'est faux ! Sans que ne baisse le PIB, le Premier ministre a terminé son mandat.

Lit. It's wrong! Without that declines the GDP, the Prime Minister has completed his term.

B2 : (#) C'est faux ! Sans que le PIB ne baisse, le Premier ministre a terminé son mandat.

Lit. It's wrong! Without that the GDP declines, the Prime Minister has completed his term.

A の発話の *sa popularité* を修正する情報を、*sans que* 節の主語として、B1 と B2 の発話の唯一の新情報とした場合、容認可能であるという意見と不自然であるという意見の両方があった。完全に主語を焦点とすることが可能とは言えない。また、倒置と正置の場合で容認度に差はなかったため、倒置によって主語を焦点化することができるとは考えにくい。

以上、副詞節中の焦点について考察したが、主節に前置された副詞節は、節内の主語のみが狭い焦点となることを容認できない傾向を示した。主節の前に置かれた時間を表す副詞節は、主節が表す事態が成立する場面を事前に設定する役割を果たし、前提の情報を表す。pour que 節や comme 節、sans que 節も、主節の前に置かれる場合、先行文脈に含まれる情報をまとめた情報であるなど、前提を表す節である (Lambrecht 1994)。制限的關係節と同様、前提を表す従属節内と、新しい情報である狭い焦点が矛盾する。したがって、主節に前置された副詞節内の主語が狭い焦点を担うことができず、節内の倒置には主語の焦点化の機能はないと考えられる。

また、主節に前置されているわけではないが、比較を表す plus adj. que 型の従属節中の主語も狭い焦点を担えない。

(27) A : Jean et Marie sont devenus amis avec Paul. Paul portait de vieux vêtements.

Mais Paul est plus riche que ne le pense Jean.

Lit. Jean and Marie became friends with Paul. Paul wore old clothes. But Paul is richer than thinks Jean.

B1 : #C'est faux ! Paul est plus riche que ne le pense Marie.

Lit. It's wrong! Paul is richer than thinks Marie.

B2 : #C'est faux ! Paul est plus riche que Marie ne le pense.

Lit. It's wrong! Paul is richer than Marie thinks.

B1 と B2 の比較を表す que 節中の主語 Marie が発話の焦点となるような文脈では、倒置の B1 も正置の B2 も容認困難となるため、plus adj. que 節中の倒置された主語だけが狭い焦点を担うことはできない。文末の焦点位置にあるにもかかわらず、倒置された主語が plus adj. que 節内で狭い焦点を担うことができない原因として、この従属節

が断定部分に含まれていないことが考えられる。plus adj. que 節では、比較級の plus、moins の要素が、「より～である」「より～でない」という形容詞が当てはまる程度を表す部分が焦点となる。que 以下の比較の基準となる箇所は、前提的な情報である。したがって、比較の基準を表す que ne le pense Marie の一要素が焦点となることができないため、節内倒置された主語は焦点を担うことはできず、主語の焦点化の機能を持たないと言える。

5.3.3.2. 主節に後置された副詞節の主語と焦点

次に、主節に後置された副詞節内の主語が焦点を担えるかについて検討する。主節に後置された場合、従属節中の主語が狭い焦点を担っていても自然という結果が得られた。まず時間を表す副詞節の例を見る。(28) が quand 節、(29) が avant que 節の例である。

(28) A : Jean commençait à dîner, quand est arrivé Paul.

Lit. Jean was starting to dine when arrived Paul.

B1 : C'est faux. Il commençait à dîner, quand est arrivée Marie.

Lit. It's wrong. He was beginning to dine when arrived Marie.

B2 : (#) C'est faux. Il commençait à dîner, quand Marie est arrivée.

Lit. It's wrong. He was beginning to dine when Marie arrived.

(29) A : Jean a fait la lessive, avant que ne rentre sa mère.

Lit. Jean did the laundry before came home his mother.

B1 : C'est faux ! Jean a fait la lessive, avant que ne rentre son père.

Lit. It's wrong! Jean did the laundry before came home his father.

B2 : (#) C'est faux ! Jean a fait la lessive, avant que son père ne rentre.

Lit. It's wrong! Jean did the laundry before his father came home.

(28) では、B1 の主節に後置された quand 節の主語 Marie が、発話における唯一の新情報として焦点を担っている。(29) では B1 の avant que 節の主語 son père が焦点を担っている。どちらの例においても、B1 の倒置の語順が容認可能であるのに対して、B2 の正置の語順であると不自然であるという意見が得られた。主節に後置された quand 節と avant que 節では、節中の主語を焦点とすることが可能であり、倒置によって主語を焦点として示しうるということが明らかになった。副詞節が主節の後ろの断定の範囲に置かれることによって、副詞節内に焦点が容認されうるようになると考えられる。

主節の後に置かれた比較を表す comme 節でも、同様の傾向がみられる。

(30) A : Marie voudrait voyager partout dans le monde, comme l'avaient fait son père et son frère.

Lit. Marie would like to travel all over the world, as had done her father and brother.

B1: C'est faux ! Elle voudrait voyager partout dans le monde, comme l'avait fait sa mère.

Lit. It's wrong! She would like to travel all over the world, as had done her mother.

B2 : (#) C'est faux ! Elle voudrait voyager partout dans le monde, comme sa mère l'avait fait.

Lit. It's wrong! She would like to travel all over the world, as her mother had done.

B1 の主語 *sa mère* が発話の焦点であり、B2 の正置よりも容認度が高い。comme 節でも、主節の後に置かれることによって、その節の内容を断定的に表すことが可能になり、文末に発話の唯一の新情報である焦点として、主語を提示することができるようになると思われる。

また、(31) の目的を表す副詞節と、(32) の *sans que* 節でも、節内の主語のみを焦点とすることが可能であることが分かる。

(31) A: Paul habite avec un chien et un chat. Paul a ouvert la porte pour que puisse sortir son chien.

B1 : C'est faux ! Paul a ouvert la porte pour que puisse sortir son chat.

B2 : C'est faux ! Paul a ouvert la porte pour que son chat puisse sortir.

(32) A : Le Premier ministre a terminé son mandat sans que ne baisse sa popularité.

Lit. The Prime Minister has completed his term without that declines his popularity.

B1 : C'est faux ! Le Premier ministre a terminé son mandat sans que baisse le PIB.

Lit. It's wrong! The Prime Minister ended his term without that declines the GDP.

B2 : C'est faux ! Le Premier ministre a terminé son mandat sans que le PIB baisse.

Lit. It's wrong! The Prime Minister ended his term without that the GDP declines.

(31) の *pour que* 節内の主語 *son chat* と、(32) の *sans que* 節内の主語 *le PIB* は、それ

ぞれ A の発話に対する訂正の情報であり、発話の焦点を担う。どちらの例も主節に前置されると容認困難であったが、主節の後の位置に置かれると、B1 のような倒置も、B2 のような正置も容認可能となる。pour que 節も sans que 節も非断定的な従属節ではあるが、主節に後置されることで従属節全体が断定の領域に含まれ、その節内の一要素を焦点とすることが可能となると考えられる。ただし、B2 の正置も自然と判断されていることから、倒置が主語の焦点化の役割を担っているとは言えない。

以上のように主節の後に置かれた副詞節内の主語が狭い焦点となっている場合、B1 の倒置の語順の容認度が高くなり、自然な表現となる。主節に前置された副詞節は、主節を導入する前提的な節であったのに対して、主節に後置される副詞節は、断定の中に含まれるため、断定と焦点という性質が矛盾せず、節内の主語のみが焦点を担うことが可能となる。そして時間を表す quand 節と比較を表す comme 節は主節の後に置かれると、正置の語順である B2 は容認度が下がることから、主語が焦点を担う場合は、正置の語順よりも、焦点位置である節末が好まれると考えられる。ただし、その他の副詞節では、正置でも容認度に差がないため、倒置によって主語を焦点化できる場合は限定的と言える。

5.4. 焦点と倒置の頻度

本節では、従属節内の焦点の容認の可否と倒置の頻度を検討する。前節では、前提や非断定を表す従属節中の主語が焦点を担いうる場合があることを明らかにした。従属節のうち、制限的關係節、plus adj. que 節、主節に前置された副詞節では、従属節内の主語のみを焦点とすることは不可能である。補文内の動詞が接続法である場合も、節内の主語のみを焦点とできる場合は限られている。一方で、従属節中の主語のみが焦点となることが容認されるのは、主節に後置された副詞節と間接疑問文に限られる。一部の従属節では節内の狭い焦点が認められると言えるが、制限的關係節などの従属節中には狭い焦点は認められないうえ、正置でも主語が焦点となりうるため、主語の焦点化が従属節中の倒置の主要な機能とは考えにくい。

副詞節に関しては、主節に対して前置されるか、後置されるかによって、主語が焦点を担いようかが異なる。節内の主語が焦点として認められるのは、主節に後置された副詞節である。副詞節内での正置と倒置のそれぞれについて、副詞節が主節に前置されている例と後置されている例の割合を調査した。用いたデータは第3章で収集したコーパスデータであり、quand、lorsque、avant que、pour que、sans que で導かれる副詞節に関して調査した結果が表7である⁵。

⁵ quand 節、lorsque 節の正置の例は多数あるため、一部の例を抽出して分析した。N は例数を表す。

	正置 (SV)		倒置 (VS)	
	主節の前	主節の後	主節の前	主節の後
quand	55% (N=281)	45% (N=229)	41% (N=39)	59% (N=56)
lorsque	51% (N=162)	49% (N=160)	30% (N= 9)	70% (N=21)
avant que	26% (N=43)	74% (N=122)	21% (N=4)	79% (N=15)
pour que	6% (N=22)	94% (N=350)	10% (N=3)	90% (N=27)
sans que	16% (N=14)	94% (N=71)	0% (N=0)	100% (N=11)

表 7. 副詞節と主節の位置関係と正置 (SV) と倒置 (VS) の割合

主節の後に置かれる割合は、quand 節では正置が 45%であるのに対して、倒置が 59%である。lorsque 節では、正置が 49%、倒置が 70%、avant que 節では正置が 74%、倒置が 79%である。pour que 節では主節の後に置かれる割合は正置が 94%、倒置が 97%であり、有意差はない。sans que 節については倒置の例は全て、主節の後に置かれていた。quand 節、lorsque 節、avant que 節では、倒置のほうが主節に後置された副詞節で用いられている割合が高く、正置は主節に前置された副詞節の割合が高いことが分かる。倒置の例では主節に後置されている割合が、正置の語順の場合よりも若干高い傾向がある。正置の場合に比べ、主語が焦点を担いうる場合に倒置が用いられやすい傾向の現れであると考えられる。したがって、副詞節中の倒置には、主語を焦点として表す役割があると言える。

ただし、quand 節と lorsque 節の正置と倒置の間で有意差はあるものの⁶、主節に前置される場合もあることが明らかであり、約 4 割の倒置の例が、主節に前置されている。倒置は主語が焦点と認められうる副詞節に限られるわけではない。むしろ主語が焦点として認められない位置にある副詞節であっても、倒置が問題なく用いられていると考えられる。第 3 章の各従属節中の倒置の頻度を示した表 1 を参照すると、制限的關係節中の倒置の割合は約 4 割であり、他の従属節に比べて倒置の頻度が高いということが分かる。間接疑問の倒置の割合は約 25%であり、制限的關係節よりも倒置の頻度が低いと言える。また、副詞節中の倒置の割合は接続詞によるものの、倒置の割合が 1 割に満たない接続詞が多い。主節に後置された副詞節においては、主語の焦点化という倒置の要因が働きうるが、限定的であり、主語の焦点化が倒置の主な機能ではないと考えられる。むしろ倒置主語が焦点を担うことが不可能である制限的關係節で、倒置が多用されることから、倒置は従属節内の主語を焦点とするために用いられているのではないと言える。

第 3 章と第 4 章で考察した通り、従属節中の倒置では主語名詞句の担う情報の重要度が、動詞よりも高くなる場合に倒置が用いられている。主節に後置された副詞節など、主語のみが焦点と認められる場合は、明らかに主語の重要度が高い。一方で制限

⁶ 有意水準 5%、quand 節 : $\chi^2=7.767144357$ 、 $p=0.00532050955$ 。

lorsque 節 : $\chi^2=4.531989113$ 、 $p=0.03326692941$ 。

的關係節では、主語が焦点を担うことはなく、内部の情報構造も緩やかである。主語が焦点のような語用論的に際立ちのある情報ではなくとも、動詞と比較してより重要な情報と判断できる場合には倒置が可能となるため、焦点を含みうる従属節よりも倒置が起こりやすくなると考えられる。

5.5. 従属節中の倒置された主語と対比

5.3 節では、倒置主語が焦点を担いうる従属節は、主節に後置された副詞節や間接疑問文など、一部の従属節に限られ、その他の従属節では倒置主語のみが焦点を担うことはないことを示した。主節の倒置に関しては、倒置された主語は焦点であると言われているが、大半の従属節中の倒置された主語は、その文における焦点とは言えないことが明らかとなった。また、5.4 節で示したように、倒置は主節に前置された従属節の中でも起こる。断定ではない部分に焦点があると言うことはできないため、倒置の機能については焦点化以外の説明が必要となる。その説明とは第3章及び第4章で述べた「情報の重要度」である。本節では、情報の重要度を担う要素のうち、主語の対比的意味の有無に応じて倒置と正置の選好に差が見られるかどうかを調査する。

対比が含意されている要素が持つ情報の重要度は高いため、従属節中の主語に対比が含意されている場合について、倒置が容認されるか、倒置が好まれるか考察する余地がある。本節で考察の対象とするのは、制限的關係節、時間・比較・目的を表す副詞節、*sans que* 節、接続法を用いる補文とする。これらの従属節において、主語の指示対象と対比が含意される文章を作例し、倒置が好まれるかどうかのインフォーマント調査を行った。

各従属節の例を順に検討していく。(33) は主節の主語を修飾する制限的關係節の中で主語が倒置されている例、(34) は主節の目的語を修飾する制限的關係節の中で倒置となっている例である。

(33) Il était une fois un prince qui adorait les gâteaux. Un jour, il fit venir au château deux pâtisseries, Patrick et Alain. Il fit faire à chacun un gâteau pour choisir le pâtissier royal. Le gâteau que fit Patrick lui plut beaucoup, mais malheureusement, le gâteau que fit Alain ne l'attira pas.

Lit. Once upon a time there was a prince who loved cakes. One day, he brought two pastry chefs, Patrick and Alain, to the chateau. He made everyone a cake to choose the royal pastry chef. The cake that made Patrick pleased him very much, but unfortunately, the cake that made Alain did not appeal to him.

(34) Il a beaucoup aimé le gâteau qu'a fait Patrick.

Lit. He really liked the cake that made Patrick.

これらの下線部の制限的關係節において、倒置された主語 Patrick は Alain と対比されている。これらの例では、下線部の制限的關係節内を正置とするよりも、倒置が自然であるとインフォーマントによって判断された。(33) の例では Patrick と Alain を対比する表現 (pas Alain) を挿入し、「Le gâteau que fit Patrick, pas Alain, lui plut beaucoup」と言える。対比の文脈が明らかであるとき倒置が好まれるという傾向は、制限的關係節が主節の直接目的語にかかるときにも観察される。(34) でも正置より倒置の方が好まれる表現であり、「le gâteau qu'a fait Patrick, pas Alain」としても自然である。このように、制限的關係節内の主語に対比が含意されている場合、節内の主語が重要な情報となり、倒置の容認度は高くなる。

次に動詞に接続法を用いる補文と副詞節について考察する。(35) が時を表す副詞節の quand 節、(36) が比較を表す plus ... que 節、(37) が接続法を用いた補文の例である。これらの従属節においても、制限的關係節の場合と同様に、正置よりも倒置の方が自然と判断された。

- (35) Il était une fois un prince nommé Louis, qui aimait inviter ses amis. Un jour, il invita le matin le prince du pays de l'ouest, Michel, et l'après-midi, le prince du pays de l'est, Robin. Quand arriva Michel, Louis était prêt, mais quand arriva Robin, Louis était en train de s'habiller.

Lit. Once upon a time there was a prince named Louis, who liked to invite his friends over. One day he invited the prince of the western country, Michel, in the morning, and in the afternoon, the prince of the eastern country, Robin. When arrived Michel, Louis was ready, but when arrived Robin, Louis was getting dressed.

- (36) Robin et Paul ont des images différentes des Japonaises. En fait, les Japonaises sont plus actives qu'imaginait Robin.

Lit. Robin and Paul have different images of Japanese women. In fact, the Japanese are more active than imagined Robin.

- (37) (あるところにアラン、パトリック、ロベールという3人の勇者がおり、共に暮らしていた。ある日、パトリックとロベールが別々に出かけているとき、魔物が村に近づいているという知らせが届いた。)

Alain ne partit pas tout de suite, il décida d'attendre que rentre Patrick. Patrick était le plus fort des trois, et Robert était plus faible qu'Alain.

Lit. Alain did not leave right away, he decided to wait that come home Patrick. Patrick was the strongest of the three, and Robert was weaker than Alain.

各例の下線部の従属節における倒置は自然な表現であるという調査結果が得られた。(35) は Michel と Robin の対比、(36) は Robin と Paul の対比、(37) は Patrick と Robert の対比となっている。各例の従属節内の主語に対比表現を付加し、「Michel, pas

Robin 》、「Robin, pas Paul 》、「Patrick, pas Robert 》とすることが可能である。これらの例では、正置よりも倒置の容認度が高く、特に倒置された動詞が (36) のように先行文脈から推測可能である場合、正置よりも倒置が強く好まれる。

以上に示した通り、倒置主語が対比的な文脈にあつて、重要な情報である場合、時間を表す副詞節、比較を表す副詞節、補文においても、倒置の容認度は高くなると言える。以上に挙げた制限的關係節や副詞節、接続法を用いる補文においては、節内の主語が焦点を担うことはできない。しかし、主語が対比を含意している場合など、節内における重要な情報を担う場合、その主語を節末に置こうとするために倒置の語順が選択されうると考えられる。

5.6. まとめ

本章では、先行研究では前提を表す従属節として考えられ、節内に焦点が存在しうるかどうかは明確ではなかった従属節について、嘘テストを用いて、前提を表す従属節内の一つの要素が焦点となりうるか分析を行った。5.3 節の分析の結果として、主節に後置された副詞節と間接疑問以外では節内の主語を狭い焦点とすることができないことを示した。制限的關係節は、先行詞の指示対象の同定に必要な前提を表し、この關係節を含む発話全体における断定の対象は關係節内ではなく、主節内にあるという性質を持つ。したがって、制限的關係節内に狭い焦点がくることはない。節自体が持つ前提と節内の狭い焦点が矛盾するからである。補文では、節内の動詞が接続法であると、従属節の内容が事実として表されるのではなく、補文を導入する主節の動詞が断定を表すため、補文内の主語が焦点にはならない。間接疑問も節内容を非断定的に表す従属節ではあるが、直説法を用いる従属節であるため、接続法を用いる補文よりも主節への従属度が低いため、焦点が認められうると考えられる。また、副詞節は、主節の前に置かれたとき、主節が表す事態が成り立つための前提となるような状況を表す。このとき発話全体における狭い焦点は主節にあるため、副詞節内の焦点は容認されにくい。一方、副詞節が主節の後に置かれると、主節の断定の範囲、つまり新しい情報として伝えられる範囲に含まれるため、その内部に焦点が認められる場合がある。このように多くの従属節において、倒置された主語は焦点を担わないことを明らかにした。

また、焦点が認められる従属節で主語が焦点となっている場合にも、倒置ではなく正置が可能である場合があった。さらに、副詞節に関しては、倒置の中では主節に後置される場合が正置よりも多いが、前置された副詞節でも問題なく倒置が用いられている。そして制限的關係節など主語が焦点とならない従属節において倒置が多用される。以上のことから、倒置の主な機能は主語の焦点化ではないと言える。

一方で、5.5 節で示したように、主語に対比が含意された文脈がある場合のように、主語が焦点ではないが重要度が高い情報とみなされる場合、倒置は強く好まれる。こ

れは、制限的關係節や、主節に前置された副詞節にも当てはまることを明らかにした。焦点のように発話の新情報ではないが、その節内において主語の情報の重要度が高くなると、その主語を節末に置こうとする傾向があることを示した。

第6章 結語

6.1. 本論文のまとめ

6.1.1. 各章の概括

本論文では、フランス語の従属節中の倒置について、情報構造上の概念である「情報の重要度」と「焦点」の観点から考察を行った。本節では、第5章までの内容をまとめたうえで、分析の総括を行う。

第2章で、本論における「情報の重要度」と「焦点」の定義を提示し、情報の重要度と倒置に関連する主語や動詞句の特徴について、本論における考え方を示した。倒置に影響すると考えられる特徴として、主語名詞句の長さ、定性、有生性、対比の含意の有無、否定や限定がかかる要素、動詞句の意味内容の希薄さ、先行詞との意味的なつながり、動詞の法や時制、その他の補語の有無を挙げた。

第3章では、制限的關係節、非制限的關係節、補文、間接疑問、時間・比較・目的・理由・譲歩を表す副詞節、*sans que* 節を対象として、接続詞ごとに倒置の頻度を明らかにした。その結果として、最も倒置の頻度が高い従属節は間接疑問の *où* 節や、比較を表す *comme* 節であり、従属節のカテゴリーでは制限的關係節における倒置の割合が高いことを示した。それに対して倒置が起きにくい従属節では、譲歩を表す副詞節の *bien que* 節と *même si* 節では倒置の例が抽出されず、理由を表す副詞節も、倒置の例数が少数で倒置の頻度も1%であった。さらに、第2章で挙げた倒置に関連する主語、動詞句、その他の補語の各特徴が、倒置の例にどのように現れているか分析した結果として、各特徴により倒置を促す程度や倒置を妨げる程度が異なることを示した。

第4章は従属節中の場所句倒置（前置詞句・動詞・主語の語順）を分析対象とし、倒置の頻度や情報の重要度の観点から考察を行った。従属節中の前置詞句が節頭にある場合と、節頭でない場合のそれぞれの倒置の頻度を比較すると、前置詞句が節頭に置かれている場合の方が、倒置の頻度が高い傾向がある。例えば場所句の前置がない場合、時間や目的を表す副詞節の倒置の割合は10%未満であるが、場所句が前置されると倒置が40%~50%を占める。また、英語の場所句倒置は主節現象であり、主節現象は断定を表す従属節に限られると考えられていたが (Hooper & Thompson 1973)、フランス語の場所句倒置は断定を表す従属節に限られず、前提や非断定を表す従属節の中でも場所句倒置が起こることを示した。そして、前置された場所句は主語の指示対象の存在や出現する状況を設定する役割を果たし、動詞が表す事態よりも主語を提示する機能がある。このように、場所句の前置がない場合と同様、主語の情報の重要度のほうが動詞句の情報の重要度よりも高い場合に、倒置が用いられている。

第 5 章では、「情報の重要度」とは異なる概念である「焦点」に着目し、従属節中の主語のみが焦点を担うのかという問題を扱った。主節の倒置には主語の焦点化の機能があると考えられてきたが、従属節中の倒置に焦点化の機能があるのかは明らかではなかった。本論文の分析の結果として、従属節中の主語が焦点となる文脈が容認された従属節は、主節に後置された副詞節、間接疑問、一部の補文のみであり、制限的關係節や、主節に前置された副詞節においては、従属節中の主語のみを焦点とすることはできないことを示した。従属節内の倒置された主語が焦点化されて提示される可能性はあるものの、様々な従属節に現れる倒置の主な機能は主語の焦点化ではない。また、焦点とは別の観点として、主語に対比が含意されている場合の倒置についても考察を行い、従属節のタイプに関わらず、より重要な情報である主語を節末に置くために倒置が用いられることを示した。

6.1.2. 情報の重要度と焦点

以上の分析のまとめとして、情報構造と従属節中の倒置について考察を行う。まず、従属節中の情報構造の有無に関する問題を扱う。第 1 章、第 2 章で述べたように、従属節中に情報構造の存在を認めるかは、先行研究によって見解が分かれていた。Komagata (2003) や Mathesius (1975) は、情報構造は発話につき一つであり、従属節中には情報構造を認めていないのに対して、Partee (1997) は発話のトピックや焦点の内部にもさらに情報構造が存在すると考え、(1) のように従属節内にも情報構造を認めていた。

- (1) [TOP1 What convinced Susan that [S2 [TOP2 our arrest] [FOC2 was caused by HARRY]]] was [FOC1 a rumor that [S3 someone had [FOC3 witnessed Harry's confession.]]]

さらに、一部の従属節にのみ情報構造を認める立場は、従属節の前提と断定の区別に基づき、前提を表す従属節中には情報構造はなく、断定を表す従属節には情報構造が存在すると考える (平塚 2002, Lahousse 2011)。前提を表す従属節と考えられてきた従属節は、制限的關係節、接続法を用いる補文、時間、比較、目的を表す副詞節であり、断定を表す従属節は、非制限的關係節、直説法を用いる補文、理由や譲歩を表す副詞節である (Lahousse 2011)。第 5 章で述べたように、強調構文や倒置を用いて、制限的關係節内から主語を抜き出して焦点とすることは不可能であり、前提を表す従属節には情報構造がないという先行研究での主張に沿う結果となった。

- (2) B1: *C'est faux. C'est sa mère qu'elle n'aime pas le livre que lisait.
Lit. It's wrong. It's her mother that she doesn't like the book that was reading.

B3 : C'est faux. C'est le livre que lisait sa mère qu'elle n'aime pas.

Lit. It's wrong. It's the book that was reading her mother that she doesn't like.

(3) A : Paul et Jean sont professeurs. L'université où travaille Paul se trouve juste à côté de la gare.

Lit. Paul and Jean are teachers. The university where works Paul is right next to the train station.

B1 : #C'est faux. L'université où travaille [Jean]_{FOC} se trouve juste à côté de la gare.

Lit. It's wrong. The university where works Jean is right next to the train station.

制限的關係節中に焦点は存在しないという結果は、Partee (1997) の全ての従属節にトピックや焦点が存在するという主張に反するものである。Lahousse (2011) や Marandin (2011) では、関係節中の倒置された主語が焦点化されているのかという点は詳細に分析されていなかったが、本論文では制限的關係節中の主語のみが焦点となることはなく、制限的關係節中の倒置には主語の焦点化の機能がないことを指摘した。

一方で、前提を表すと考えられてきた従属節中にも焦点が認められることがある。Lahousse (2011) では、時間節や比較節などは前提を表す従属節として分析していたが、主節に後置されると断定を表しうることから、本論文では、副詞節の位置も考慮して分析を行った。その結果、主節に前置される副詞節は、主語を焦点化することはできないが、主節に後置された副詞節では主語の焦点化が可能であり、副詞節の位置によって焦点化の可能性が異なることを示した。

(4) A : Jean commençait à dîner, quand est arrivé Paul.

Lit. Jean was starting to dine when arrived Paul.

B1 : C'est faux. Il commençait à dîner, quand est arrivée [Marie]_{FOC}.

Lit. It's wrong. He was beginning to dine when arrived Marie.

さらに、間接疑問でも主語の焦点化が可能であり、主語が焦点となる場合には正置よりも倒置が好まれる。

(5) A: (Il y a une voiture et une machine pour la réparer.) Je comprends bien comment fonctionne cette machine.

Lit. (There is a car and a machine to fix it.) I understand how works this machine.

B1: C'est faux ! Tu comprends bien comment fonctionne [cette voiture]_{FOC}.

Lit. It's wrong! You understand how works this car.

Lahousse (2011) や Marandin (2011) などは前提を表す従属節の内部に情報構造は存在せず、焦点は存在しないと考える倒置を分析していたが、副詞節に関しては、その副詞節の位置によって、前提と断定の区別が異なり、焦点の生起可否も異なる。そして間接疑問は非断定を表す従属節であるが、焦点が現れることがあり、節内の倒置は主語を焦点として表しうるということを明らかにした。

さらに本論文が示したのは、焦点が認められるか否かに関わらず、従属節内にも情報の重要度が低いものから高いものへという順序で並べられるという、情報構造に近い構造が存在するということである。Lahousse (2011) は、制限的關係節のような前提を表す従属節には、情報構造がないため節内の倒置は制約がなく自由に倒置が起きると考えているが、なぜ倒置が起こるのか明らかではなかった。それに対し、本論文では、従属節中の主語が焦点とはなりえなくとも、発話における焦点やトピックの中に含まれる従属節中の内部構造は問うことができると考え、情報の重要度の概念を用いて分析した。第3章で検討したように、従属節のタイプや位置に関わらず、倒置の例では、動詞の意味が希薄であったり、語数が少ない、直接目的語などの補語を伴わないなど、動詞句の情報の重要度が低くなるか、主語の語数が多かったり、不定名詞句であるなど、主語の情報の重要度が高くなる特徴が観察された。

情報の重要度と焦点の関係について、まず従属節が発話における焦点に含まれる場合の、従属節内の語順について考察する。第5章でも述べたが、(6) の B3 のように、主節が強調構文である場合、発話の焦点は *l'université où travaille Jean* という制限的關係節を含む名詞句全体になる。

(6) A : Paul et Jean sont professeurs. L'université où travaille Paul se trouve juste à côté de la gare.

Lit. Paul and Jean are teachers. The university where works Paul is right next to the train station.

B3 : C'est faux. C'est l'université où travaille Jean qui se trouve juste à côté de la gare.

Lit. It's wrong. It's the university where works Jean, which is right next to the train station.

(6) の焦点に含まれる制限的關係節中の語順は、焦点やトピックとは別の概念である情報の重要度で考えることができる。制限的關係節中の主語には、対比が含意されているため、動詞句よりも主語のほうが重要な情報を担う。したがって、B3 の発話の焦点は名詞句全体であるのに対して、関係節中で重要度が高い要素は倒置された主語であり、焦点の内部にも情報の重要度という情報の流れが存在すると言える。

また (7) は 3.3.1.1 節で挙げた例であるが、この文の焦点は文末の疑問文 « Qui est le père ? » であり、主語の *La première question que ~* の名詞句全体はトピックと考えられる。

- (7) La première question que posèrent la mère et le père et la grand-mère et les deux tantes, et, deux ou trois jours plus tard, la totalité de la population de Green River, qui n'était pas très nombreuse et qui, par des canaux mystérieux, avait tout su presque aussitôt, c'était : « Qui est le père ? »

(D'Ormesson J., *La Douane de mer*, 1993: 427-428)

Lit. The first question that asked the mother and the father and the grandmother and the two aunts, and, two or three days later, the whole population of Green River, which was not very numerous and who, by mysterious channels, had known everything almost immediately, it was: "Who is the father?"

焦点の分析から、(7)の主語に係る制限的關係節中の主語は焦点とは言えない。しかし、語数が多く情報の重要度が高い名詞句であり、主語の情報の重要度が高いため倒置されている。このように制限的關係節など前提を表す従属節内部にも、情報の重要度が低い要素から高い要素という構造は存在すると言える。

次に Fuchs (1997) と本論文の比較を行う。Fuchs (1997) は、制限的關係節中にもテーマとレーマを認め、倒置された動詞句は關係節内のテーマ、倒置された主語をレーマと考えていた。テーマとレーマは Le Goffic (1993) の定義を参照し、テーマは「心理的主語 *sujet psychologique*」、レーマを「心理的述語 *prédicat psychologique*」と考え、テーマ / レーマの対立を、旧情報 / 新情報、既知 / 未知、付属的 / 重要、前提 / 断定などの対立と定義している。これらの対立は、本論文における情報の重要度が低い要素と情報の重要度が高い要素の特徴と共通点が多い。例えば、(7)の例について、Fuchs (1997) の考え方では、*que* 節内の動詞 *posèrent* は先行詞 *question* と共起しやすく、付属的な情報であるためテーマと判断され、主語 *la mère et le père ...* は重要な情報であるためレーマと分析されるだろう。本論文でも、動詞句 *posèrent* は先行詞 *question* 「質問」と共起しやすい動詞であるため、旧情報、既知情報に近い情報であるため、情報の重要度が低く、主語名詞句 *la mère et le père ...* は語数が多く情報の重要度が高いため倒置されていると考える。ただし、本論文では第2章で各特徴と情報の重要度への影響と倒置への影響を明示したが、Fuchs (1997) では、主語や動詞句、補語のどのような特徴がテーマ・レーマの判断に影響しているか十分に明確ではなかった。

さらに、情報の重要度による分析と異なるのは、情報の重要度は相対的な程度の差を考慮するのに対して、Fuchs (1997) はテーマとレーマというバイナリーな判断をするという点である。そしてバイナリーな判断は、主語がレーマ的であっても、必ずしも動詞句がテーマ的ではない例などで問題となる。例えば(8)のような例について、主語は意味的に重要であるため、レーマ的であると考察されているが、動詞句 *ne subsistaient que* は、制限表現を含んでおり、テーマと判断できるかは定かではない。

- (8) Un parc prenait la place du vieux manoir dont ne subsistaient que quelques ruines.
(Kristeva J., *Les Samouraïs*, 1990: 68)

Lit. A park took the place of the old manor of which subsisted only a few ruins.

(9) のように主語の前に状況補語がある場合も、動詞句がテーマ、主語がレーマと二分されるような明確な違いがあるとは言えない。

- (9) On regarde là-haut, on doute qu'on ait reçu quoi que ce soit de ce ciel gris perle, lumineux, où jouent à distance les miroitements de l'Océan.

(Rouaud J., *Les champs d'honneur*, 1990: 18-19)

Lit. We look up there, we doubt that we have received anything of this pearl-gray sky, luminous, where play remotely the shimmers of the Ocean.

また、(10) の *revivait* 「よみがえる」という動詞は主語と比較して相対的に重要度が低いとは考えられるが、明確に付属的な情報であるとは考えにくく、やはりテーマとレーマの区別だけでは倒置の例は説明しきれないと考えられる。

- (10) C'étaient des pays où revivait la conjonction qui avait fait la force des Chinois, des Romains, des Mongols (D'Ormesson J., *La Douane de mer*, 1993: 216)

Lit. They were countries where revived the conjunction which had made the force of the Chinese, the Romans, the Mongols

このように、テーマとレーマに明確に区別できない場合がある。本論文では、動詞句と主語名詞句の情報の重要度の高さを比べることで、倒置を説明し、動詞の情報の重要度が高い場合でも主語がさらに重要な情報と判断され、倒置が可能となると説明を与えた。

先行研究の中でも平塚 (2002) は制限的關係節中の倒置を分析対象とし、主語名詞句が先行詞の指示対象の確定に寄与している程度が動詞よりも高いこと、動詞は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎないということを主張していた。本論文における情報の重要度はこの説明を包含するものであり、先行詞の指示対象を確定するための情報としてより重要度が高い要素が主語であるということ、と言える。

6.1.3. 倒置の要因

Le Bidois (1952) や Wall (1980)、Fuchs (1997)、平塚 (2002) では、倒置に関わる主語や動詞句、その他の補語の特徴には触れられてきたが、本論文では各特徴が倒置に与える影響は一律ではなく、影響の強さが異なることも示した (第 3 章)。例えば、

主語が *ne...que* の限定の対象になっているとき、倒置が現れにくいとされる理由を表す副詞節でも必ず倒置となる。語数が多い主語も倒置を引き起こす力が強いが、Le Bidois も指摘するように、(11) のように従属節中の主語は定名詞句で単語数が短い名詞句であっても、対比を明確にするために倒置が用いられている。

- (11) Ces acteurs dont l'art, bien qu'il me fût encore inconnu, était la première forme, entre toutes celles qu'il revêt, sous laquelle se laissait pressentir par moi, l'Art.
(Proust; in Le Bidois, 1952: 379)

Lit. These actors whose art, although it was still unknown to me, was the first form, among all those which he wore, under which was sensed by me, the Art.

また、主語が有生物や人であるという要因は、倒置が好まれる特徴として考えられてきたが、その要因のみで倒置が使われる例は少数である。(12) は主語の有生性に加えて、動詞が先行詞 *le costume* との縁語関係によって倒置されている。

- (12) En cherchant un pyjama pour remplacer le costume de bonne coupe, mais usé et fripé, que portait Fitzgerald, Pandora ouvrit un tiroir : une douzaine de bouteilles de gin y étaient rangées avec soin.
(D'Ormesson J., *Tous les hommes sont fous*, 1986: 262)

Lit. Looking for pajamas to replace the well-cut but worn and wrinkled suit which was wearing Fitzgerald, Pandora opened a drawer: a dozen bottles of gin were neatly stored there.

そして無生物が主語である倒置の例も多数見られたことから、主語の有生性には強く倒置を引き起こす力はないと言える。先行研究で挙げられてきた倒置を好む特徴、あるいは倒置を拒む特徴があっても、必ず倒置となる（倒置を拒む）わけではなく、必ずしも重要ではない特徴もあることを指摘した。主語名詞句の情報の重要度が動詞句よりも高いということが、倒置に必要な条件ではあるものの、各特徴が相互に影響し合い語順が選択されると言える。

また、Marandin (2011) は PRES-INV や EXTR-INV に該当する倒置の例として、関係節や補文の例を挙げ、その倒置の特徴を挙げていたが、本論文における情報の重要度で説明を与えることが可能であると考えられる。Marandin (2011) はこの二つの分類の特徴に関して、倒置された動詞は静的な状態を表すということ、一方で主語が先行文脈との照応関係があるなどプロミネンスが低い主語名詞句の場合は倒置が容認されにくいことを指摘している。Marandin (2011) の言うプロミネンスが高い主語名詞句の特徴は詳述されていなかったが、本論文では、情報の重要度が高くなる主語名詞句の特徴として、名詞句の長さや定性などを挙げた。動詞の特徴についても静的な状態を表すという点だけではなく、先行詞との縁語関係や否定の有無、さらに補語の有無な

ども倒置に関係するとしてその特徴を詳述し、主語と動詞句の特徴がそれぞれ全く別ものとして倒置に作用しているのではなく、各特徴のバランスが語順に影響を与えていることを指摘した。

6.1.4. 場所句倒置

本節では、場所句倒置、すなわち前置詞句が前置された場合の倒置に関して、先行研究との関連を検討する。Lahousse (2011) は時空間を表す表現が動詞句よりも前に置かれると倒置が認められると指摘していたが、Marandin (2011) や平塚 (2002)、Fuchs (1997) を含め、従属節内が前置詞句－動詞－主語という語順については分析されていなかった。本論文ではこの語順を場所句倒置と呼び、第4章で扱った。

- (13) On dit qu'aux Antilles, où dans une même famille apparaissent des types si différents, les commères demandent, après la naissance d'un bébé : « Il est bien sorti, au moins ? ». (Nourissier F., *À défaut de génie*, 2000 : 177)
Lit. It is said that in the Antilles, where in the same family appear such different types, the gossips ask, after the birth of a baby: "Did he come out well, at least?"

この語順について Fuchs (1997) のテーマ・レーマの区別で考えると、節頭の前置詞句 *où dans une même famille* のみがテーマとなり、動詞句と主語 *apparaissent des types si différents* がレーマになるのか、前置詞句から動詞句まで *où dans une même famille apparaissent* がテーマで、主語 *des types si différents* がレーマであるのか明らかではない。また、平塚 (2002) の言う先行詞の指示対象の同定への寄与という点で考えると、動詞句よりも主語のほうが重要な役割を果たしているとは言えるかもしれないが、関係代名詞と動詞の間に前置詞句が挿入されているため、動詞は先行詞と主語の関係を表すというより、前置詞句で設定された状況における主語の状態や動作を表すと考えられる。情報の重要度で考えると、前置詞句は主語が存在・出現する状況を設定する場面トピックの役割を担うため、その従属節の伝達内容の主要な情報ではない。そのため、情報の重要度は低く、その後の語順は主語と動詞句の情報の重要度を比較して考え、動詞句よりも情報の重要度が高い場合に倒置が起きると言える。

また、第3章、第4章では扱わなかったが、状況補語が倒置された主語の後にある場合もある。(14) では、倒置された主語 *Néron* の後に、*pour les comédiens et les joueurs de harpe* という状況補語が続いている。

- (14) le goût que témoignait Néron pour les comédiens et les joueurs de harpe
(Dutoud; in Wal 1980: 107)
Lit. the taste that testified Néron for comedians and harp players

(14) の状況補語は、この関係節で最も語数が多い要素であり、情報の重要度が高い要素と言える。このように動詞－主語－状況補語の語順では、主語は動詞よりも情報の重要度は高いが、状況補語より重要度が低く、最も情報の重要度が低いのが動詞、最も情報の重要度が高いのが状況補語と考えられる。

場所句倒置に関する量的な分析では、場所句の前置があるほうが倒置が起りやすいことを示した。Lahousse (2011) では、前提を表す従属節では、動詞句の前に時空間を表す表現がなくても倒置が可能であるとは述べているが、それによって倒置の頻度が変わるか、という点については扱われていなかった。本論文では、コーパスによる調査から、従属節の前提と断定の区別に関わらず、場所句が節頭にあるほうが倒置の頻度が高くなることを明らかにした。従属節内の場所句は、動詞の後にあると倒置を拒む要因となるが、節の頭にあれば倒置を引き起こす要因となる。

6.1.5. 従属節のカテゴリーと倒置

以上、主に関係節中の倒置や場所句倒置に関する先行研究と比較考察してきたが、本論文では関係節以外の補文や間接疑問、副詞節についても分析を行った。平塚 (2002) の先行詞の指示対象の同定への寄与と、本論文における情報の重要度を、各従属節に応用すると、次の条件に該当するときに倒置が起りやすいと考えられる。

- ・非制限的關係節は、先行詞の指示対象について付加する情報の中で主語の情報の重要度が高い。
- ・時間を表す副詞節では、その時間を特定するために重要な情報が主語である。
- ・比較を表す副詞節は比較の対象が主語の指示対象である。
- ・目的を表す副詞節は、その目的を聞き手に理解されるうえで重要な情報が主語である。
- ・*sans que* 節では、除外される事態を特定するうえで重要な情報が主語である。
- ・理由節では、その理由を理解するうえで重要な情報が主語である。
- ・譲歩節では、主節の帰結とは相反する条件を表すうえで重要な情報が主語である。

例えば (15) の時間節の倒置は、*lorsque* 節が表す時間を特定するうえで重要な情報を主語が表している。(16) の比較節では、主節の *cette initiation graduelle* との比較の対象の情報として、比較節中の主語のほうが情報の重要度が高いため、倒置されている。

(15) Lorsque vint le petit matin, elle mit le feu à l'étoupe et libéra les hirondelles une à une. (Lanzmann J., *La Horde d'or*, 1994: 265)

Lit. When came the dawn, she set fire to the tow and freed the swallows one by one.

- (16) [...] cette initiation graduelle était érotiquement plus captivante que ne l'aurait été une licence d'un seul coup totale. (Matzneff G., *Ivre du vin perdu*, 1981: 54)

Lit. [...] this gradual initiation was erotically more captivating than would have been a one-shot license.

このように、制限的關係節以外の従属節についても、情報の重要度によって倒置を説明することができる。一方 Fuchs (1997) のテーマとレーマでは、動詞句が付属的な情報で、主語が重要な情報ということは言えるかもしれないが、動詞句が旧情報、前提を表しているとは考えにくく、明確に説明できない。

關係節以外の従属節における倒置を扱った先行研究として、Lahousse (2011) がある。Lahousse (2011) は、従属節を断定・非断定で区別し、非制限的關係節や理由・譲歩を表す副詞節は、断定を表す従属節であることから、主語が発話における主要なトピックと解釈されないような特徴が必要であるため、それ以外の従属節よりも倒置されにくいということを指摘していた。本論文では、従属節のタイプと接続詞ごとに倒置の頻度を明らかにし、理由節や譲歩節では絶対的に倒置の頻度が低く、非制限的關係節は理由節や譲歩節ほど倒置が稀なわけではないが、制限的關係節と比較すると倒置の頻度が低いことを示した。また、Lahousse (2011) では、非断定を表す従属節中には情報構造がないため、主語がトピックと解釈されない特徴がなくとも倒置が起こると言う指摘のみであったが、本論文では、非断定を表す従属節である制限的關係節や接続法を用いる補文、時間や比較、目的を表す副詞節においても、倒置には主語のほうが動詞よりも情報の重要度が高いという特徴が該当し、情報の重要度が高い主語を節の後方に置くという倒置の機能があることを示した。

いずれの従属節においても、主語の情報の重要度が高い場合に倒置が起きていることから、従属節の中にも今まで言われてきた情報構造に近いものが存在すると言える。この構造があるため、主語をより重要な情報として示すために倒置を用いることが可能であり、主語を重要な情報として示すという倒置の機能はあると考えられる。

6.2. 残された課題

本論文では、従属節中の倒置と情報構造について論じたが、その中で扱うことができなかつた問題についてまとめる。

第3章及び第4章では、従属節中の倒置は、主語名詞句と動詞句の情報の重要度を比較した際に、主語名詞句の担う情報の重要度のほうが高い場合に生起することを示した。この条件を満たす特徴を挙げたが、各要因のそれぞれがどの程度、倒置の起因となっているのかという点については明確な例数を提示することができなかつた。先

行研究において、従属節中の倒置された主語が不定名詞句である割合は、定名詞句よりも高いわけではないことが明らかにされている (Wall 1980、平塚 2002)。その他の倒置の特徴である、制限的關係節が主語名詞句に付随しているかどうかや、動詞句の特徴については、統計的には検討されていない。統計的に調査することによって、倒置が好まれる要因についてより明確にすることができる。

また、従属節の前提と断定の分類の問題については、深く考察することができなかつた。伝統的に前提を表すものと考えられてきた従属節であっても、文脈によっては新しい情報を聞き手（読み手）に伝達することになり、断定的に働く場合があると考えられる。例えば、定名詞句を先行詞とする制限的關係節は、聞き手にとって同定可能な情報として表す、前提の従属節と考えられている。しかし、下の例のように、統語的には制限的關係節であっても、意味的には主節のように断定的な情報を表す場合もある。

- (17) Le moment où sous le chemisier apparaît le soutien-gorge, qui est toujours plus compliqué, adulte, dentelle noire, plus dégoûtamment transparent qu'on ne l'attendait. (Nourissier F., *À défaut de génie*, 2000: 544)
Lit. The moment when under the blouse appears the bra, which is always more complicated, adult, black lace, more disgustingly transparent than expected.

(17) では、一文が一つの名詞句で構成されており、この制限的關係節は同格的な關係節となり、主節のように新しい情報を伝達する關係節となっていると考えられる。このように、統語的には制限的關係節であっても、前提の情報として表されていない場合もあり、従属節が断定を表す現象には、従属節の主節化¹の問題につながると言える (Evans 2007)。フランス語学の中では、話し言葉で用いられる主節化した補文や、仮定を表す *si* 節、理由を表す *parce que* 節などを対象とした、脱従属節化の研究が行われている (Debaisieux 2013, Patard 2014)。

- (18) Et si la plume était un outil de chevalerie ?
(Orsenna, *Grand amour*, 1993; in Patard 2014: 109)
Lit. What if the feather was a tool of chivalry?

(18) の *si* 節は、主節に従属する節として働くはずが、主節が省略されて主節のように働いている。書き言葉における断定を表す従属節と非従属節化との関連について考察の余地があり、今後の課題としたい。

¹ 従属節の主節化は *insubordination* あるいは *desubordination* と呼ばれ、脱従属節化や非従属節化という日本語訳が与えられている。フランス語学では *insubordination* が用いられている。

参考文献

- Abeillé, A., & Godard, D. (2007), “Les relatives sans pronom relatif”, *Le français parlé au XXI^e siècle: normes et variations dans les discours et en interaction*, 2, 37-60.
- 朝倉季雄 (2002), 『新フランス文法事典』、白水社.
- Asher, N. (1999), “Discourse and the Focus/Background Distinction”, *Focus: Linguistic, cognitive, and computational perspectives*, 247-267.
- Bailard, J. (1981), “A functional approach to subject inversion”, *Studies in Language*, 5(1), 1-29.
- Birner, B. J. & G. Ward (1998), *Information Status and Noncanonical Word Order in English*, John Benjamins.
- Blinkenberg, A. (1928), *L'Ordre des mots en français moderne*, Bianco Lunos Bogtrykkeri.
- Bolinger, D. (1977), “Another glance at main clause phenomena”, *Language*, 53(3), 511-519.
- Bonami, O., & Godard, D. (2001), “Inversion du sujet, constituance et ordre des mots”, J.-M. Marandin (ed) *Cahier Jean-Claude Milner*, Editions Verdier, 117-174.
- Bonami, O., Godard, D., & Marandin, J. M. (1998), “French subject inversion in extraction contexts”, *Proceedings of FHCG*, 98, 101-112.
- Bonami, O., Godard, D., & Marandin, J. M. (1999), “Constituency and word order in French subject inversion”, *Constraints and Resources in Natural Language Syntax and Semantics*, 21-40.
- Bresnan, J. (1994), “Locative inversion and the architecture of universal grammar”, *Language*, 70(1), 72-131.
- Butt, M. (2010), “The light verb jungle: Still hacking away”, *Complex predicates in cross-linguistic perspective*, Cambridge University Press, 48-78.
- Combettes, B. (2017), “La postposition du sujet nominal dans les subordonnées : aspects diachroniques”, Roig, A. (ed), *L'Inversion (pro) nominale du sujet*, *Verbum* 39(2), Université de Nancy.
- Coopmans, P. (1989), “Where stylistic and syntactic processes meet: Locative inversion in English”, *Language*, 65(4), 728-751.
- Debaisieux, J.-M., (2013), *Analyses linguistiques sur corpus: Subordination et insubordination en français*, Lavoisier.
- Dik, S. C. (1989), *The theory of functional grammar, Part I: The structure of the clause*, Hengeveld, K. (ed.), Mouton de Gruyter.
- Erteschik-Shir, N. (1997), *The dynamics of focus structure*. Cambridge University Press.
- Erteschik-Shir, N. (2007), *Information structure: The syntax-discourse interface*, Oxford University Press.

- Erteschik-Shir, N., & S. Lappin (1979), "Dominance and the functional explanation of island phenomena". *Theoretical linguistics* 6(1-3), 41-86.
- Evans, N. (2007), "Insubordination and its uses", *Finiteness: Theoretical and empirical foundations*, Oxford University Press.
- Fournier, N. (1997), "La place du sujet nominal dans les phrases à complément prépositionnel initial", C. Fuchs (ed) *La place du sujet en français contemporain*, Editions Duculot, 97-132.
- Fuchs, C. (1997), "La place du sujet nominal dans les relatives", C. Fuchs (ed) *La place du sujet en français contemporain*, Editions Duculot, 135-178.
- Fuchs, C., & Fournier, N. (2003), "Du rôle cadratif des compléments localisants initiaux selon la position du sujet nominal", *Travaux de linguistique*, 47(2), pp. 79-109.
- Fuchs, C. (2006), "La place du sujet nominal en français : de la syntaxe à l'énonciation", F. Hrubaru & A. Velicu (eds), *Enonciation et syntaxe*, Echinex, 9-25.
- Fuchs, C. (2009), "La postposition du sujet nominal : paramètres linguistiques et effets stylistiques", *L'Ordre des mots à la lecture des textes*, Presses universitaires de Lyon.
- Gildin, Bonny L. (1980), "Subject Inversion in French: Natural Word Order Or *l'arbitraire du signe?*", Nussel F.H.Jr. (ed), *Contemporary Studies in Romance Languages*, Indiana University Linguistics Club, 58-72.
- Givón, T. (1983), "Topic continuity in Discourse: An Introduction", *Topic continuity in Discourse: A Quantitative Cross Language Studies*, John Benjamins.
- Gournay, L. (2006), "Qu'est-ce qui distingue l'inversion absolue de l'inversion locative en français?", *Linguisticae Investigationes*, 29(1), 91-102.
- Green, G. M. (1976), "Main clause phenomena in subordinate clauses", *Language*, 52(2), 1976, 382-397.
- Guillemin-Flescher, J. (1981), *Syntaxe comparée du français et de l'anglais: problèmes de traduction*, Editions Ophrys.
- Guimier, C. (1997), "La place du sujet clitique dans les énoncés avec adverbe initial", C. Fuchs (ed) *La place du sujet en français contemporain*, Editions Duculot, 43-96.
- Gundel, J. K. (1999), "On different kinds of focus", Bosch, P. & R. A. Sandt (ed.), *Focus*, 293- 305.
- Haiman, J., & Thompson, S. A. (Eds.) (1988), *Clause combining in grammar and discourse*, John Benjamins Publishing.
- Halliday, M. A. K. (1994), *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976). *Cohesion in English*, Longman.
- 平塚徹 (2002), 「フランス語の関係節における文体的倒置について」, 『京都産業大学論集—外国語と外国文学系列』 29, 119-163.
- 古川直世 (1983), 「関係節の指示機能と記述機能について」, 『フランス語学研究』 17, 61-77.

- Hooper, P. J. & S. A. Thompson (1973), "On the applicability of root transformations", *Linguistic Inquiry*, 4(4), 465-497.
- Hopper, P. J., & Thompson, S. A. (1980), "Transitivity in grammar and discourse", *language*, 56 (2), 251-299.
- 岩田早苗 (1997), 「フランス語の" Quand+ imparfait" に関して」, 『関西フランス語フランス文学』, 3, 67-75.
- Jackendoff, R. S. (1972), *Semantic interpretation in generative grammar*, The MIT Press.
- Kiss, É. K. (1998), "Identificational focus versus information focus", *Language*, 74, 2, 245-273.
- Kleiber, G. (1987), "Relatives restrictives/relatives appositives: dépassement(s) autorisé(s)", *Langages*, 88, 41-63.
- Komagata, N. (2003), "Information structure in subordinate and subordinate-like clauses", *Journal of Logic, Language and Information*, 12, 301-318.
- 河野継代 (2012), 『英語の関係節』, 開拓社.
- Korzen, H. (1983), "Réflexions sur l'inversion dans les propositions interrogatives en français", *Revue Romane* 24 (numéro spécial), 50-85.
- Krifka, M. (1993), "Focus and presupposition in dynamic interpretation", *Journal of Semantics* 10, 269-300.
- 久野暉 (1978), 『談話の文法』, 大修館書店.
- Kuno, S. & E. Kaburaki (1977). "Empathy and Syntax", *Linguistic Inquiry*, 8 (4), 627-672.
- Lahousse, K. (2006a), "NP subject inversion in French : two types, two configurations", *Lingua*, 116 (4), 424-461.
- Lahousse, K. (2006b), "L'assertion et l'inversion du sujet nominal dans les subordonnées adverbiales", *Linguisticae Investigationes*, 29 (1), 113-124.
- Lahousse, K. (2011), *Quand passent les cigognes. Le sujet nominal postverbal en français moderne*, Presses Universitaires Vincennes.
- Lahousse, K. (2017), "Dépendance pragmatique dans l'inversion « thétiq ue » en français", *Verbum* 39 (2), 271-288.
- Lambrech t, Knud (1994), *Information Structure and Sentence Form, Cambridge studies in linguistics*, 71, Cambridge University Press.
- Le Bidois, R. (1952), *L'inversion du sujet dans la prose contemporaine (1900-1950)*, Artrey.
- Le Goffic, P. (1997), "Forme et place du sujet dans l'interrogation partielle", C. Fuchs (ed) *La place du sujet en français contemporain*, Editions Duculot, 15-41.
- Le Querler, N. (1997), "La place du sujet nominal dans les subordonnées percontatives", C. Fuchs (ed) *La place du sujet en français contemporain*, Editions Duculot, 179-203.

- Levin B. & Rappaport Hovav M. (1995), *Unaccusativity. At the Syntax-lexical Semantics Interface*, MIT Press.
- Marandin, J.-M. (1997), *Dans le titre se trouve le sujet. L'inversion locative en français*, Mémoire d'habilitation, Université de Paris7.
- Marandin, J.-M. (2003), "Inversion du sujet et structure de l'information dans les langues romanes", D. Godard (éd), *Langues romanes. Problèmes de la phrase simple*, éditions du CNRS, 1-59.
- Marandin, J.-M. (2011), "Subject inversion in French. The limits of information structure", *Proceedings of the HPSG 2011 Conference*, 327-347.
- Marandin, J.-M. (2019), "Subject Inversion and Discourse in Romance", Godard D. (ed), *Fundamental Issues in the Romance Languages*. CSLI Publications, 319-367.
- Mathesius, V. (1975), *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis*, J.Vachek (ed), The Hague, Mouton.
- Muller, C. (2002), "Inversion finale du sujet ou inversion post-verbal? ", *Cahiers de Grammaire 27*, 121-145.
- Nakagawa, N. (2016), *Information Structure in Spoken Japanese: Particles, Word Order, and Intonation*, 博士論文.
- 中島平三 (編) (2001), 『[最新]英語構文事典』, 大修館書店.
- 丹羽卓 (1982), 「現代フランス語の主語倒置ーその構造と機能」, 『フランス語学研究』 12.
- Partee, B. (1996), "Allegation and local accommodation", B. H. Partee & P. Sgall (eds), *Discourse and meaning*, John Benjamins, 65-86.
- Patard, A. (2014), "Réflexions sur l'origine de l'insubordination. Le cas de trois insubordonnées hypothétiques du français", *Langages*, (196), 109-130.
- Rochement, M. (1978), *Focus in generative grammar*, Benjamins.
- Roig, A. (2017). *L'inversion (pro)nominale du sujet*, *Verbum* No. 39/2, Université de Nancy.
- 高見健一 (1995), 『機能的構文論による日英語比較』, くろしお出版.
- 高見健一, 久野暉 (2006), 『日本語機能的構文研究』, 大修館書店.
- 谷口永里子 (2018), 「フランス語の従属節中の文体的倒置と情報構造」, 『人間・環境学』 27, 127-139.
- 谷口永里子 (2019), 「フランス語の従属節中の主語倒置についてー焦点か意味の軽重かー」, 『フランス語フランス文学研究』, 115, 127-141.
- 谷口永里子 (2021), 「従属節中の場所句倒置について」, 『関西フランス語フランス文学』, 27, 3-14.
- 東郷雄二・大木充 (1986), 「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」, 『フランス語学研究』 20, 1-15.
- 東郷雄二・大木充 (1987), 「非人称構文の談話機能について-倒置構文との比較をめぐ

- って-」, 『フランス語学研究』 21, 1-19.
- 東郷雄二 (2005), 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」, 『指示と照応に関する語用論的研究』 科学研, 究費補助金成果報告書.
- Van Valin, R. D., Jr. & LaPolla, R. J. (1997), *Syntax: Structure, meaning, and function*, Cambridge University Press.
- Vergnaud, J. R. (1974), *French relative clauses*, Doctoral dissertation, MIT.
- Vinay, J. P., & Darbelnet, J. (1995), *Comparative stylistics of French and English: a methodology for translation*, John Benjamins Publishing.
- Vogeleer, S. (1998), "Quand inverse", *Revue québécoise de linguistique* 26 (1), 79-101.
- Wall, Kerstin (1980), *L'inversion dans la subordonnée en français contemporain*, *Studia Romanica Upsaliensia* 30, Acta Universitatis Upsaliensis.
- Zimmermann, M. (2008), "Contrastive focus and emphasis", *Acta Linguistica Hungarica*, 55(3-4), 347-360.
- Zubizarreta, M. L. (1998), *Prosody, focus, and word order*, MIT press.